

ようざん認知症介護事例発表会

小規模多機能型居宅介護

2019.3

2019/7/24

目次

- 1.綺麗にしておきたい！・・・のだけど・・・
ケアサポートセンターようざん藤塚 p1
- 2.「大丈夫」言葉の背景を探る～穏やかな在宅生活とレスパイトケア～
ケアサポートセンターようざん並榎 p4
- 3.ありがとう!!勘弁してください
ケアサポートセンターようざん飯塚 p9
- 4.「見えない」に負けない 明日へ続く光～故郷へ想いをはせて～
ケアサポートセンターようざん中居 p13
- 5.ストレングスモデル
ケアサポートセンターようざん栗崎 p17
- 6.～ただ、穏やかな気持ちで過ごしたい～
ケアサポートセンターようざん倉賀野 p21
- 7.今日もよろしくお願ひします。頼りにしています。
ケアサポートセンターようざん貝沢 p26
- 8.「特別」じゃない「当たり前」のこと。
ケアサポートセンターようざん双葉 p30
- 9.「ありがとうございます。助かりました！」～“不安”に寄り添い、解決に向けての支援～
ケアサポートセンターようざん石原 p33
- 10.家族との絆～ハートフルケア～
ケアサポートセンターようざん p37
- 11.Aさんの「夕方になったから家の仕事をしないといけないので帰ります。」
の意味を知る。
ケアサポートセンターようざん大類 p41
- 12.俺のやりてえ事は…
ケアサポートセンターようざん小塙 p45

綺麗にしておきたい！・・・のだけど・・・

ケアサポートセンターようざん藤塚

宮原 史尚

【はじめに】

人間である以上、清潔を保つことは生きていく上で重要な事です。部屋や身体を清潔にすることによって様々な病を予防できるだけでなく、精神衛生上、毎日を生き生きとした生活を送ることができます。したがって、ほとんどの人が身辺を綺麗にしておきたい、という欲求を持っています。今回は几帳面ですが、それ故に清潔を保てなくなってしまったり、杖などの物品を壊されてしまう、排泄を失敗されてしまう利用者様に対して、その方の性格や強みを生かし、解決に導いた事例を発表させていただきます。

【対象者紹介】

- ・氏名：A様(男性)
- ・年齢：83歳
- ・既往歴：アルツハイマー型認知症、2型糖尿病、右大腿骨転子部骨折
- ・生活歴：群馬県某所に生まれる。小学2年生のときに両親を亡くされる。その後、4人の兄弟と共に親戚の叔父の家に預けられる。また、早くから兄を亡くされ、自分がしっかりしなくてはいけない、と思うようになる。その影響もあり、小さいときから掃除や洗濯などの家事を行うようになり、奥様と結婚後も料理や食器洗い等の家事を積極的に行われる。家族を養うため、自動車修理の仕事を行う。昔から真面目で不正なことはせず、綺麗好きで几帳面、穏やかな性格をされている。

【課題①】

ご自分の杖などの物品を弄ってしまい、壊されてしまう。

【解決への取り組み】

- ・必要な時以外は、杖などの物品をA様の近くに置かず、職員で預からせていただく。
- ・A様が「杖はありますか?」と尋ねられることがある場合、修理に出している、等と伝え、ご納得いただけるような声掛けを行う。
- ・清拭・おしごりたたみなどの職員の手伝いをしていただいたり、レクリエーションの参加を促し、気を紛らわしていただけるよう工夫する。

【結果】

杖を預かることで、気になってるもののが壊すことはなくなった。たまに、職員に杖はどこにあるか聞かれる事がある。落ち着いて頂くために、「修理に出していますが、Aさんが帰るころには戻ってきますよ」とお伝えすると納得して頂け、落ち着かれた。

また、A様の強みを生かし、洗濯物たたみやレクリエーション等を行って頂くことによ

り、気を紛らわせて頂くことにつながった。終わった後に「ありがとうございました。とても助かりました。」と伝えると、嬉しそうな表情を浮かばれ、「またやりますよ」と言って頂き、役割を持っていただきことにもつながった。

上記のような工夫により、杖などの物品を壊されることはなくなった。

【課題②】

ご自分の腕やテーブルを清潔にしようと唾液を塗り込んでしまう。また、洗面台で歯磨き後や手洗いが終わった後に「素手」でシンクを掃除しようとされ、結果的に手を汚されてしまう。

【解決への取り組み】

- ・布巾を渡して、テーブル拭きをお願いする。
- ・腕に唾液を塗り込んでしまったときは、「腕を洗いに行きますか」と声掛けを行い、洗って頂けるよう促す。
- ・手洗いが終わった直後、掃除を始めてしまいそうな時は、職員が後で掃除しておくことを伝え、席に戻って頂けるよう促す。

【結果】

テーブルに唾液を塗り込んでしまいそうな時は布巾を渡し、テーブル拭きをお願いしてみたところ、夢中になってテーブル拭きを行って頂いた。その結果、唾液を塗り込むことは少なくなった。腕に唾液を塗り込んでしまったときは、「腕を洗いに行きますか」と声掛けを行う事で、腕を洗い流すことができた。

シンクを素手で掃除し始めてしまいそうな時には、職員が後で掃除しておくことを伝え、手を拭いて頂いた後、別の場所へ誘導することで素手での掃除を防ぐことが出来た。

上記の取り組みにより清潔を保っていただけることに繋がった。

【課題③】

トイレにお連れした際、排泄をした後に、臀部を素手で拭こうとされてしまったり、ご自身の来ているシャツで陰部を拭こうとされてしまう。

【解決への取り組み】

- ・排尿の際には、便座に座って頂いた直後に、トイレットペーパーを渡す。
- ・排便の際には、事前に清拭を用意しておき、職員で臀部を拭かせていただく。

【結果】

排尿後、A様の着ているシャツで陰部を拭くことを防ぐため、排尿後ペーパーを渡し「終わったらこれで拭いてください」と伝えた。結果、シャツでは拭かず、ペーパーで拭いて頂けることに繋がった。

排便後、立っていただいた直後にご自身の素手で臀部を拭かれてしまう。排尿後と同じようにペーパーを渡したが、拭く力が強い為、ペーパーを突き抜きてしまい、結果的に手をよ

ござれてしまった。したがって、事前に清拭を用意しておき、職員で拭かせて頂くことで手を汚される事を防ぐことができた。

【終わりに】

今回、綺麗好きな性格の方ではあったが、結果的にご自身や周りのものを汚されたり、物を壊してしまう方に対して、どのように工夫すれば解決でき、A様が納得していただけるかを考えました。結果的に清潔を保つことができ、A様自身もテーブル拭き等をすることで、ご自身の役割を持つことにも繋がり、物を壊すことではなくなりました。

今後も、今回の事例のように個人の強みを生かし、認知症だからと諦めず、ご自身の納得できる結果がもたらせるような介護を心がけていきたいと思います

「大丈夫」言葉の背景を探る

～穏やかな在宅生活とレスパイトケア～

ケアサポートセンターようざん並榎

発表者 梅山史織

高山哲夫

＜はじめに＞

皆様は、レスパイトケアという言葉を耳にしたことはありますか？

レスパイトケアとは、在宅介護をしているご家族を一時的に介護から解放する、主にご家族に対するケアの事を言います。ご家族の心身の疲労を軽減する事は、在宅介護の継続には必要不可欠と言えるでしょう。

そのために、介護事業所を利用されている方は多いと思われます。

ですが、介護が必要となり、ご家族や他者の手を煩わせる事への申し訳なさから、ご自身の思いを押し殺しかねない危険性を孕んでいるものもあります。

今回、事例を取らせて頂いたきっかけは、ある利用者……A様の「大丈夫だよ」という言葉が気になったからです。施設内ではうつむいている事が多く、ご家族や職員に対して、いつも「大丈夫」と答え、あまり要望を表出されない方でした。私達が声をかけても「大丈夫」……ご家族が声を掛けても「大丈夫」……私はA様と話をするたびに不安になりました。人生経験が豊富なわけではないですが、「大丈夫」という時は大抵、大丈夫じゃない時が多い気がする……そう思った私は、所長と相談し、今回の事例をさせて頂きました。

そこで今回は、ご家族のレスパイトケアをしつつも、施設内にて「ご本人」の要望を探る事からスタートしました。その上で、施設利用で単調になりがちな日々の、ストレス発散を兼ねたアプローチを図り、心のケアという方向から、QOLの向上を目的とした取り組みを行いました。

まだまだ途中経過ではありますが、この場をお借りしてご報告させて頂きます。

＜対象者様紹介＞

A様 男性 78歳 要介護度4

障害高齢者の日常生活自立度 B2

認知症高齢者の日常生活自立度 II a

既往歴 右視床出血（H30）糖尿病 心房細動 高血圧

左半身に麻痺・拘縮見られ、歩行困難。移動には車椅子を使用。

＜生活歴・性格・趣味＞

出身・家族構成 A県出身。八人兄弟の六番目。

仕事 染色業（主に草木染）。手作業で職人として県内で仕事をされていた。

性格 穏やかで几帳面

趣味等 植物に関わる事 ドライブ 音楽鑑賞（クラシック） 読書

ご家族との関係 現在はキーパーソンである奥様・長男と暮らしている。次男・三男は県外在住。

仕事一筋であったが、忙しい時でも食事は家族と共にしたり、町内の行事に参加されるなど、ご家族・地域の方々との関わりをとても大事にされていた。

現在の家族関係は良好な様子。週に一度はご本人と奥様、息子様で外出されている。

＜施設利用までの経緯＞

H30 3月 左麻痺出現、緊急搬送。右視床出血と診断され入院。保存的治療をされる。

H30 4月 リハビリ目的で転院。

退院後の生活拠点として、施設入所ではなく家族の強い要望で在宅での生活を希望され、小規模多機能型居宅介護を利用しながら様子を見ていく事となる。

＜現在のサービス利用状況＞

通所 週に3日～4日 9時～17時

月曜日のみ、9時～15時（在宅マッサージの為）

訪問 週に1日 18時前後に移乗介助

宿泊 週に1日（水曜日）

＜課題＞

- ・ご本人のやりたい事・楽しいと感じる事を探っていく
- ・要介護状態及び、施設利用に伴うストレスの緩和
- ・うつむいたまま寝そうにされている事が多いので、傾眠状態の改善
- ・不活発による心身の機能低下の予防

＜取り組み及びその結果＞

【取り組み① ちぎり絵】

目的

- ・芸術関係の仕事をされていたので、お花紙ではあるものの、色彩を扱うことで、ご本人の興味を持たれることを知る。
- ・お花紙をちぎり、貼り付けていく事で手や腕の運動になる。
- ・作業を通して会話をする事で、傾眠を防ぐ。

方法

- ・ご本人のこいのぼりの絵を元に下絵を描き、配色のアドバイスをして頂く。

- ・その下絵を元に、お花紙・模造紙を用いてご本人・他の利用者様を交えて施設内の飾りを作る。

結果

最初の内は作品作りを手伝って下さいましたが、そこまでの反応はなく「嫌」とも「やりたい」ともないご様子でした。ですが、職員との会話では時折笑顔を見せて下さるなど、雑談には応じて下さいました。その中でのお花の話から、A様の地元の話になり「○○公園がきれいですよね」という話を、同郷の職員と話されていました。話の中でその花の特徴を教えて下さるなど、植物の話になると口数の増えるA様的一面を垣間見る事が出来ました。

【取り組み② 毎日の個別機能訓練】

在宅マッサージの先生より、立位保持の機能訓練を薦められる。

方法

- ・施設内の手すりを使い、立ち上がりの練習
 - ・立位保持の訓練の為に、捕まり立ちの状態で60秒間キープ
 - ・片足が動かせるので、車椅子での自走の訓練
- } 休みながら、合計3セット行う。

結果

気乗りしない日もありますが、真剣な様子で機能訓練に参加されています。排泄介助時に、「いい感じですね」と伝えると「日頃の成果ですかね?」と笑顔見せて下さいましたが、膝への負担を訴えられたため、在宅マッサージの先生の指示を仰ぎ、機能訓練内容を変更。ご本人に痛みの有無を聞きつつ、膝への負担は弱めにするようアドバイスを受けました。また、途中から片足が動かせるということで、車椅子での自走の訓練をすると、上体のすり下がりは見られるものの、ゆっくりと右足で前進されています。自走の訓練について奥様に報告すると「徐々にですかね?」と笑顔を見せて下さいました。その時の事を「奥様が嬉しそうにされていましたよ」とご本人に報告すると「喜んでいましたかね?」と笑顔で嬉しそうな様子でした。A様の状態を見つつ、立位保持の機能訓練と合わせて、今後も継続して行きたいと思います。

【取り組み③ 外出レクリエーション】

目的

- ・ストレス解消
- ・気分転換
- ・覚醒を促す

方法

- ・車いすでの近隣の外気浴へお誘いする。
- ・車を使用し、ドライブ及びいちご狩りといった外でのレクリエーションを実施する。

結果

どこか行きたい所はありますか？と尋ねると、「ここに、というのは思いつきませんが、皆さんが行くなら一緒に連れて行って下さい」と話されました。

また、トイレや横になりたいといった必要最低限の要望が主で、要望を尋ねても「大丈夫です」と話される事の多いA様から「この後外出するのであれば起きています、しなければ横になりますが……」と言って下さるなど、外出へ興味・意識はあるご様子です。

ご家族からの情報で、自然を見に行くのが好きということで、これは可能な範囲で継続して行きたいと思います。

奥様より、仕事柄旅行に行くのが難しく、旅行に行きたいねと話していた矢先の病気だと伺っていたので、旅行とまではいきませんが、ご夫婦でいつもと違う時間を楽しんで頂ければと、いちご狩りに奥様をお誘いしました。いちご狩りには日程の関係でお連れできませんでしたが、奥様の都合の良い時に梨狩りなどにもお誘いできればと思います。

ご本人様と関係の深い植物園にも、奥様と一緒に行かせて頂きました。植物園に行き、展示室へ入ると……A様の様子が一気に変わります。それはまるで水を得た魚のごとく！日頃口数少ないA様が急に饒舌となり、展示室の写真や作品を見ながら、「緑色に染めるには、藍色で染めた後に黄八丈で染めます」といった製作過程や、草木染に使われる素材についてとめどなく語り始めました。その一つ一つ丁寧に説明をする姿、自分の先生としての在り方について語られる姿は、職人であり先生としてのものでした。

<考察・まとめ>

「大丈夫」…その言葉の裏には、やはり、A様の周りに迷惑をかけたくない、という気持ちがありました。また、その気持ちだけでなく、日々の関わりやご家族様の協力により、A様のお人柄を知り、新たな一面を見つけさせて頂きました。

口数少なく、私達が話しかけても「大丈夫です」と話される事の多いA様。そんなA様の、職員との些細なジョーク等で見せる日常生活での笑顔、植物や染料についての知識を語る姿や、花見についての持論を語られる職人として的一面。また、ご自宅へ訪問後「ご自宅へお邪魔して、奥様とお話させて頂きました」と伝えると、「元気にしていましたかね？」と奥様を気遣う様子等から、家族思いの素敵なご主人であり、お父さんである一面等々、事例を取らせて頂いたことで、A様という一人の利用者様の、内包している個性をもっと深く知る事が出来たように思えます。

「大丈夫です」とA様はおっしゃいますが、ご家族や職員との会話のなかで、自分が要介護状態になった事への負い目から、涙を流されたり、家で奥様と二人で泣くこともあるとも

話されました。そんな本音の吐露や、送迎時に時々零される愚痴などから、笑顔やお礼「大丈夫ですよ」の裏には、周囲を気遣う柔軟で礼儀正しい一面だけでなく、ご自身のやりきれない辛い思いがあったのです。同時にその事は、A様が少しずつではあるものの、職員へ対して心を開きつつある証のように思えます。その抱えている辛さを理解・受容し、少しでも心を軽くするのも、我々に出来るケアの一つではないかと考えます。

今回の事はごく一部の事で、まだまだ私たちの知らないA様的一面、A様の要望があると思います。

その為、これからもA様やご家族様の想いに寄り添いながら、穏やかな在宅生活の支援をして行けたらと思います。そして、その「より良い在宅生活支援」が私たちの役目であり課題です。

最後になりますが、A様・ご家族様に、この場をお借りしてお礼を言いたいと思います。誠にありがとうございました。これからもA様の心に寄り添いながら、日々の生活支援をしていきたいと思います。

A様が穏やかな在宅生活を送れるように、レスパイトケアという形でご家族を支えながら「大丈夫ですよ」とA様が心からそう言って下さるケアを目指して
、ご家族と協力しながら実施していきます。

ご清聴ありがとうございました。

ありがとう!!勘弁してください

ケアサポートセンターようざん飯塚

高橋 快彰

酒井 美佳

【はじめに】

「ありがとう」この言葉の素敵さそして相手に伝えることを皆さん大切にしていますか？

誰よりもこの言葉を大切にし、ありのままの姿になりたいと日々頑張っているA様をご紹介させていただきます。

【事例対象者さま紹介】

- ・対象者： A様 82歳 男性 要介護度4 認知症高齢者の日常生活自立度Ⅲa
- ・既往歴：頸椎損傷で頭頸部以外の全身麻痺、脳出血、脳梗塞（右手の痺れ麻痺）、繰り返しあり、頸椎症（脊柱管狭窄）、認知機能の低下（長谷川式14点）
- ・認知症状：記憶障害、見当識障害、不穏・興奮、被害妄想

【生活歴】

- ・群馬県草津町で生まれ、小学校4年生の時に高崎市へ越してくる。
- ・高校時代に柔道で頸椎損傷をし、首から下の全身麻痺となる。
- ・大学卒業後は叔父が経営し、父が社長をしている縫製会社で専務として務める。
- ・宗教法人に勤務し多くの人々の相談に乗り定年後73歳まで仕事を続ける。
- ・平成21年4月「尊厳死宣言書」を書く。

【ようざん利用に至る経緯】

平成30年10月、自宅の玄関で転倒し鼻、口切傷前歯数本欠け、左手首骨折、1週間ショートステイを利用。その後車いすが常態となり、認知症も記憶障害、見当識障害が進み好きだったTVや読書もできなくなり、奥様が離れると呼んだり探し回ったり、奥様が教えている塾の教室での仕事中も入ってきたりしてしまうようになりました。夜間はトイレの場所がわからず奥様を何度も起こすことが増え、ショートステイの利用の増加に伴いケアサポートセンターようざん飯塚の利用が始まりました。

【取り組み1】

苑内にて食事の時間、A様は1人食事には一切手をつけずに一点を見つめ虚ろな様子。
職員「ご飯食べてくださいね？」

A様「いらない、いらない、勘弁してください。胸がいっぱいです。」と頑なに食事を摂ろうとされません。時にはコンセントケーブルで「首をくくってください!!（合掌）」などといった自殺願望まで見られ、止めようとする職員に叩いたり噛みつこうとしたり、とても拒絶的で暴力的になってしまいました。

【考 察 1】

後日、A様になぜ食事を召し上がりたくない時があるのか、死にたくなることがあるのか？お話を伺うことにしました。

A様は、「ありのままの姿とは正直にまっすぐに生きること」とおっしゃいました。けれども、「このことを考えると時に苦しくなる」「まっすぐに生きることは難しい、だからこれを考えると死にたくなる」と恥ずかしそうにおっしゃいました。

それは自分の生き方に反し違う自分になってしまい、何をやってもダメだ!!と思ってしまうからともおっしゃっていました。

A様はある職員を先生と呼び慕っています。その職員がA様の隣で一緒に食事を摂ってみることにしました。「俺がこさえたんだよ！少しでもいいから味見してみてくんない？」と…。

すると、少しづつですが一口また一口とおかずに手を伸ばし食事を口に運ぶ姿が見られました。

【取り組み2】

ある日、苑内にて帰宅願望が強く見られ「出口はどこですか？」「家に帰らなくてはならない」と車椅子で苑内を自走し他の利用者様にぶつかりそうになったり、つかまり立ちや伝い歩きで転倒しそうになりながらも無我夢中で一生懸命に職員の後を追いかけ必死に出口を探している。

職員が「こっちで一緒にレクをやりませんか？」とお声かけをしても、A様は「勘弁してください!このとおりです（合掌）」「いや、家に帰ります!!」と更に興奮され、自分の希望が叶えられないA様は職員に噛みつこうとしたり殴ろうとしたりと、とても暴力的になってしまいました。

【考 察 2】

A様に帰宅願望が出た時には「一緒に出口を探しましょう」と伝え、手引きで歩行練習に取り組んでいただきました。

小刻み歩行のA様に、「大きく足を出しましょう」などといった声かけと同時に廊下に目印をつけ、それに沿って歩行してもらえるようにアプローチをしました。

A様の小刻みだった歩き方がゆっくりと大きく、一歩一歩と少しづつですがしっかりと歩けるようになりました。

しかし、歩行練習の疲労が溜まり一旦落ち着いた後は「家まで歩いて帰ります。ありがとうございました！」といった言動が再び現れ不穏な様子で苑内のドアをずっと開けようとする行動が続きました。

【取り組み3】

ある時、A様が手を合わせ一生懸命にお祈りをしていました。

それは何を祈り、何を思い、誰に向けてのお祈りだったのかA様の見えない思いが気になりA様に聞いてみることにしました。

【考察3】

A様は縫製会社を退職した後、宗教法人で働いていました。自分の身を捧げても相手や世の中に尽くすといった教えに惚れ感銘を受けたからだとA様はおっしゃいました。

これを信仰する前は自分の都合の悪いことはすべて否定し、その結果、自分の周りから人が離れていった…と遠い目をされるA様。

「でも考え方が変わったね」とA様はおっしゃいます。「私よりも子供、子供よりも孫」だと。

A様の家には、ご家族20人と一緒に真ん中で嬉しそうに笑うA様とご家族の素敵な写真が飾ってありました。「奥さんと子供がいるから家に帰りたい」と嬉しそうに話すA様の笑顔はとても輝いて見えました。

【まとめ】

恥ずかしがりやなA様は真剣な顔でおっしゃいます。

“感謝とは人との関わりや全てのことに対して”だと。A様が奥様を愛し、ご家族を大切に思い、そして感謝することを大切にしている姿は私たち職員が忘れていた大切な何かを思い出させてくれているように感じことがあります。

人の中には自分の感情を表に出さず言葉にしない人もいます。しかしA様のように愛している人には愛していると大切な人には大切だと言葉で伝えることは奥深く、よりいっそ相手との仲を深めるものになるのではないかと感じました。

今回の事例を通したA様との関わりの中で、まっすぐに生きることは時に難しく、苦しくなってしまうことがあるということ、それでも家族や大切な人の存在にどれだけ支えられ、助けられているかということをあらためて痛感しました。

A様にとってケアサポートセンターようざん飯塚がこれからもA様らしく生活できる場所になれるように、またA様の周りが明るく笑顔あふれる毎日を過ごせるように、これからも利用者様の個性を尊重した楽しい生活を支えるお手伝いをしていきます。

「見えない」に負けない 明日へ続く光

～故郷へ想いをはせて～

S T 中居 丸山 美由紀
近江 全子

【はじめに】

小規模多機能施設の大きな役割は、在宅生活を続ける為の支援です。
ご本人様が、長年暮らした自宅で安心して生活ができるようお手伝いをすることです。
今回、私たちは病気の悪化に伴い今までの生活が困難となった方の在宅復帰に寄り添った事例について発表いたします。

【ご利用者様紹介】

氏名 K様 (要介護度3)

性別 男性

年齢 76歳

既往歴 高血圧 糖尿病 白内障(両眼) 脳梗塞(H29 10)

和歌山に生まれ、結婚し1女をもうけるも離婚。

17年ほど前に仕事の為 高崎に移住する。

昔から糖尿病であったがきちんと通院治療してこなかった。

4～5年前から白内障の為、両目の視力低下があったものの、なんとか自立生活を継続していたが、平成29年10月に脳梗塞を発症し高崎総合医療センターへ救急搬送される。

第一病院転院後、約3か月の加療、リハビリを経て退院となるが、入院中に白内障が悪化し、ほぼ両眼の視力が失われ独居での生活が困難な為、病院のソーシャルワーカーから相談がありようざん中居の利用が開始となる。

当初は白内障の手術で、だいぶ視力は回復するとの事で手術の予定されたてば一か月ほどで以前のような生活に戻れるとの認識でした。

退院直後は、ようざんで宿泊対応をし、手術の予定や治療の計画を立てていく事になりました。

30年1月30日 高崎総合医療センターにて部分麻酔で行った白内障手術は、目が動いてしまい手術できず。予定を組みなおし、再度手術となります。

同病院にて2月20日 再度、白内障手術施行。手術時、眼中内の白い濁った部分は除去できたものの、取れた水晶体片が眼底に入ってしまい対応できないとの事で急遽 高崎総合

医療センターから、ようざん送迎にて群大病院へ向かい、同日20:30から落ちた水晶体片の除去とともに両眼の手術を行う事となります。

和歌山から娘様が付き添いのため来られていたのですが、一人では不安との事でスタッフも付き添い22時頃に無事手術が終了、術後の説明をうけるなど深夜近くまで家族に寄り添い対応致しました。

その後2~3日の入院を経て、2月23日に無事退院し、目の状態が落ちくつくまでようざんで宿泊対応致しました。

一ヶ月はゴーグル着用、1日5回の点眼の実施、手術も上手くいきK様も一安心されたご様子でした。

以後、定期的に行く群大病院には、ご家族様が遠方である為スタッフが付き添い、丸1日かけての受診介助には、途中でスタッフを交代して対応しました。

K様も長い治療に根気強く取り組み頑張って下さいました。(以下受診経過参照)

	病院名	受診時間	経過内容
30年 3月23日	群大病院 受診	10:00~20:30	経過良好
4月19日	群大病院 受診	14:00~19:15	経過良好
5月22日	高崎総合医療センター 受診	10:30~12:00	経過良好 自宅近くの眼科に移行する

並行して在宅生活復帰に向け ご本人様がいつも過ごしていた居間にベットを移動し自宅の環境を整えつつ、まず1~2時間の日中帰宅を始めました。

自宅に戻る時には 1日5回訪問して点眼を行いようやく通いと在宅での支援が始まりました。

ところが、一ヶ月後の6月19日の眼科受診時に精密検査が必要と言われ、群大病院を受診した結果、右目網膜剥離の為手術が必要と言われ、6月28日、29日と2日にかけ再受診し、右目の手術の日程と、新たに左目のレーザー治療の予定を組みました。

7月3日 全身麻酔で右目の網膜剥離の手術施行、手術中はスタッフが付き添いを行いました。

(以下受診経過参照)

	病院名	受診時間	経過内容
30年 6月28日	群大病院 受診	8:30~15:00	検査の為 受診
6月29日	群大病院 受診	9:00~15:00	検査の為 受診
7月 2日	群大病院 入院	7:40~11:00	入院送迎
7月 3日	群大病院 手術	8:00~12:30	全身麻酔にて右目網膜剥離 手術実施。 スタッフ付き添い
7月 8日	群大病院 退院	11:00~12:30	退院送迎

7月8日に無事退院となり、再び在宅に向けK様と一緒に通院治療が始まりました。

(以下受診経過参照)

	病院名	受診時間	経過内容
30年 7月13日	群大病院 受診	9:00~14:00	経過良好。抜糸をおこない視力は徐々に回復。
7月18日	群大病院 受診	13:00~17:00	経過良好。
8月 3日	群大病院 受診	13:00~17:00	目に水が溜まっているが、様子を見ることとなる。
8月17日	群大病院 受診	13:00~17:00	経過良好
9月14日	群大病院 受診	10:00~16:00	網膜剥離 完治次回の受診で自宅近くの眼科受診に切り替える事となる。目薬も使いきりで終了。
10月26日	群大病院 受診	10:00~17:00	本日にて終了予定であったが、左目のレーザー治療を忘れていたとのことで、受診継続となる。

	病院名	受診時間	経過内容
30年 11月 1日	群大病院 受診	14:00~18:00	左眼のレーザー治療
11月 9日	群大病院 受診	15:00~18:30	左眼のレーザー治療
11月 15日	群大病院 受診	14:00~18:30	左眼のレーザー治療

11月15日の治療を最後に群大病院受診が終了し、自宅近くの眼科受診へ移行となり、経過観察と点眼の継続で状態が安定してきました。

一か月の予定であった治療が、結果 約1年かかり、3つの病院で検査、通院、手術を行いようやくK様も安心して自宅で生活できるレベルの視力まで回復しました。

白内障の治療にもやっとめどがつき、家族がいる和歌山へ帰りたいと言う言葉が聞かれるようになり、私たちスタッフ一同もみなそうなれたらいいなと思っていました。

ところが、K様に高カリウム血症のリスクが発症したのです。

血液検査のカリウムの値が少しずつ悪化し、平成31年2月には 6.1mEq/L の値が出てきました。

そして医師から「このままじゃ入院になるよ」「いつ、心臓が止まってもおかしくないんだからね」との言葉があり、帰郷に前向きになっていたK様には本当に残酷な言葉でした。

改めて、スタッフ一丸となりK様と数値改善に取り組んだ結果、4月の検査ではカリウム値 5.7mEq/L 、6月には 5.1mEq/L と改善することができました。

配食センター ぽからんの本多所長にも、1食分のカリウム値を計算して頂くなどご協力を頂き、お忙しい中、本当にありがとうございました。

もうしばらく、食事療法を継続しカリウム値を下げ、体力をつけてご家族様の待つ故郷に帰れる日をめざして行きたいと思います。

【終わりに】

今回、私たちは一年に渡る白内障の治療に寄り添い、K様が安心して在宅で生活できるレベルまで視力を回復する事ができました。まだ問題は続いているが、K様の想いである「故郷へ帰る」を目指してこれからも取り組んで参りたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

ストレングスモデル

ケアサポートセンターようざん栗崎

発表者・小畠 伸介

山口 恵美

◇はじめに

まず初めに、今回 ST 栗崎で発表させて頂く S 様の「美」について説明させて頂きます。

S 様は、美意識が高く、いつもオシャレをして来苑されます。

眉毛、アイラインはアートメイクをされており、耳にはピアスの穴があったのです。

この時代でアートメイクにピアスの穴！しかも、いつもおしゃれな洋服。

その理由としては、女学校を卒業されてから {ひのやデパート} で化粧品販売をされ、結婚後もメナード化粧品販売を営み、ヨガ教室の経営に至ります。

なぜ、S 様がそこまで「美」に対して追及されたかと言うと、ある一人の女性との出会いがきっかけだったとご本人様との会話で浮かんできました。

その女性とは、山野愛子さんとの出会いです。

山野愛子さんは、日本初のパーマ指導技術者であり、日本にパーマ技術を普及させた方です。

山野美容講習所(現・山野美容専門学校)開設者です。

そこへ S 様は通い初め、美容師免許・着付け免許の資格を取得され、トータルビューティの理念 美道五原則を目指す様になりました。

髪・顔・装いをマスターされた S 様が精神美・健康美を極める為に辿り着いたのがヨガでした。

1 事例紹介

利用者様 S 様 85 歳

身長 145 cm 体重 39 kg

- (1) 介護度 要介護 3
- (2) 家族構成・介護者 娘、息子
- (3) 娘がヨガ教室を営んでいる。
- (4) 生活歴 ここでもう一度、S 様の生活歴を見ていきましょう。

S 様は伊勢崎市で 3 人兄妹の長女として育つ。親は練炭屋を営んでいた。女学校を卒業後、デパートの化粧品売り場に配属された。結婚後、夫の仕事が高崎だった為、高崎市内で暮らし始め、1男1女をもうける。30 歳代で土地を購入しお好み焼き屋を経営する。従業員 2 名も雇い、お客様の中には著名人もいたとの事。また、同時期に化粧品販売を行う。夫も化粧品販売が忙しくなった為、会社を退職し、化粧品販売店の店長となり S 様を支えた。化粧品販売を行っている時期に S 様は山野美容講習所に通い、美容師、着付けの資格を取得する。S 様は美容師はやらず、着

付け教室を開いた。山野愛子着付け教室群馬支部の支部長を務めていた。S様は山野愛子さんの美道五原則のアイデンティティを受継いでいた。

着付けも流行が去り、S様は健康美・精神美に着目し、ヨガを勉強し国際ヨガ教室の指導者となった。

(4) 既往歴

平成19年11月 高血圧症心疾患

平成20年頃 肝臓病の為、群馬大学に一ヶ月ほど入院され、管を入れるため麻酔をしてOPEを行った。その後、せん妄があり退院後体力が落ちたことにより外出する事が減り認知症状が現れ始める。

平成23年12月 アルツハイマー認知症と診断

平成24年4月 交通事故に遭い、免許証を返還した。

(5) 性格 気配り、気遣いが出来、世話好き、礼儀正しい、優しい

(6) 認知症程度 認知症生活自立度 II b

(7) 日常生活自立度 J 2

(8) 服薬 メマリー10g リスペリドンOD錠0.5g

2 中核症状

近時記憶障害、長期記憶障害、見当識障害、失行、失認。

3 周辺症状 (BPSD)

徘徊、帰宅願望、家庭においては不眠、落ち着きがない、娘さんに依存

4 入所の経緯

職員がヨガ教室に通っており、娘さんと旦那さんに相談された。旦那さんは熱心にS様の介護を行っていた。契約時も旦那さんと来苑され、見学、契約に至った。契約後、間もなく旦那さんが体調を崩し入院、他界された。今の旦那さんの思いに答えるべく、私たちはS様の介護を行っている。

5 苑での日中の様子

S様はヨガの指導員だった為、ようざんに来ているのはヨガを教える為に来ていると思っている。その為、職員はS様を「先生」と呼んでいる。また、S様も私たち職員が同じ服装をし、利用者さんを介護している姿を見て、「先生」と呼んでいる。

朝の体操や歌レクには参加される。昼食後からソワソワ始める。職員に「何かある？」 「先生、どうしたの？」「手伝おうか？」の言葉に職員は「大丈夫です。」「こちらの席に

お座りください。今、お茶をお持ちします。」など、職員は言葉の定型文を言っていた。夕方になると帰宅願望が始まり、隣接のデイサービスのドアを叩く。その都度、職員は「もうすぐお迎えが来ますから、少しお待ち下さい。」と言って席へ戻って頂くが、職員の業務が忙しい時間で、優先順位からして、S様を見ていられない現状があり、再びデイサービスのドアを叩いていた。毎日がその繰り返しであった。

ご家庭では、娘さんが指導されているヨガ教室に出てきて、生徒さんを指導するが、同じポーズを繰り返えすので生徒さんに迷惑をかけている。夜中は動き回り、何かを探している。また、全く寝ていない日があるとの事。

6 活動内容

目的：帰宅願望を軽減し、不穏状態を改善。体内時計を正常化し24時間の健康リズムを取り戻す。

そこで、S様の生活歴から強みを知り、支援をして行く事になる。

- (1) 歌が好きとの事でカラオケに誘ってみる。
- (2) ダンスパーティを開催し、楽しんで頂く。
- (3) 本人の残像機能を確認する為、家事をして頂く。職員全員に状況と結果をまとめてもらった。
- (4) 化粧や着付けをしてもらう。
- (5) ヨガの指導に来ていると思っている為、ヨガ教室を職員、利用者さんを交えて実施する。

◆取り組み (1) 歌が好き。カラオケで歌を歌って頂く。

結果、他事業所でのカラオケレクに参加した際も、普段とは違う場所でも楽しそうにマイクを持たれ歌われた。

「ブルーライトヨコハマ」「くちなしの花」がお気に入りと分かる。

◆取り組み (2) ダンスパーティを開催。

結果、楽しそうにしているが、それほど得意ではないと分かった。

◆取り組み (3) 残存機能を生かし家事をして頂く。職員のお手伝いをお願いする。

S様のやれる事、得意な物をお願いする。(掃除・食器洗い・洗濯干し、たたみ)

結果、途中で終わりにしそうになり、ムラも見えた事もあったが職員がこまめに声掛けを行う事により最後までやっていただけることもあった。S様と寄り添って行うことで、終わるまで飽きることなく、不穏にもならず、やり遂げた。しかも楽しそうにされていた。

終了後、S様は「綺麗に出来ました。」「私、お掃除好きなんです。」などのお声を職員に下さいました。

◆取り組み(4) お化粧・着付けをやって頂く。

結果、お化粧は実施出来なかったが、職員をモデルにし、着付けを実施する。職員が着物を着用すると、手を伸ばし、自ら迷うことなく位置確認をしながら行う。

着付けをして頂いている職員、その姿を見ている職員を生徒の様に指導し、口と手の動作を一緒にを行い、スムーズに最後まで集中してやり遂げる。

◆取り組み (5) ヨガ講師。 生きがいを見つける。

S様の強みであり、S様の個人経営で講師でもあったヨガを思い出して頂こうと企画・提案し実行。

ご家族様のご協力のもと、ヨガ教室で使用していたマットをお借りし、ヨガ経験のある職員と連携を図り、5月下旬から6月初旬に三度、30分程のヨガレッスンを実施する。

S様に前に出て頂き講師時代の様な教室を再現し実施。

結果、一回目よりも二回目、二回目よりも三回目と数を重ねるごとにやってきた内容を思い出し実施できる様になり、「ここをもう少し曲げますよ。」「ここで息を止めて吐きます。」など、昔のように指導して頂き、体の硬い職員の背中を押したりする姿が見られた。三回目のヨガが終わった時、「今度はいつ？またやりたいです。」と言って頂けました。認知症になつた今でも、大好きだった仕事であり、S様の根本に根付いているヨガに対する思いが確認でき、再度講師としての生きがいを引き出す事に成功しました。

また、定期的なヨガレクと今まで以上に関わる生活レクを始めたことにより、帰宅願望はやわらぎ、次のヨガレクを楽しみにしてくださるようになりました。

今回の取り組みをご家族様に報告したところ、感謝の言葉を頂くことが出来ました。

◇まとめ

今回の事例を通して、これから訪れる2025年問題に向かって、私たち介護職員は基本であり当たり前ですが、全利用者様と一人一人真剣に向き合わなければならない。

また、職員によっても支援方法が違う事にも気付いた。職員にも個性や強みがあり、それを統一化することは難しい。しかし、今回のS様の支援を行うことで事業所全体をカバー出来ると分かった。話が得意な職員、運動やレクリエーションが得意な職員、笑顔が得意な職員と利用者様も職員も個性があり、

『全てにおいて正しいケアは存在しない！』

今後は、私たち介護職員の個性とストレングスを活かし、認知症患者様と過ごすことが、これから介護の目標であり、目指すべき事業所の在り方だと思う。

ご清聴ありがとうございました。

～ただ、穏やかな気持ちで過ごしたい～

ケアサポートセンターようざん倉賀野

発表者：佐野 史

【はじめに】

認知症にも様々なタイプがあります。

『前頭側頭型認知症』と診断されているT様は、普段は穏やかにニコニコされ、昔の話や、土いじりの話をして下さいます。

しかし、突然、顔つきが険しくなり「何だと貴様！」など大声を出し、職員に殴り掛かったり蹴ったり、という暴力行為が頻回に起こるようになりました。

今回の事例では、T様を通して『前頭側頭型認知症』と診断された方への対応・関わり合いについて、事業所で取り組んでいる内容について発表したいと思います。

【事例対象者】

T 様：90歳 男性 要介護4

既往歴：平成20年頃 胃癌摘出手術

平成26年頃より農業の段取りが思うように出来なくなり、平成27年に病院に受診し『前頭側頭型認知症』と診断される。

生活歴：吉井に生まれ、海軍の兵学校に入る。戦時中は潜水艦に乗務、フィリピンにて終戦を迎える。帰国後は、農業で生計を立て、結婚後は一男二女を育てる。

奥様は脳溢血を発症し、施設に入所している。現在は長男家族と同一敷地内に住んでいる。

平成28年4月から、ようざん倉賀野の利用を開始。

現在は月～土まで長男様の送り迎えで朝7時頃から夕食後の18時過ぎまで「通い」を中心に利用中。

【利用当初の様子】

☆利用当初より、「なぜここに居なきゃいけないんだ！」 「いつ帰れるんだ！」 「タクシーを呼んでくれ」などと訴える。

☆施設内を歩き周り、施設内の窓の開け閉めをする。

☆ベッド柵を外して居室の窓や非常口のガラスを消火器で割ろうとしたり、モップや掃除道具を持ち出し、施設内を歩き回る。

☆ベッドのコードや枕カバー、おしほりなどをポケットに入れて帰る。

☆他の方の食事やおやつを食べようとする。

☆他の利用者様のロッカーや宿泊室の衣類などを「俺のだ」と持って行く。阻止しようとする職員に、殴り掛かる、首を締める、蹴るなどの暴力行為がみられる。

☆食事の配膳の際、同じテーブルの他の利用者様に先に食事を持っていくと「俺はどうした！」と大声を出したり、「量が少ない！」と不穏になる。

【離苑発生！3度も…】

<最初の離苑>

居室の窓枠ごと外してしまい離苑される。すぐに職員が発見し、施設内にお連れしようとするも、抵抗強く、何とか施設内に入ったものの、表情陥しく、施設内を歩き回る。

<2度目の離苑>

G Hの職員が「グループホームの前にいました。」と連れてきて下さる。確認すると居室の窓のストッパーを力で押し込んで窓を開けていた。

<3度目の離苑>

職員が開けたドアのオートロックが閉まる前に戸を開けて出てしまう。

また帰宅願望が強いので『少しだけ外を散歩しましょう』と職員と一緒に法人内の外に出た際、T様がそのまま帰宅しようとしたためT様と職員が揉みあいになり「ここに閉じ込められる！」「警察に電話してくれ！」というトラブルも発生した。

【カンファレンス】

T様の介護上の課題について職員間で話し合いを行った。どのような時に不穏になり、暴力行為となることが多い。またその際、どの様な対応を取っていたかを話し合う。

1. 職員からの「駄目ですよ。」「止めて下さい。」という命令口調や抑え込むような圧力的な声掛け、不意に声を掛けた時。

2. 午後になると帰宅願望が強くみられる。レクの参加に拒否が多いが、機嫌が良いときは歌を口ずさんでいることがある。

3. T様が足を伸ばして座っている時など、通路に足がはみ出している為、他の男性利用者とのトラブルが発生する。等々…

しかし、具体的にどう対応して良いかわからない…。適切な対応策はあるのだろうか？

【勉強会の実施】

『前頭側頭型認知症』の勉強会を開催 ⇒ 色々なヒントを見出す！

☆行動を制止したり、忙しく動く職員を見ると、興奮したり暴力をふるう場合があります。

☆指示的態度で声を掛けたり促したりしても関心を持たない。

☆生活スケジュールや日課など同じ行動をとらせるようにしましょう

☆前頭側頭型認知症にドネペジルを投与すると、興奮性が高まり暴言や暴力が出やすくなる場合があります。

☆前頭側頭型認知症の介護方法で注意することは、さりげなく誘導することです。

☆常同行動を活かしたレクや作業療法に取り組むと良い。

※以上のようなヒントを得て、T様への対応について新たな取り組みを試みることとした。

【取り組み①～声掛け、接し方】

1. 声掛けの際は、とにかく優しく声を掛け、職員側も穏やかな気持ちで自然に接することを心掛ける。
2. T様の行動を直接制止するような命令口調、威圧的な声掛けをしないように注意する。
3. 帰宅願望が出た際のT様への返答についても統一した回答と丁寧な説明をする。
4. T様の周辺のレイアウトを調整し、他の利用者の邪魔にならないように席やテーブルを調整しておく。
5. 忙しくホール内を歩く、忙しく業務を行う、大きな声を出す等、利用者様に不快感を与える行動、不穏になるような動きや行動をやめる。

【取り組み②～主治医との連携】

前頭側頭型認知症と診断された当初に『抑肝散』が処方され内服を続けていたが、ご家族もその後の具体的な日中の様子や症状は主治医に伝えていなかった。

そこで、施設でのT様の日中の様子や症状を文面で記載する事とし、ご家族に自宅での様子と合わせて主治医に伝えて頂くように依頼した。

その後、主治医より『抑肝散』の他『デパケンR錠』を処方してみるので、日中の様子を見てほしいとの文面のほか、症状が改善されなければ薬の分量の調整や別の薬も考えていきたい趣旨の内容が記載されていた。

【取り組み③～常同行動の定着化】

S T倉賀野では「リハビリ表」を作成し、全ての利用者様に歩行練習や筋力アップ、ストレッチ、関節の曲げ伸ばしを行う試みを実施している。

T様も同様に筋力アップやストレッチの声掛けを行うが、リハビリを実施している途中で「私はもういいです。ありがとうございました」と止めてしまい、最後までリハビリをすることが出来ないことが多かった。

しかし、職員や他の利用者様と一緒に洗濯物の取り込みやそれを畳む行為は、飽きずに行う。また自分の知っている歌をみんなで歌っている時は飽きずに持続し集中することか

ら、T様の帰宅願望が強くなる16時半から夕食までの決まった時間に、T様の知っている歌集を作成し、他の利用者も一緒に歌う試みを実施することとした。

【その後の様子】

＜取り組み①～声掛け、接し方＞

『職員が穏やかな気持ちを持っていないと利用者様に優しい声掛けはできない』という認識を持ち、とにかく『穏やかに、優しく、さりげなく』を心の中で繰り返し、利用者様に接する姿勢を持つ。

トイレ誘導などの際も「トイレに行きますよ。」ではなく、「今、トイレが空いているから食事の前に行っておきませんか。」などと穏やかに、さりげなく話し掛け、自らトイレに行かれている時もドアをノックする、外からまず一声掛けるなど、ワンクッシュョン置いた行動に留意することでT様も穏やかな返答をしてくれるようになった。

夕方になって玄関付近を歩き回るような時は、時計を確認して頂き「6時過ぎに息子さんが迎えにきます。夕飯を用意しますので召し上がって行って下さい。食事の料金も息子さんから頂いてますからご安心ください」と統一した回答を毎日行うことで、T様も「ああ、そうですか。まあ、ひとつ宜しくお願ひします」と決まった返答をしてくれ、その後は夕食が出るまで落ち着かれている。

＜取り組み②～主治医との連携＞

現在、月一回は定期的に主治医に施設での様子を伝えており、医師からも薬の分量や薬の調整を気に掛けてくれていることは非常に心強い。ご家族も自宅での様子を医師に伝えており、T様を出来る限り在宅で支えていく力強い味方となっている。

薬についてはデパケンR錠の処方をして貰い、内服を続けていたが、暴力行為が変わらず見られ、他者とのトラブルがあるため、その状況を医師に伝えたところ、デパケンR錠の分量を増やしてもらった。しかし、現状でもあまり変化は見られていないが、引き続き、介護サービスでの人的な関わり方と医療面での関わりを並行して支援することで、T様とご家族を支援していきたいと考えている。

＜取り組み③～常同行動の定着化＞

引き続き、T様にも決まった時間にリハビリの声掛けを行うが、リハビリを途中で止めてしまった時も無理強いをせず「また明日やりましょう」と気長にして構えて実施する。

毎日の決まった時間に洗濯物を畳む、レク時のテーブルを運んで貰う、などの作業時は穏やかに過ごされている為、継続してT様に関わってもらう。その他に長期的に何かを作り上げられる作業療法を現在検討している。

また決まった時間にT様の知っている歌をみんなで歌うことで落ち着いて過ごす時間が増え、帰宅願望や不穏になるような回数も減ったように思う。毎日、決まった時間に実施するが大切であると考える。

【考 察】

今回、前頭側頭型認知症のT様に対する取り組みを行っていく中で、一番感じたことは、T様だけではなく、人は認知症の診断を受けても、相手の気持ちを感じ取る能力は衰えることはない、ということである。

こちらが穏やかな気持ちでいれば、穏やかな気持ちを感じ取り、イライラしていれば、それを感じ取り、不快感を示すのだということが、はっきりと分かった。

介護する側の気持ちのあり方、接し方、声の掛け方がいかに大切であるか、今回の取り組みを通して感じることが出来た。

【まとめ】

認知症の特性を理解し、「毎日同じ時間に施設に通う」「馴染みの職員との信頼関係を築く」「行為を止めたりせず、さりげなく注意をそらす」

などの対応を習慣付けしながら、細やかなケアをしていく必要があります。

確かに「人格が変わった様に怒り出す」「暴力を振るう」といった問題行動に対し、身構えてしまったり、恐れる気持ちは仕方のない事だと思います。しかし、そういった「負の感情」を認知症の方は敏感に感じ取り、そして互いの「負の感情の連鎖」を招いてしまいます。

恐れる気持ちを抑え、穏やかに接する。

これは前頭側頭型認知症に対する基本です。介護の技術や知識も大事です。

そして、それ以上に重要なのは「認知症の方と同じ目線に立ち、穏やかな心で接する」

これは振り返ってみれば、全ての認知症の方に共通する、介護の基本ではないでしょうか。

本日もT様が来苑されます。

T様、そして全てのご利用者様が、心穏やかに過ごされますことを、S T ようざん倉賀野の全職員が望み、その為に尽力して参ります。

今日もよろしくお願ひします。頼りにしています。

ケアサポートセンターようざん貝沢

発表者：金井智美

【はじめに】

ある日の臥床介助の時にポツンと呟かれた一言に自分の無力さを感じました。

そして、どうしたらこの寂しそうな表情を笑顔で「おやすみなさい」と言ってもらえるようになるのか、ようざんに就職して初めての私の担当利用者様。 最年長の利用者様ながら「あと5年たって100歳になったら」と笑顔で話せるようになった取り組みをご紹介させていただきます。

【事例紹介】

M様（94歳）

要介護5

既往症：脳梗塞、慢性硬膜下血種、右片麻痺・認知症

障害高齢者の日常生活自立度 B1

認知症高齢者の日常生活自立度 IIIb

【生活歴】

高崎市小八木町にてご主人と暮らしていたが、平成28年4月に慢性硬膜下血種による入院手術を経て歩行障害や片麻痺が出現。脳梗塞の診断。 同居の夫、近所に住む娘様の支援を受けながら訪問リハビリ、ショートステイ、デイサービス等を利用し生活を送っていたが、日常的に支えていたご主人が平成29年11月に急逝され事態は一変する。

【ようざん貝沢利用の経緯】

状況変化に伴い、ショートステイを利用。その間に御家族（息子様と娘様）で相談の結果、在宅生活は困難と考えてグループホーム入居のご希望。 入所待ちのため平成30年1月3日よりご利用開始されました。

【日常の様子】

- ・車椅子を利用しながら出来ることを自分でしたい意欲は強いが、転倒リスクの理解が難しい。
- ・トイレ使用時にナースコールを利用出来ないなど、機器使用の理解も難しい所がある。
- ・ベット臥床時に車椅子への移乗を試みることがあり、夜間はこまめな巡回を行い転倒予防している。
- ・体操には積極的に参加されるが、動かない右手右足にもどかしさを感じているご様子。

- ・食事は自力摂取。着脱は手助け程度の介助が必要だが自分でしようという意欲が伺える。
- ・介助後は必ず「ありがとう」と律儀にお礼を言って下さる。
- ・耳が悪く、話を聞き取れないこともあるが、おしゃべりが大好き。
- ・時折来苑される娘様が歩行練習や、外出、外泊に連れて行って下さる。
- ・急逝されたご主人についてはご家族様希望により入院中とご説明している。

【取組のきっかけ】

利用開始から3ヵ月ほどたったある日、口数が少なくいつもより元気が無い様子で、パジャマに着替えて臥床介助した時のこと。

ポツンと呟かれたのは「死にたい。」の一言でした。

その日トイレ誘導時に失敗したのを気に病んでいたのと、入院している事になっているご主人について「お見舞いに行けないなんて私は生きてる意味ないよ。家にも帰れないし。私は寂しくて仕方ないよ。」とM様は泣きだされ、その時に自然と私も涙が出ました。

まだ、スキル不足の私ですがその前年に99歳の祖母を亡くしたことと、私の担当利用者様ということで俄然やる気が自分の中から出てきました。

【行動】

娘様が来苑された時に発言の内容を伝えるとショックを受けたご様子。

1. 朝の挨拶時、「おはようございます」の後に「今日もよろしくお願いします。頼りにしています。」と

付け加えるようすると「こっちが頼りにしているんだよ。」と必ず言われますが「もう私が一番すぐお願ひ

するのはMさんだって知ってるくせに。」と笑顔で返すと「もう仕方ないねえ。」と返してくれるのを今でも毎回続けています。

2. 洗濯物たたみの時に、ピンク色の「垢すりタオル」は極力「M様がしてくれると丁寧で本当に助かります。」とM様指名でお願いする。他利用者様にはM様の右手が少し動きにくいので「垢すりタオル」だとたたみやすい事を伝える。

3. 自分が体操の係の時には頑張って右手を動かしているM様を一番に褒める。

4. 平行棒による歩行練習や手引き歩行でのトイレ移動を行い、「良く足が動いてましたね！」「今日は1回も顔が下がらなかった！」等席に戻ってから必ず声掛けを行う。

5. 1日1回は右手を両手で包み込み「良く働く手ですね。」冷たかったら「温めますよ」今の時期ですと「ああ、気持ちいい、ちょっと冷させて下さい。」と手を握りスキンシップをはかる。

6. 臥床介助時に身だしなみを整えることに重点をおくようにする。「女子力よ。」と顔から首すじにクリームを塗るのも丁寧に。髪も綺麗にとかして。

7. 食事のこだわりも最大限取り入れる。魚の皮が嫌だと言われば丁寧に取り除く。

8. 「こんな婆さんの面倒なんて嫌だろう？」とネガティブな発言が聞かれた時は満面の笑

みで「だって私達
仲良しじゃないですか！」と返事をすると「そうだねえ。」と苦笑される。

自分に出来る事は介護技術から考えると大したことはまだ出来ません。
とにかくまずは積極的に関わることを増やし、M様が大事な人なんだというアピールを始めました。
また「お礼を言う機会を増やす」ことと、スキンシップすることを心がけ始めました。

ただ心の中で一つだけ引っかかっていたことがありました。

いざれはGHに移動してしまうのかと。

【取組後】

1. 御家族はグループホーム入所を希望されていましたが、何泊か娘様宅で過ごし、自宅でなく娘様宅で在宅介護する事に方針転換されました。帰宅する習慣はM様の心理状態に劇的な変化をもたらし、表情の明るさ、心の余裕の変化に驚いています。
2. 洗濯物たたみの時に「ピンクのタオルはMさん」という認識が同じテーブルの他利用者様で共通認識となり、皆様がほかのタオル類をたたみ終わってもM様がたたんでいるのを見守り、M様の分を1枚残して手伝って下さるという心憎い優しさが見えてきました。
3. 以前は同じテーブルの他利用者様と談笑するという機会をあまりありませんでしたが、今は日常的に談笑されています。

しかし、いい変化だけではありません。

4. むせこみが時折見られるようになり、周りの心配の目を気にして「大丈夫」と言うことで余計にむせこみを長引かせてしまう。
5. 朝から来苑されると疲れるようで、昼食後はほぼ毎日傾眠されている。
6. 他利用者様の帰宅が気になり、自分は忘れられるのではないか？と気にされる。
7. 聞こえが悪くなったようで、問い合わせに気付かず自分の話をし出す。

しかし、よく考えれば「誕生日がくれば95歳」です。

取組後は、明るさが増し、他利用者様と一緒に体操し、時に歌い、レクリエーションも自分より若い80代の方と同様に参加され、お手伝いや食事も口腔ケアも出来る事は自分でさ

れる様になりました。

声掛けやコミュニケーションでいい方向に変化していく、いや、まだまだもっといけるのではないかと更に試行錯誤したくなる自分がいます。

今回の事例発表にあたり、ご家族様にもお話を聞く機会が出来ました。送迎でご自宅に送り娘様御夫婦笑顔で出迎えていただき、車から降りた M 様の「ただいま」の言葉とパッと輝く笑顔を見て

「この笑顔をずっと続けたい」と切実に思いました。日々の変化に敏感に感じるようになります。M 様にとってより良いケアを追及していくことが自分の成長にもつながると信じております。

最近の M 様との会話での新しいバージョン

お手伝いをして頂いた後に、「大丈夫。100 歳になったらお手伝い卒業だから安心して下さい。」と言うと

「じゃあ、あと 5 年だけかい。すぐだねえ。」と笑顔で返事を下さいます。

最後になりますがご家族も日頃から熱心に取り組まれており、今回の事例発表にあたり娘様にも多大なる御協力をいただけたことに感謝申し上げます。

本当にありがとうございます。

「特別」じゃない「当たり前」のこと。

ケアサポートセンターようざん双葉

発表者：小野塚 聖鷹

【はじめに】

歳を重ね、徐々に若い頃のように自由に体を動かすことが出来なくなり、更に認知症を患っても、人は「やりたいこと」「食べたいもの」「会いたい人」「行きたい場所」色々な欲求を持って生活しています。それらの欲求は、これまで当たり前だったことが、次第に加齢や疾病により「特別な事」になっていきます。しかし、一人ではできないことも、支援する事でその望みを実現する事はいくらでもできます。つまり、周りの環境次第で「特別な事」ではなく今まで通り「当たり前」のようにやりたいことができる環境を創ることが出来ます。今回の事例を通じ、「特別な事」として諦めていたことは、支援の環境次第で諦める事ではなくなり、次第に日常生活に「当たり前」の事になっていくと、私たち自身改めて気づくことが出来た事例について報告させていただきます。

【利用者様紹介】

A様 男性 78歳

要介護3 認知症高齢者日常生活自立度III b

長谷川式簡易知能スケール：15点

既往歴：認知症・慢性閉塞性肺疾患・右上腕近位端骨折術後

3人兄弟の長男として東京でお生まれになる。

その後、本庄で庭師として弟子を指導しながら生計を立てる。

結婚し息子と3人で生活していたが、病により妻が他界。

現在は高崎で生活保護を受けながら独居での生活を送っており、家族とも疎遠状態となっている。

【経緯】

ご本人は慢性閉塞性肺疾患(COPD)を患っており、呼吸苦を感じると日常的に昼夜問わず救急車を呼び、繰り返しA病院へ搬送されていました。多い時は1日に5回呼んでしまう事も。症状により入院になる事もありましたが、家に帰りたくなると「今日帰る!」と言い強引に退院されるような状況が続いていました。退院して、数時間後に救急車で病院へ戻ることもありました。

そんな中、相談員さんより介護サービスの相談を受け、4月より小規模多機能と訪問看護のプランによる支援が開始されました。

【支援開始】

アセスメントや担当者会議を通じ、自分で決めた事は曲げず、周りの意見に耳を貸さないと印象があり「果たしてサービスの利用が出来るのか？」という不安だらけでのスタートでしたが、案の定訪問しても留守でお会いする事が全くできない状況が続きました。ようやく電話で話が出来ても、「今日は来なくていい！」と一切サービスの受け入れが出来ない日々が続きました。

このままではご本人の支援が出来ない。何とかできないかと、信頼関係構築の為のきっかけを模索する日々が続きました。しかし、私たちが抱えていた悩みはなんともあっけない形で解決されました。

【些細なきっかけ】

ある日病院より、「また救急車で本人がこちらに見えてます。治療が終わりこれからタクシーで帰ろうとしています。無理を承知の連絡ですが、これからお迎えに来ることはできますか？」との連絡が入りました。なんとか調整し病院へ向かうと、これまで一切心を開かなかつたご本人が車の中で「ありがとう！いや～助かるよ！タクシーだと片道3000円だからな～！こんな親切な人がいるんだな。申し訳ない！」とご自宅まで送る車中、感謝の言葉が絶えず、今までとは別人のように言葉をかけてくださいました。この日を機に、徐々に訪問の支援が入れるようになりました。

これまで呼吸苦を感じると救急車を呼んでいましたが、徐々にご自身で訪問看護へ連絡するようになり、プラン通り定期訪問の他、緊急時の訪問に入り頓服薬の対応が出来る頻度も増えてきました。病院の相談員さんからも、介護サービスが入るようになり救急車で来院される頻度が減少しているのを実感していますとの連絡も受けました。

【特別な場所】

ご本人は、少しづつご自身の事を私たちにお話し下さるようになりました。

これまでの生い立ちの事に加え、今現在ご本人が「やりたい事」「行きたい場所」「食べたいもの」様々な事を話してくださいました。

その中で、「うちの近くに『なみき』という喫茶店があって、あそこのコーヒーは高崎で一番うまいんだよ！俺はこんな体だからもう飲みたくても飲みに行けないけど、近くを通った時には寄って飲んでみろ。うまいぞ！」と教えてくださいました。

元気な頃は当たり前のように通っていた喫茶店、しかし現在は本人にとって当たり前のように行ける場所ではなく「特別な場所」になっていました。

ご本人からの話を受け、「今度一緒に行きましょうよ！」というと、驚いたように「お宅はそんなことまでしてくれるんか！ありがとう！もう行けね～って諦めてたんだよ」と話されました。

【「特別な事」から「当たり前」に】

喫茶店に行く日時を決め、いざ迎えた当日。

お約束した日は生憎の今年一番の大雨。「残念だけど延期かな」と思いつつ、確認の電話を入れてみると、「何言ってんだよ！待ってるんだから来てくれよ！」と大雨を一切気にしておらず、久々に飲むコーヒーをタバから楽しみにしていたと話される。

10時過ぎに喫茶店に到着。ご本人は迷わずモーニングセットを頼まれました。

ご本人に伺うと、よく通ってた頃は決まってモーニングセットを頼んでいたとの事。「懐かしいなー。相変わらずうめ～な～」と昔を懐かしむようにトーストやコーヒーを召し上がられていきました。するとご本人は「昔は色んなとこに行けて、いろんなことが出来て・・・でも年取ってこんな身体で、忘れっぽくもなっちまって・・・まあしうがねえよな～。歳とるっつうのはそういう事だもんな」と、今のご自身の素直な気持ちを話してくださいました。そんなご本人に、「定期的に行きましょうよ」と提案しました。

今回だけでなく、定期的に継続する事で「喫茶店でモーニングを食べてコーヒーを飲む」事が徐々に日常生活において、特別な事では無くなっていく事が期待できます。

【考察】

介護サービスが関わるようになり、服薬状況が改善し、救急要請が減り、少しづつ状態が安定した結果、行きたかった喫茶店行くことが出来ました。

当初、「そもそも介護サービスを利用できるのか？」という不安からのスタートでしたが、この様に一つの結果を残せた事に、小さな自信と、素直に「良かった」という気持ちと、「この方はもっといろんな事が出来るはず」という確信をもちました。

【おわりに】

こんな体じゃ・・・認知症だから・・・そんな理由で目の前に拡がる「楽しみ」を諦めなければいけないのでしょうか。確かに一人では難しい事もあります。加齢やご病気を理由に色々なことを諦めていたご本人。これまで諦めざるを得なかったのかもしれません。

しかし、私達「介護サービス」が関わるようになり、服薬状況が改善し、救急要請が減り、少しづつ状態が安定した結果、行きたかった喫茶店に行くことが出来ました。

今後も丁寧に関係作りを継続し、医療・介護サービス間で情報共有を図りながらチームで在宅支援を行い、これまで「特別な事」として諦めていたことを、一つでも多く「当たり前」にできる生活を目指していきたいと考えています。

これまで諦めていたことは、支援の環境を整える事でいくらでも実現する可能性は拡がります。それは継続していくことで「特別な事」から次第に「当たり前」の事へと変化していきます。

これまで諦めていたこと、私たちと一緒に「当たり前」にしていきましょう。

「ありがとうございます。助かりました！」

～“不安”に寄り添い、解決に向けての支援～

ケアサポートセンターようざん石原
発表者：佐藤 由加

【はじめに】

突然の出来事により、誰に相談すれば良いのか、どう対応したら良いのか解らなくなり困り果ててしまった時、人は誰でも“不安”な気持ちを抱え、この先のことについて困惑してしまうものである。

今回の事例は地域の方から突然に発生した家庭内における緊急事態、ご本人とご家族の“不安”に対し小規模多機能居宅介護としてどのような対応をさせて頂いたのかを紹介したいと思う。

【利用者紹介】

氏名：A様 女性 83歳

介護度：要介護3

既往歴；腰椎圧迫骨折、アルツハイマー型認知症、狭心症

【生活歴】

市内B町の出身。C病院にて事務の仕事をしていた時に夫と知り合い結婚。夫はD町に温度計作りの製作所工場を自営しておりA様も共に働きながら4人の子供を儲ける。夫は平成9年に大腸がんの為に他界。現在は次男様との二人暮らし。近くに暮らす長女様も時々気にかけながら支援補助をしている。

平成21年頃から物忘れ症状が出始め、平成29年8月にアルツハイマー型認知症と診断されているが介護保険被保険者証の申請はしていなかった。

【経緯】

平成30年12月22日夕方から腰痛の訴えあり、翌23日朝から痛みの中寝たきりとなり食事の為に起き上がることもトイレへ行くこともできない状態となってしまう。困ってしまった次男様は救急車を呼びA様はE病院へ救急搬送された。受診の結果、腰椎圧迫骨折と診断され入院して様子を見ていくこととなるが夜間の暴言暴力に対応しきれずわずか1泊で退院。自宅では再び寝たきり状態となってしまった為、困り果てた次男様は高齢者あんしんセンターへ相談。25日朝、高齢者あんしんセンターよりケアサポートセンターようざん石原へ関わり依頼の連絡が入る。

直ちに次男様へ連絡し訪問させて頂く都合の良い時間を確認し同日昼過ぎに自宅訪問す

る。同居の次男様、別居の長女様より「本人は炬燵へ足を入れ仰向け状態で動けないと言つており、自宅トイレは二階にしかないという生活状況の中でどうにも困っている」との訴え有り。また、次男様は冬休み前の年末で仕事も忙しくなっているが、このような状況で仕事も数日休んでいるとのこと。自宅内はベッドを置く場所もない生活スペースとなっているため、認定前見込みでのサービス提供実施となるがA様を事業所へお連れして痛みの軽減、生活支援を連泊で行い、その間に自宅内環境をせめてベッドが設置できる環境に整えて行く提案をさせて頂く。同時に介護保険新規申請手続きの代行申請、かかりつけ医への主治医意見書依頼も行い同日17時より宿泊サービスで利用開始となる。

しかしA様の拒否は激しく、事業所へお連れする際は次男様長女様と共に見学をするだけということで三人がかりの歩行介助を行い、何とか自宅からのお連れだしを成功させたものの拒否や抵抗は増すばかりであった。認知症を背景とするそんなA様の“不安な気持ち”もしっかりと受け止め、少しづつ事業所環境に慣れて頂きながら圧迫骨折による身体機能低下防止支援をスタートさせた。

【目標】

A様の在宅生活が可能となり、次男様の負担と不安が軽減され仕事と介護の両立が出来るよう支援する。

【問題点】

- ①寝たきりの状態による身体機能低下と不安を抱えた本人と家族の精神面
- ②本人の帰宅願望や拒否
- ③自宅の介護環境が整っていない

【取り組み】

① A様は腰椎圧迫骨折の痛みで寝たきりの状態になってしまい、次男様はA様を置いて外出する事が難しく仕事も休まなくてはならない状況となっていた。そのことからA様を連泊対応で受け入れる事を決め、相談があったその日のうちに緊急で受け入れた。

A様がようざんで腰椎圧迫骨折の痛みの軽減、リハビリ支援で過ごされている間、次男様には仕事をしながら服を届けて頂いたり、薬を届けて頂いたりと仕事と両立出来る範囲でお手伝い頂いた。A様はようざんで座位からの動きの生活の中、あまり横になり過ぎないよう支援し、歩行訓練や体操、日常生活動作支援を続けるうちに少しづつ自立歩行が可能となった。次男様との相談の中、家に戻っても自分で動く事が出来ると判断された為自宅へ帰って頂き、その後は次男様の仕事都合に合わせた早朝から夕食後までの通いパターンを中心に利用することとなる。

痛みの軽減とリハビリに使った宿泊期間中、次男様も長女様もとても協力的で、何度もようざんに足を運んで下さったのでその都度A様の状態を把握して頂き、回復に向か

う様子を次男様や長女様と共有して行くことができた。それはご家族の不安解消へもつなげることができ、A様の精神面もご家族の顔が頻繁に見えることで不安から安心へ切り替えることができたと思う。

介護と言えば食事、入浴、排泄と直接的介護支援等を考えがちだが、A様と次男様、長女様のように本人の身体機能改善を目的に介護施設環境を利用し、仕事をしながらでも本人に必要な物を届けたりコミュニケーションを図ったりすること、それも立派な介護であると考える。

- ② A様は利用開始当初ようざんに来たことに納得が出来ずここが何処かも分からぬ状況に不安を感じ帰宅願望が強くなっていた。

事あるごとに「家に帰ります。」「息子に病院に行くって言って出て来ちゃったから帰らないと！」と立ち上がり玄関の前まで歩いてしまう事も何度かあった。いつもより強い口調になり「ここは人を閉じ込めるのか！警察へ行きます！」と怒鳴られる事や、職員の言葉を聞いて頂けなかったり職員を押したりと興奮状態になってしまう事もあった。そのような時は少し時間をおいてA様が落ち着かれるのを待ち、お話を聞いて頂けるようになってからA様の不安の訴えを受け止めながら、ようざんがどのような場所か納得して頂けるよう会話の中で説明した。認知症が背景にある為繰り返される質問に根気よく何度も会話を続けているとその場のA様は納得されるが、しばらくするとその状況が再度繰り返されることも少なくなかった。しかしその繰り返しによって今では職員や環境にも慣れ「帰りたい」「帰らなくちゃ」と訴える事が減っている。

利用者様の行動には意味があり話をしっかりと受け止め受容の環境を作り出すだけでも解決する事もあると言う事に改めて気付かされた。

- ③ いきなり寝たきりの状態になってしまったA様。介護保険資格者証の申請もなくご自宅においては全ての環境が整っていない状況であった。また初めて相談があったのが12月25日と世間は年末環境であった為すべてにおいてできる限りのスピード対応が必要となった。

12月25日（火）介護保険新規申請と主治医意見書の依頼を済ませ本人を自宅からお連れし暫定サービス提供開始。26日（水）福祉用具レンタルの為の家屋調査と担当者会議。28日（金）要介護認定調査。29日（土）から1月3日（木）まで世間は冬季休暇の為、次男様には、自宅へベッドを導入できるスペースつくりをして頂き、ベッド搬入は1月7日（月）とした。

トイレは二階にしかない為、自宅へ戻るときのA様の身体状況によってはポータブルトイレの購入を提案したがベッドを入れてぎりぎりの動線確保環境の為、できればポータブルトイレの設置はしないほうがありがたいとの次男様からの要望があった。その為、A様にはどうしても身体機能低下防止と精神面の機能向上への支援が必要とされるこ

ととなった。

A様は12月25日から1月11日まで連泊対応で腰椎圧迫骨折による痛みの軽減と機能改善を目的に過ごされ、ご家族のご協力も頂きながら全て予定通り進めることができたと思われる。次男様からは「一時はどうなることかと不安ばかりでしたが本当に助かりました。ありがとうございます。」との言葉も頂けた。

A様にとって普通の生活である家で過ごす事。次男様にとって普通の生活である仕事をしながら安心して生活する事。A様とご家族様へはそのことを意識して関わり支援提供させて頂いた。

現在はA様の歩行も問題なく出来ており、腰椎圧迫骨折前のA様の生活に少しづつ近づけることができていると思う。利用パターンは次男様の仕事の都合に合わせた早朝から夕食後までの通いを中心とするパターンに変わり、仕事の都合で隨時柔軟に変更対応可能としている。A様は無理なく在宅生活の中サービス利用ができ、次男様も無理なく仕事と介護を両立させた安心の中の生活を確保できたようで、毎回「ありがとうございます」という言葉をA様からも次男様からも頂いている。

【おわりに】

一般的にご家族は利用者様の介護も大切であるが、それと同じ位に仕事やプライベートな時間が大切であり、どちらかを切り捨てるのは難しいものである。

今回の事例は、利用者様は勿論のことだが、突然のことに困惑するご家族の不安に対する支援も大切にしていくものであった。この先どうなるのか、どうすればいいのか未知の世界に不安しかない状況に対しての支援。ご家族が仕事をしながら利用者様の介護も両立する為に何が必要かを考えそれを実行する。ご家族の負担を軽減する為に必要な環境を整える。小規模多機能居宅介護の特徴であるスピードと柔軟性、細かい支援提供、不安に対する支援が実施できたときに利用者様へもご家族へも安心の扉が開かれていくのだと考える。

家庭内の介護におけるご家族の苦労はとても大きなものである。私たちは小規模多機能型居宅介護としてこれからも利用者様やご家族、地域の方からの不安の訴えに対し、その心に寄り添い解決していく事を目標にして行きたいと思う。

家族との絆

～ハートフルケア～

ケアサポートセンターようざん

発表者：金田 唯
柏原 秀人

【はじめに】

今回紹介させていただく A 様は、ようざん利用開始時はご家族と一緒に生活していました。徘徊等の周辺症状が見られながらも、ご家族の熱心な介護により在宅での生活が送っていました。そんなある日、尿路感染の疑いで病院に入院することになりました。入院生活の中で経口からの食事摂取は困難と判断され経管栄養となり退院されました。退院後はようざんとご自宅を行き来したいというご家族の意向がありました。そんな中での A 様本人とご家族とようざんの関わりについて紹介させて頂きます。

【利用者様紹介】

氏名：A様 年齢：82 歳 性別：女性 介護度：要介護 5

既往歴：C型肝炎、尿管結石、尿路感染による腎盂腎炎、認知症、脳梗塞による失語・右片麻痺

生活歴：実家は酒屋を営んでいました。A市の文化服装学院を卒業、裁縫や細かい作業を得意としていました。

亡夫とは見合い結婚、1男1女を儲けました。

郵便局に勤務していた夫が自営を開始し、懸命に手伝っていたそうです。

現在は長男夫婦が後継者となり、孫の子守をすることが自らの役割になっていました。

【施設利用の経緯】

平成 29 年 9 月 20 日に脳梗塞で入院されました。当初は入所施設を勧められたそうですが、家族が在宅を希望し、小規模がベストだと判断したそうです。

平成 29 年 12 月 23 日に退院され、本人の様子観察をするため、一週間後に一時帰宅を目標とし利用開始となりました。

利用開始当初は徘徊、異食、感情失禁などがあり、目が離せない状態でした。家族と相談し、精神科に往診していただき内服調整で様子を見ることになりました。時折、感情失禁などあるものの一週間後には自宅へ帰ることができました。

その後は、家族の熱心な介護もあり通いと泊まりを繰り返し在宅生活が送っていました。

平成 30 年 9 月 11 日に尿路感染症で入院されました。入院中、尿路感染を頻回に繰り返す、

意識障害、けいれん発作などの影響で経口摂取が困難となり、経鼻経管栄養が開始されました。

平成30年11月15日に家族の強い希望もあり退院され、そして現在泊まりを中心にようざんを利用されています。

【退院後のご様子】

退院後はベッド上で過ごされ、発語もなく、少し手が動く状態でした。時々痰のからまりがあり、看護職による吸引が必要でした。

ご家族は仕事の合間をぬってはご本人に会いに足を運んでくださいました。

失語症の為、ご本人の意思はわからないですがご家族が面会に来た時の笑顔、そして帰ってしまったときの悲しそうな表情から一緒に帰りたいという本人の意思を感じ取ることができました。

【ご家族の思い】

母が病院に入院しているときに家族やようざんの職員さんがお見舞いに来ると、母はとても良い笑顔をするんです。その姿を見て、早く退院させてあげたいと思いました。ただ、自分たちの生活もあるし子供達を育てなければいけません。母も大事だけど、やっぱり子供が一番です。ですが、仕事と子育ての合間に少しでも自分が住んでいた家を見せてあげたいし、帰らせてあげたいと思っています。できれば在宅で介護をしていきたいという気持ちはあるが、仕事、子育てもあるので、信頼できるようざんさんで面倒を見てもらいたい。そして穏やかに最期まで過ごしてもらいたいです。

退院後の様子やご家族の思いを踏まえて、ご自宅とようざんを行き来して生活していくための、ご家族とようざんの取り組みについて紹介させていただきます。

【A様が生活していく上での問題点と取り組みについて】

・喀痰吸引について

A様は嚥下に障害があるため、ご自宅やようざんで生活していく上で喀痰吸引が必要です。ようざんでは看護師が必要に応じて喀痰吸引を行っていますが、ご家族は喀痰吸引の経験がありません。そこで、A様が在宅で生活するためにご家族が喀痰吸引の研修を受講してくださいました。A様が初めてご自宅に帰った際には、看護師がご自宅に訪問し、ご家族に実際に吸引の様子を見ていただきました。そしてご家族がご自宅にて吸引を行う事が出来るようになりました。

・体調管理について

A様はご自分で体調の変化に気づき、ご家族や職員に訴えることができません。その為、日

中は看護師がこまめにバイタルチェックを行い、夜間は夜勤者がバイタルチェックを行っています。何か異常があった場合の為に看護師の夜間電話対応者を毎日決め、すぐに連絡が取れる体制をとっています。また、褥瘡等の皮膚疾患の予防の為に体位交換を行っています。そしてご家族からの希望で訪問マッサージを利用し、拘縮予防を行っています。

・食事について

入院中、経口からの食事摂取は困難と判断され経鼻経管栄養となりました。経鼻経管栄養についてもご家族は経験がありません。そこで看護師がご家族にわかりやすく指導しました。退院して初めてご自宅に帰った際には看護師が訪問してご家族と一緒に経鼻経管栄養を実施しました。看護師が訪問することで少しでもご家族に安心して実施できるよう努めました。

・身体機能について

病院に入院中、ベッド上で寝たきりが長く続いた為、身体機能が著しく低下してしまいました。さらに車いすに座ると血圧の低下がみられ、最初のうちは5分も座っていることができませんでした。そこで毎日ご本人の体調を気にしながら、“5分でもいいから起こしていこう”と私たちチームで意見が合致しました。5分おきに血圧を測り、職員がそばにつき、なるべく話しかけるようにして座位保持訓練が始まりました。初めは表情も優れず、長くて10分が限界でした。

毎日続けていくうちに、笑顔が見られ簡単な質問に単語で答えていただけるようになり、車いすに座っていられる時間が20分、30分と日に日に伸びていき、いつもご家族との面会は居室でベッド上だったのがホールで面会できるようになりました。現在では1時間2時間、血圧の低下もなく座っていられるようになりました。その結果、シャワー浴ですが入浴もでき、自宅へ帰ることもでき、天気の良い日は散歩にも行くことが可能になりました。

・清潔保持について

退院当初は発熱や血圧の低下により入浴が行えず全身清拭を行っていましたが、座位保持が長時間可能になったことで週に2回入浴を行っています。その際、夜勤者による夜間帯の様子、バイタルなどを参考にし、看護師と連携しご本人に負担がかからないよう心がけています。他にも週2回歯科往診にて口腔ケア、場合に応じて理美容を行っています。

以上の取り組みを行うことで、A様とご家族の願いである“ご自宅とようざんを行き來した生活”の実現が可能になりました。また、ようざんでの取り組みを行うことや看護師がご自宅に訪問して指導するなど、ご家族への介護負担の軽減にもつながっていると思います。

【まとめ】

A様は入院中にご家族やようざんの職員がお見舞いに行くと笑顔が多くみられていました。

A様ご自身は喋ることが出来ませんが、ご家族が感じたようにご自宅やようざんでの生活を望んでいたのかもしれません。今回の取り組みを行う事でA様ご自身とご家族のご希望である“ご自宅とようざんを行き来する生活”を実現することが出来ました。

これは喀痰吸引や経鼻経管栄養など、今まで経験したことのないことをご家族が熱心に行ってくれた賜物だと思います。

A様がようざんを利用されている時にご家族は頻繁に面会に来てくださいます。その時、A様はとても良い笑顔をされており、ご家族とお会いできるのが心の底から嬉しいのだと私達は感じております。

退院後は寝たきりで座っていることもままならなかったA様がここまで快復できたのは、A様のご家族に会いたいという強い気持ちと、ご家族のA様と一緒に暮らしていきたいという強い気持ちがあったからだと思います。

私たちは今後もA様とご家族が一緒に生活していく様子を支援を行っていきたいです。

Aさんの「夕方になったから家の仕事をしないといけないので帰ります。」

の意味を知る。

ケアサポートセンターようざん大類

佐藤良名

丸山周平

1 はじめに

あなたは『認知症』と言うと、どう思いますか？無意識にその人の言動を「認知症からくる言動だらうと。」決め付けていませんか？

いつも 16 時すぎに必ずと言っていいほど、「夕方になったから家の仕事をしないといけないので帰ります。」と発言をするAさん。なぜいつも決まって 16 時すぎなのか？その言葉にある背景を探る事例を紹介します。

2 事例紹介

性別 女性

年齢 92 歳

要介護度 3

主な既往歴

アルツハイマー型認知症 高血圧症 慢性硬膜下血腫 (H28.9) 左肋骨 4.5.6 骨折
(H29.6/30) 左膝蓋骨折 (H29.6/30) 転倒による左頬骨折 (H28.7)

主な生活歴

Aさんは大正 15 年生まれ S 県の足袋工場の長女として生まれる。22 歳の結婚とともに G 県に移住し子供を二人もうけ育てる。

認知症の種類

アルツハイマー型認知症

中核症状

短期記憶障害 朝職員が来たことを覚えていないため短期記憶障害があると考えられる

意味記憶障害 簡単な足し算引き算ができるため意味記憶障害は見られない

実行機能障害 自分で衣類を更衣できるため実行機能障害は見られない

場所の見当識障害 トイレ、施設の場所がわかるため場所の見当識障害は見られない

時間の見当識障害 時間になったので帰るというため見当識障害は見られない

利用当初の様子

利用当初から必ずと言っていいほど 16 時ごろに「夕方になったから家の仕事をしないといけないので帰ります。」と落ち着きがなくなり、しばらくすると「私はどうしたらいいの？」「ちょっと話を聞いて。」など不安が大きくなり興奮した表情を浮かべ、近くにいる

スタッフ、他利用者様に声をかける、その都度スタッフが「夕食食べたらお送りしますので、安心してください。」と説明するが、本人「私は夕食を作らないといけないので今すぐ送って。」と興奮した表情が続く。本人は短期記憶障害のためすぐ忘れてしまい10分後にはまた不安が大きくなり興奮した表情になってしまい、「夕方になったから家の仕事をしないといけないので帰ります。」や「私はどうしたらいいの。」の発言を繰り返し、他利用者様から「あの人はいつも怒っている。」や「何回も同じこと言ってどうしようもないね。」と言われてしまう。

課題

どうすればAさんの不安を取り除けるのか？

なぜいつも16時過ぎに帰宅要望ができるのか？

3 取り組み① Aさんの不安を取り除くにはどうすればいいのか？

服薬の確認、見直し。

Aさんの以前の服薬を看護師と共に見直すと服薬にアリセプトがあり、アリセプトの副作用で興奮やイライラ感、落ち着きのなさが出現することがあるので、16時過ぎのAさんの興奮はそれではないのか？と考え家族と医師に相談しアリセプトからコントミンに変更する。

服薬内容（作用と副作用）

アリセプト 作用 認知症の症状を遅らせる

副作用 精神神経系では、易怒（いど）性（怒りっぽくなる）・攻撃性・暴言・興奮などの症状

コントミン 作用 不安や緊張を和らげ、気分を安定させる

副作用 眠気、注意力、集中力、反射運動など低下

取り組み結果①

アリセプトからコントミンに変更し様子をみると、以前のように16時ごろからの帰宅要望はあるが、興奮した表情で「私はどうすればいいの？」「私の話を聞いて。」などの言葉はなくなった。

4 取り組み②なぜ16時以降に帰宅要望ができるのか？

まず、Aさんの情報を本人、家族、スタッフ間から聞き情報（既往歴・服薬情報・生活歴・元気な頃のAさんはどんな人だったか、など）を集め整理する。

【Aさんから聞いた情報】

中学の頃陸上部の高飛びの選手だった。根がはじめて几帳面な性格で自分が出来ることは自分でしたい。

【家族から聞いた情報】

少し神経質なため一度気になると不安になってしまう。はじめて時間通りに動く人だった。少し頑固なところがある。人と話すのが好き。

【スタッフから聞いた情報】

聞き上手で自然と人が集まる。

プライドが高い。

不穏になると他人の意見はまったく聞かないが数分すると表情が穏やかになり機嫌もよくなる。

昔の事をよく覚えていて話好き、送迎中も話が弾み、笑顔が絶えない。

洗濯物や配膳が少し汚れていると、拭いたりとキッチリしている。

以上の情報収集から見えてきたAさんの姿

話好き

聞き上手

プライドが高い

笑顔が絶えないので人が集まつくる

少し神経質

取り組み②の開始時の様子

毎日施設利用をしているAさんが必ずというほど16時過ぎにホールの机で他利用者様B.Cさんと会話しているが急に時計を気にしだし少し困った表情でみけんにシワを寄せながら「夕方になったから家の仕事をしないといけないので帰ります。」と他利用者様、スタッフなどに声をかける。スタッフたちは「夕食後にお送りしますので安心してください。」と話すが短期記憶障害があり10分後には忘れてしまい他利用者様B.Cさんが「あんたは夕食食べてから帰るんだよ。」とトラブルになる。

観察、言動理由からどのようにケアをしていけばいいのかの方向性を確立してスタッフと共有する

しっかりとAさんの話を傾聴し受容する。決して否定しない。その後に安心して頂ける様な対応をしていく。声掛けを統一し、指摘や否定される事を嫌がる人なのでワンダウンポジションにて対応する。

取り組み結果②

ケアの方向性に基づくケアの実施の結果。Aさんの話を傾聴し受容したがみけんにシワを寄せる回数は多少減ったが帰宅要望の訴えの回数は変わらなかった。

なぜ決まって16時に帰宅要望ができるのか？と考えると家族から聞いた情報でAさんは昔から時間通りに動いて大体16時頃から夕飯料理をしていた。との話から今回の言動の背景があるのではないか？と考え、再度職員と話し合い、声掛けと対応方法を共有統一しAさんの話を受容し「夕食後にお送りしますので安心してください。」と伝えるのではなく「夕食はご家族が作ってくれるので安心してください。」と伝えるように実施すると多少ではあるがみけんにシワを寄せる回数や帰宅要望が減った。

今回の事で、Aさんの「夕方になったから家の仕事をしないといけないので帰ります。」の意味は認知症から来る帰宅要望ではなく、Aさんの以前からのルーティンということがわかった。Aさんの言動全てを理解することはできないがAさんをさらに深く知る事でAさんの気持ちに沿った関わりができるのではないかと感じた。

5 まとめ

今回の取り組みによりAさんの生活歴やその人を理解した上でケアする事の大切さを改めて学ぶ事ができた。今まででは、無意識に自分達は『認知症』というラベリングをしてしまい、Aさんのルーティンを帰宅要望と捉えてしまっていた。自分の思い込みでのケアはAさんの本意に沿ったケアではないという事に気づく事が出来た。これから、専門職として利用者様に関わって行く上でその人を理解する努力を怠らず、一人一人の背景を踏まえた上で、根拠のあるケアを実施していく。

俺のやりてえ事は…

ケアサポートセンターようざん小塙

発表者：関上 健一

[はじめに]

仕事も趣味も一生懸命。家族も大事にされ、年に一度は家族で旅行に行かれる。

あなたの周りにも一人くらいませんか、そんな活動的な男性が・・・

そんな方が高齢になり認知症を患ったら・・・

[事例紹介]

A様 87歳 男性 要介護度4

既往症：糖尿病 認知症

障害高齢者の日常生活自立度 B2

認知症高齢者の日常生活自立度 IV

[生活歴]

H町出身。10人兄弟の5番目。理容師を目指してT市S町で修行をしていましたが、31歳で結婚し一男一女を授かりました。その後修行の甲斐あってO町で自分の理髪店を開業し、昭和46年に自宅兼理容院を開設し、現在のS町に家族と引っ越してきました。ご長男も理容師であり現在はI市より通われて家業の理髪店を継いでおられます。とても仲の良いご夫婦二人暮らし。Aさんは若い頃からお仕事の傍ら、ギターやマージャン、囲碁にドライブ、盆栽と多趣味でいらっしゃり、お店をご長男に譲ってからはスキーやゲートボールも始められたそうです。

[サービス開始までの経過]

そんなAさんに変化が見られたのは83歳の頃でした。以前より糖尿病でB医院に通院していましたが、平成30年10月重症肺炎でC病院入院となってから全身痩弱と認知症が急激に進行しました。肺炎は治癒し回復期病棟でリハビリを受けてから身体機能は改善したものの、短期記憶、日常の意思決定判断に支障をきたすなどの認知症状は改善されませんでした。

その後、家族と本人の強い希望で在宅復帰を目指して小規模多機能の利用開始となりました。

[サービス開始当初]

車椅子生活が長く、下肢筋力の低下が見られましたが、リハビリにより徐々に筋力も向上してきました。それと同時に帰宅願望も強くなり、苑に到着直後から「お袋が家で待っている

んだ」「仕事があるんだ」「大丈夫、歩いて帰れるから」と玄関に何度も何度も向かわれるようになりました。ただしAさんは興奮することもなく、長年の客商売の経験の賜物か、いつも穏やかに話され相手の話をまるで注文を聞くようにとても丁寧に聞いてくださるのです。そこで『Aさんのお気に入りを探せ！』作戦が始まりました。

[作戦]

① ギター演奏

若い頃はかなり熱中されて腕前も素晴らしいものだったそうですが、なかなか思うように演奏できず、ご本人も諦めてしまいました。

② 五目並べ

将棋に比べ勝負が早くつくこともあり、ご本人が集中されなかなかの実力者。職員が本気で戦っても負けてしまうこともあります。利用者様同士で現在も熱戦を展開中です。

③ マージャン

これもかなりの腕前で“勝負師”としての実力を発揮され盛り上がるのですが、なかなか4人のメンバーが揃わず、その点が難点ですが随時開催し、現在も継続中です。

そんな“お気に入り探し”以外でも元理容師のAさんは手先が器用な上に几帳面な性格で、食器拭きや洗濯物干し、洗濯物たたみなどもとても綺麗にこなして下さるのでよくお願ひしています。職員と一緒に洗濯物を干しているとき「さすがは床屋さん！干すのが上手ですね」と声をかけると「よく干したからね、タオル。でもまたハサミが持てえなあ」と話されたのです。“あ！そうか！Aさんはまた床屋をやりたいんだ”そこから作戦は『Aさん！床屋さんカムバック作戦』に変更となりました。

[作戦]

- ① まず、理髪店を継がれている長男様に相談すると快諾していただき「それなら 親父が使っていた理容道具がそのままあるよ」と貸してくださいました。
- ② 現在の腕前がわからないので“失敗してもよい職員”で試してみることにしました。するとかなりブランクがあったにも関わらず、素晴らしい腕前。およそ30分間一心不乱にハサミを動かし続ける姿は現役時代を彷彿とさせるもので“仕事人のカッコよさ”にあふれています。仕上がりも上手な床屋さんそのものでした。
- ③ しかしご本人は「バリカンがないからダメだ」不満そうな様子。そこで次回は バリカンを用意し、再び“失敗してもよい職員”で散髪していただき、今度はご本人も満足の仕上がりとなりました。傍で見ていた利用者様方も「すごいなー俺もやってもらうかな」との声が聞かれました。

[考察]

ご利用当初に比べ身体機能が向上したのはもちろんですが、今では自ら碁盤を持っていき他の利用者様と対戦されたりトランプに参加されたりと、会話と笑顔が増え、時には「床屋さん」としての腕も振るっていらっしゃいます。

[まとめ]

“年をとる”“老いる”または“病気になる”ことは、それまで出来ていたことが出来なくなり喪失することかもしれません。それを目の当たりにする家族は“親父は座っていればいいよ”“おばあちゃん、料理は危ないからもうしないで”と、お年寄りを気遣う気持ちから声をかけます。すると、なにもしなくてよい自分の存在は何だろう？存在する、生きていく意義があるのだろうか？と考えがちになるのでは ないでしょうか。それは、お年寄りに限った話ではなく、私達でも“何の役にも誰の役にも立っていない”と感じてしまうと生きる意味を見失ってしまうかもしれません。では、ご利用者様をはじめお年寄りとどう向き合ったら良いのでしょうか？以前出来たことをできるだけ続けてもらえばいいのでしょうか？おそらく正解は出ないと思います。大切なことは、ご本人に寄り添い、一緒になって考え悩み、答えを模索し続け、その過程の中で少しでも多くの笑顔に触れ、一緒に笑い合えることではないでしょうか。

第11回

ようざん認知症介護事例発表会

本日の事例発表の際のスライドで使用される写真など個人情報につきましては、本人並びにご家族の同意とご了承を頂いております。事例発表は、本人とご家族、職員が一体になって取り組んでこそ大きな成果を得られるものです。本日の発表に向けて頂戴しました、ご家族の温かいご理解と深甚なご協力に対し心から感謝を申し上げます。大変ありがとうございました。

今回事例発表させて頂く7事例は、下記の32事例から選抜された優秀事例です。

ケアサポートセンターようざんのホームページにすべての事例を掲載しています。

- | | |
|---------------------------------------------------|-------------------|
| 1.綺麗にしておきたい！・・・のだけど | ケアサポートセンターようざん藤塚 |
| 2.「大丈夫」言葉の背景を探る | ケアサポートセンターようざん並榎 |
| 3.ありがとう!!勘弁してください | ケアサポートセンターようざん飯塚 |
| 4.「見えない」に負けない 明日～続く光 | ケアサポートセンターようざん中居 |
| 5.ストレングスモデル | ケアサポートセンターようざん栗崎 |
| 6.～ただ、穏やかな気持ちで過ごしたい～ | ケアサポートセンターようざん倉賀野 |
| 7.今日もよろしくお願ひします。 | ケアサポートセンターようざん貝沢 |
| 8.「特別」じゃない「当たり前」のこと。 | ケアサポートセンターようざん双葉 |
| 9.「ありがとうございます。助かりました！」 | ケアサポートセンターようざん石原 |
| 10.家族との絆～ハートフルケア～ | ケアサポートセンターようざん |
| 11.Aさんの「夕方になったから家の仕事をしないといけないので帰ります。」の意味を知る。 | ケアサポートセンターようざん大類 |
| 12.俺のやりてえ事は… | ケアサポートセンターようざん小塙 |
| 13.気力の火 ～生きる力を最大限に發揮して頂く為には～ | スーパーDEI ようざん小塙 |
| 14.いつまでも通いたい ～私達に出来る事～ | スーパーDEI 貝沢 |
| 15.みんなで一緒に笑おうよ | ディサービスばから |
| 16.バリデーションから学ぶ介護の原点 | スーパーDEI ようざん石原 |
| 17.「布パンツで過ごしたい！」 | スーパーDEI ようざん栗崎 |
| 18.ここはどこ？埼玉だっけ？ | スーパーDEI ようざん |
| 19.ずっと、ようざんに通いたい | スーパーDEI ようざん双葉 |
| 20.認知症介護に一生懸命です！！ | ディサービス ようざん並榎 |
| 21.「こころの支え」～信頼関係がもたらすもの～ | 居宅介護支援事業所 ようざん |
| 22.「安心と満足」 | グループホーム ようざん |
| 23. B P S D 夜間せん妄が強い利用者様を多角的にケアして | ショートステイ ようざん並榎 |
| 24.定期巡回・随時対応型訪問介護看護と在宅で緩和ケア「最後まで自分らしく暮らしたい」 | ナーシングホーム ようざん |
| 25.「見守りすることの大切さ～A様の為に私達に出来る支援～」グループホーム ようざん倉賀野 | |
| 26.自分らしさを取り戻すために ◇コミュニケーション◇ | 特別養護老人ホーム アダージオ |
| 27.私に仕事をください | ショートステイ ようざん |
| 28.「今も私は現役公務員」慣れない生活と不安な日々～話を傾聴し思いを受容した日々～ | 特別養護老人ホーム モデラート |
| 29.お互いの想い～散歩でつなぐ家族の絆～ | グループホーム ようざん栗崎 |
| 30.「きーちゃん」と共に生きる | 特別養護老人ホーム アンダンテ |
| 31.「オレの気持ちをわかってもらいたい」その人らしい生活を目指して グループホーム ようざん飯塚 | |
| 32. Life rich～生活の豊かさ ji～ | グランツ ようざん |

目次

家族との絆 ～ハートフルケア～

ケアサポートセンターようざん p.1

「見えない」に負けない 明日へ続く光～故郷へ想いをはせて～

ケアサポートセンターようざん中居 p.5

「バリデーションから学ぶ介護の原点」～寄り添うことの大切さ～

スーパーDEI ようざん石原 p.9

「特別」じゃない「当たり前」のこと。

ケアサポートセンターようざん双葉 p.13

『認知症介護に一生懸命です！！』～心に響くケアを目指して～

デイサービス ようざん並榎 p.16

私に仕事をください

ショートステイ ようざん p.21

「きーちゃん」と共に生きる

特別養護老人ホーム アンダンテ p.24

家族との絆

～ハートフルケア～

ケアサポートセンターようざん

発表者:金田 唯

柏原 秀人

【はじめに】

今回紹介させていただく A 様は、ようざん利用開始時はご家族と一緒に生活していました。徘徊等の周辺症状が見られながらも、ご家族の熱心な介護により在宅での生活が送っていました。そんなある日、尿路感染の疑いで病院に入院することになりました。入院生活の中で経口からの食事摂取は困難と判断され経管栄養となり退院されました。退院後はようざんとご自宅を行き来したいというご家族の意向がありました。そんな中での A 様本人とご家族とようざんの関わりについて紹介させて頂きます。

【利用者様紹介】

氏名:A様 年齢:82 歳 性別:女性 介護度:要介護5

既往歴:C型肝炎、尿管結石、尿路感染による腎孟腎炎、認知症、脳梗塞による失語・右片麻痺

生活歴:実家は酒屋を営んでいました。A市の文化服装学院を卒業、裁縫や細かい作業を得意としていました。

亡夫とは見合い結婚、1男1女を儲けました。

郵便局に勤務していた夫が自営を開始し、懸命に手伝っていたそうです。

現在は長男夫婦が後継者となり、孫の子守をすることが自らの役割になっていました。

【施設利用の経緯】

平成 29 年 9 月 20 日に脳梗塞で入院されました。当初は入所施設を勧められたそうですが、家族が在宅を希望し、小規模がベストだと判断したそうです。

平成 29 年 12 月 23 日に退院され、本人の様子観察をするため、一週間後に一時帰宅を目標とし利用開始となりました。

利用開始当初は徘徊、異食、感情失禁などがあり、目が離せない状態でした。家族と相談し、精神科に往診していただき内服調整で様子を見ることになりました。時折、感情失禁などあるもの一週間後には自宅へ帰ることができました。

その後は、家族の熱心な介護もあり通いと泊まりを繰り返し在宅生活が送っていました。

平成 30 年 9 月 11 日に尿路感染症で入院されました。入院中、尿路感染を頻回に繰り返す、意識障害、けいれん発作などの影響で経口摂取が困難となり、経鼻経管栄養が開始されました。

平成 30 年 11 月 15 日に家族の強い希望もあり退院され、そして現在泊まりを中心にようざんを利

用されています。

【退院後の様子】

退院後はベッド上で過ごされ、発語もなく、少し手が動く状態でした。時々痰のからまりがあり、看護職による吸引が必要でした。

ご家族は仕事の合間をぬってはご本人に会いに足を運んでくださいました。

失語症の為、ご本人の意思はわからないですがご家族が面会に来た時の笑顔、そして帰ってしまったときの悲しそうな表情から一緒に帰りたいという本人の意思を感じ取ることができました。

【ご家族の思い】

母が病院に入院しているときに家族やようさんの職員さんがお見舞いに来ると、母はとても良い笑顔をするんです。その姿を見て、早く退院させてあげたいと思いました。ただ、自分たちの生活もあるし子供達を育てなければいけません。母も大事だけど、やっぱり子供が一番です。ですが、仕事と子育ての合間に少しでも自分が住んでいた家を見せてあげたいし、帰らせてあげたいと思っています。できれば在宅で介護をしていきたいという気持ちはあるが、仕事、子育てもあるので、信頼できるようさんさんで面倒を見てもらいたい。そして穏やかに最期まで過ごしてもらいたいです。

退院後の様子やご家族の思いを踏まえて、ご自宅とようさんを行き来して生活していくための、ご家族とようさんの取り組みについて紹介させていただきます。

【A様が生活していく上の問題点と取り組みについて】

・喀痰吸引について

A様は嚥下に障害があるため、ご自宅やようさんで生活していく上で喀痰吸引が必要です。ようさんでは看護師が必要に応じて喀痰吸引を行っていますが、ご家族は喀痰吸引の経験がありません。そこで、A様が在宅で生活するためにご家族が喀痰吸引の研修を受講していただきました。A様が初めてご自宅に帰った際には、看護師がご自宅に訪問し、ご家族に実際に吸引の様子を見ていただきました。そしてご家族がご自宅にて吸引を行う事が出来るようになりました。

・体調管理について

A様はご自分で体調の変化に気づき、ご家族や職員に訴えることができません。その為、日中は看護師がこまめにバイタルチェックを行い、夜間は夜勤者がバイタルチェックを行っています。何か異常があった場合の為に看護師の夜間電話対応者を毎日決め、すぐに連絡が取れる体制をとっています。また、褥瘡等の皮膚疾患の予防の為に体位交換を行っています。そしてご家族からの希望で訪問マッサージを利用し、拘縮予防を行っています。

・食事について

入院中、経口からの食事摂取は困難と判断され経鼻経管栄養となりました。経鼻経管栄養についてもご家族は経験がありません。そこで看護師がご家族にわかりやすく指導しました。退院して初めてご自宅に帰った際には看護師が訪問してご家族と一緒に経鼻経管栄養を実施しました。看護師が訪問することで少しでもご家族に安心して実施できるよう努めました。

・身体機能について

病院に入院中、ベッド上で寝たきりが長く続いた為、身体機能が著しく低下してしまいました。さらに車いすに座ると血圧の低下がみられ、最初のうちは 5 分も座っていることができませんでした。そこで毎日ご本人の体調を気にしながら、“5 分でもいいから起こしていこう”と私たちチームで意見が合致しました。5 分おきに血圧を測り、職員がそばにつき、なるべく話しかけるようにして座位保持訓練が始まりました。初めは表情も優れず、長くて 10 分が限界でした。

毎日続けていくうちに、笑顔が見られ簡単な質問に単語で答えていただけるようになり、車いすに座っていられる時間が 20 分、30 分と日に日に伸びていき、いつもご家族との面会は居室でベッド上だったのでホールで面会できるようになりました。現在では 1 時間 2 時間、血圧の低下もなく座っていられるようになりました。その結果、シャワー浴ですが入浴もでき、自宅へ帰ることもでき、天気の良い日は散歩にも行くことが可能になりました。

・清潔保持について

退院当初は発熱や血圧の低下により入浴が行えず全身清拭を行っていましたが、座位保持が長時間可能になったことで週に 2 回入浴を行っています。その際、夜勤者による夜間帯の様子、バイタルなどを参考にし、看護師と連携しご本人に負担がかからないよう心がけています。他にも週 2 回歯科往診にて口腔ケア、場合に応じて理美容を行っています。

以上の取り組みを行うことで、A様とご家族の願いである“ご自宅とようざんを行き来した生活”的実現が可能になりました。また、ようざんでの取り組みを行うことや看護師がご自宅に訪問して指導するなど、ご家族への介護負担の軽減にもつながっていると思います。

【まとめ】

A様は入院中にご家族やようざんの職員がお見舞いに行くと笑顔が多くみられていました。A様ご自身は喋ることが出来ませんが、ご家族が感じたようにご自宅やようざんでの生活を望んでいたのかもしれません。今回の取り組みを行うことでA様ご自身とご家族のご希望である“ご自宅とようざんを行き来する生活”を実現することが出来ました。

これは喀痰吸引や経鼻経管栄養など、今まで経験したことのないことをご家族が熱心に行ってくれた賜物だと思います。

A様がようざんを利用されている時にご家族は頻繁に面会に来てくださいます。その時、A様はと

ても良い笑顔をされており、ご家族とお会いできるのが心の底から嬉しいのだと私達は感じております。

退院後は寝たきりで座っていることもままならなかったA様がここまで快復できたのは、A様のご家族に会いたいという強い気持ちと、ご家族のA様と一緒に暮らしていきたいという強い気持ちがあったからだと思います。

私たちは今後もA様とご家族が一緒に生活していくように支援を行っていきたいです。

「見えない」に負けない 明日へ続く光

～故郷へ想いをはせて～

ケアサポートセンターようざん中居 丸山 美由紀
近江 全子

【はじめに】

小規模多機能施設の大きな役割は、在宅生活を続ける為の支援です。
ご本人様が、長年暮らした自宅で安心して生活ができるようお手伝いをすることです。
今回、私たちは病気の悪化に伴い今までの生活が困難となった方の在宅復帰に寄り添った事例について発表いたします。

【ご利用者様紹介】

氏名 K様 (要介護度3)

性別 男性

年齢 76歳

既往歴 高血圧 糖尿病 白内障(両眼) 脳梗塞(H29 10)

和歌山に生まれ、結婚し1女をもうけるも離婚。

17年ほど前に仕事の為 高崎に移住する。

昔から糖尿病であったがきちんと通院治療してこなかった。

4~5年前から白内障の為、両目の視力低下があったものの、なんとか自立生活を継続していたが、平成29年10月に脳梗塞を発症し高崎総合医療センターへ救急搬送される。

第一病院転院後、約3か月の加療、リハビリを経て退院となるが、入院中に白内障が悪化し、ほぼ両眼の視力が失われ独居での生活が困難な為、病院のソーシャルワーカーから相談がありようざん中居の利用が開始となる。

当時は白内障の手術で、だいぶ視力は回復するとの事で手術の予定されたてば一ヶ月ほどで以前のような生活に戻れるとの認識でした。

退院直後は、ようざんで宿泊対応をし、手術の予定や治療の計画を立てていく事になりました。

30年1月30日 高崎総合医療センターにて部分麻酔で行った白内障手術は、目が動いてしまい手術できず。予定を組みなおし、再度手術となります。

同病院にて2月20日 再度、白内障手術施行。手術時、眼中内の白い濁った部分は除去できたものの、取れた水晶体片が眼底に入ってしまい対応できないとの事で急遽 高崎総合医療センタ

一から、ようざん送迎にて群大病院へ向かい、同日20:30から落ちた水晶体片の除去とともに両眼の手術を行う事となります。

和歌山から娘様が付き添いのため来られていたのですが、一人では不安との事でスタッフも付き添い22時頃に無事手術が終了、術後の説明をうけるなど深夜近くまで家族に寄り添い対応致しました。

その後2~3日の入院を経て、2月23日に無事退院し、目の状態が落ちくつくまでようざんで宿泊対応致しました。

一ヶ月はゴーグル着用、1日5回の点眼の実施、手術も上手くいきK様も一安心されたご様子でした。

以後、定期的に行く群大病院には、ご家族様が遠方である為スタッフが付き添い、丸1日かけての受診介助には、途中でスタッフを交代して対応しました。

K様も長い治療に根気強く取り組み頑張って下さいました。(以下受診経過参照)

	病院名	受診時間	経過内容
30年 3月23日	群大病院 受診	10:00~20:30	経過良好
4月19日	群大病院 受診	14:00~19:15	経過良好
5月22日	高崎総合医療センター 受診	10:30~12:00	経過良好 自宅近くの眼科に移行する

並行して在宅生活復帰に向け ご本人様がいつも過ごしていた居間にベットを移動し自宅の環境を整えつつ、まず1~2時間の日中帰宅を始めました。

自宅に戻る時には 1日5回訪問して点眼を行いようやく通いと在宅での支援が始まりました。

ところが、一ヶ月後の6月19日の眼科受診時に精密検査が必要と言われ、群大病院を受診した結果、右目網膜剥離の為手術が必要と言われ、6月28日、29日と2日にかけ再受診し、右目の手術の日程と、新たに左目のレーザー治療の予定を組みました。

7月3日 全身麻酔で右目の網膜剥離の手術施行、手術中はスタッフが付き添いを行いました。

(以下受診経過参照)

	病院名	受診時間	経過内容
30年 6月28日	群大病院 受診	8:30~15:00	検査の為 受診
6月29日	群大病院 受診	9:00~15:00	検査の為 受診
7月 2日	群大病院 入院	7:40~11:00	入院送迎
7月 3日	群大病院 手術	8:00~12:30	全身麻酔にて右目網膜剥離 手術実施。 スタッフ付き添い
7月 8日	群大病院 退院	11:00~12:30	退院送迎

7月8日に無事退院となり、再び在宅に向けK様と一緒に通院治療が始まりました。

(以下受診経過参照)

	病院名	受診時間	経過内容
30年 7月13日	群大病院 受診	9:00~14:00	経過良好。抜糸をおこない視力は徐々に回復。
7月18日	群大病院 受診	13:00~17:00	経過良好。
8月 3日	群大病院 受診	13:00~17:00	目に水が溜まっているが、様子を見ることとなる。
8月17日	群大病院 受診	13:00~17:00	経過良好
9月14日	群大病院 受診	10:00~16:00	網膜剥離 完治次回の受診で自宅近くの眼科受診に切り替える事となる。目薬も使いきりで終了。
10月26日	群大病院 受診	10:00~17:00	本日にて終了予定であったが、左目のレーザー治療を忘れていたとのことで、受診継続となる。

	病院名	受診時間	経過内容
30年 11月 1日	群大病院 受診	14:00～18:00	左眼のレーザー治療
11月 9日	群大病院 受診	15:00～18:30	左眼のレーザー治療
11月15日	群大病院 受診	14:00～18:30	左眼のレーザー治療

11月15日の治療を最後に群大病院受診が終了し、自宅近くの眼科受診へ移行となり、経過観察と点眼の継続で状態が安定してきました。

一か月の予定であった治療が、結果 約1年かかり、3つの病院で検査、通院、手術を行いようやくK様も安心して自宅で生活できるレベルの視力まで回復しました。

白内障の治療にもやっとめどがつき、家族がいる和歌山へ帰りたいと言う言葉が聞かれるようになり、私たちスタッフ一同もみなそうなれたらいいなと思っていました。

ところが、K様に高カリウム血症のリスクが発症したのです。

血液検査のカリウムの値が少しずつ悪化し、平成31年2月には6. 1mEq/Lの値が出てしましました。

そして医師から「このままじゃ入院になるよ」「いつ、心臓が止まってもおかしくないんだからね」との言葉があり、帰郷に前向きになっていたK様には本当に残酷な言葉でした。

改めて、スタッフ一丸となりK様と数値改善に取り組んだ結果、4月の検査ではカリウム値 5. 7 mEq/L、6月には 5. 1mEq/Lと改善することができました。

配食センター ばかりの本多所長にも、1食分のカリウム値を計算して頂くなどご協力を頂き、お忙しい中、本当にありがとうございました。

もうしばらく、食事療法を継続しカリウム値を下げ、体力をつけてご家族様の待つ故郷に帰れる日をめざして行きたいと思います。

【終わりに】

今回、私たちは一年に渡る白内障の治療に寄り添い、K様が安心して在宅で生活できるレベルまで視力を回復する事ができました。まだ問題は続いているが、K様の想いである「故郷へ帰る」を目指してこれからも取り組んで参りたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

「バリデーションから学ぶ介護の原点」

～寄り添うことの大切さ～

スーパー・デイ・ようざん・石原

発表者：手島圭子

＜はじめに＞

「おはようございます！」と職員が出迎えても、無表情で発語もありません。その後の話しかけにも反応は無く、お茶や食事にも口を付けず、反応があるとすれば入浴や排泄介助時の「殺せばいいだろう！」などの暴言と叩く、つねる、引っ搔くの暴力、床に寝そべり手足をバタつかせたりの介護抵抗や床や壁に頭を打ち付ける自傷行為と言った言動です。

つい半年前までは、笑顔で来苑され帰宅時にも笑顔で「今度いつ来るんかねえ？」と必ず確認をされ、ご家族からも「ようざんに行くのを楽しみにしているんですよ」とのお話もありました。それが急激とも思えるその変わりように「どうしたんだろう？！」と職員一同驚き、正直不安と戸惑いを隠せませんでしたが、バリデーションを実践することで少しづつではありますが、変化が表れた事例を紹介します。

＜利用者紹介＞

氏名：A様

性別：女性

年齢：89歳

介護度：要介護3

既往歴：アルツハイマー型認知症、糖尿病、高血圧症

＜生活歴及び利用の経緯＞

8人兄弟の次女として生まれ、幼い頃から4人の弟の面倒を見ながら親を助け、弱音を吐くことも無く頑張って来られました。弟さん達からは「気が強い」「うるさい」「怖い」と言われながらも良き姉として慕われ、頭が上がらない存在でした。

結婚して子供が生まれてからご主人と印刷業を営み、A様は製本などを受け持ち夫婦二人三脚で支え合って、子育て・家事・仕事をこなして来られました。

現在は息子さんが後を継がれていますが、今でもテーブルの上の物が曲がっていると真っ直ぐに直されたり、カードや歌集をきちんと揃えられる動作から、当時の仕事ぶりがうかがい知れます。53歳の時にご主人が他界されてからは、それまで以上に独りで寝る間も惜しんで仕事に励まれました。そんな中でも唯一おしゃれを楽しむ、今でもタンスの中は好みの洋服でいっぱいです。

性格は短気で、気に入らないと文句を言ったり、やりたくない事には「好きにすれば良いだろ

う！」と開き直ることがあったりしても、困ったときには黙っていても必ず助けてくれる情の深い面も多々あったそうです。

平成26年頃から、元々近所付き合いや外出も乏しかったところに更に引きこもり状態となり、日に何度も同じことを言ったり聞いたりする様にご家族も困惑され、生活状態を改善して健康的な生活を送って欲しいと言う思いから、同年9月から利用開始となりました。

＜利用当初の様子と変化＞

あまり社交的では無かったことからご家族も利用できるか心配をされていましたが、体験利用時から各種レクに熱心に参加をされ、他者との交流も良好でした。継続利用となってからも、職員の顔を覗き込んで「あんた良い顔してるねえ」とお道化られたり、慰問の際は、最前列で童心に帰られたようにノリノリで喜ばれていました。いつも笑顔で来苑され帰宅時にも「今度いつ来るんかねえ？」と聞かれ、職員の答えを聞いてから上機嫌で帰っていました。

変化が始めたのは、去年の秋頃からでした。徐々に無表情、意欲低下、声掛けにも無反応で自らの発語も少なくなって行きました。あんなに喜ばれていた慰問の際も最後列で職員の手を握り締めて、この時ばかりは「ここにいてくれる？」「あっちの部屋に帰れるんかね？」と子供が不安そうな表情で訴えられるようになる一方で、排泄や入浴介助に対して床に寝ころび、駄々っ子のように手足をバタつかせながら「殺せばいいだろう！」と大声や奇声を発したり、叩く・つねる・引っ搔くの暴力や、人の気を引くためにわざと床や壁に頭を打ち付けると言った自傷行為が頻回となりました。

食事や水分も毎回自力で全量摂取されていたのが、配膳しても押し退けたり手で払い退けたりで、未摂取の日があったり、自力では食べないものの声掛けをしながらの介助で、何とか8割程食べられました。

同じ頃ご家族からも…

- ・認知症が進んで、いろいろなことが理解できなくなって大変
- ・暴力もあったりするので大変
- ・仕事や年頃の娘のこともあり、なかなか相手をしたり世話をするのが難しい
- ・下の処理が上手く出来なくなっていて大変

とのお話があり、定期受診の際に主治医にも相談をして薬が処方されましたが、目に見えた変化はありません。

＜取り組み＞

「原因は、いったい何だろう？」と悩みました。唯一思い当たるのがショートステイの利用でした。利用開始当初は一泊二日を月に1回程度だったのが、ご家庭の事情で二泊三日を月2~3回と徐々に増え、現在は三泊四日を月4回となっており、これに伴って症状の変化も見られる様になったことから、環境・生活・人間関係の変化による混乱や不安と家に帰れない寂しさなどによるストレスに因って、子供帰りしているのではないかと推察しました。そこから不安や寂しさ

を軽減するには、介護の原点であるバリデーションが効果的ではと考え実践することにしました。

先ず、職員全員が同じ対応ができる様に

・寄り添いながら

- ① ミラーリング
- ② アイコンタクト
- ③ タッチングやタクティール
- ④ 童謡や唱歌などの音楽を活用
- ⑤ はっきりとした低い温かみのある声で話しかける

の5項目を周知し、来苑時、レクリエーション時、トイレ誘導時、入浴時、昼食時、帰宅時に必ずどれかを実践して、その時の状態変化(表情・発語・行動・態度)を記録して情報共有することにしました。

＜結果と現在の様子＞

実践を始めると…

- ・背中をさすりながら唄うと、つぶやきのような声でも一緒に唄われる。
- ・童謡をゆっくり優しい声で唄うと、今まで一度もウトウトされたことが無かったのがウトウトとされる。
- ・手を包み込み「手が冷たいから温めましょうね」の声掛けに「うん」と頷かれる。
- ・食事介助中に目を見て、温かみのある声で「美味しいですか？」と聞くと「美味しい」とつぶやかれ、久しぶりに全量摂取される。

などの変化が見られましたが、もちろんこんなことが毎回見られる訳は無く、日によつては変わらず、感情を爆発される事ももちろんあります。それでもめげず、逃げず、諦めず、根気強く正面から向き合い続けました。

ある日のことレクリエーションで、以前良くやっていた数字パズルを始めた時のことです。いつも通りバリデーションを行なながら、職員が「これは、ここですね」「そうそう。そうですね」と誘導すると「ああ、ここかい」「これは、ここだね」と指さしをしたり、会話をしながら協力して1～55までを全て並べきました。そこには、以前のA様が居るではありませんか！「おお！」と感激と嬉しさのあまり、ついウルウルしてしまい思わず「バンザイ！」と言うと、A様も嬉しそうに笑って下さいました。

その後も…

- ・職員が横に座って冗談を言いながらタッチングすると、笑いながらタッチングを返してくれる。
- ・職員が変顔をすると、何度も声を出して笑われる。
- ・食事は介助することが多かったのが、自力で残さず食べられるようになる。
- ・「今日は、ピンクの素敵な服ですね」と称賛すると「そうかねー。皆だって可愛いよ」と返して下さる等々、表情も発語も増えて、少しずつではあっても以前のA様に戻ら

れているのが感じられます。

また今回の取り組みは、職員にも変化をもたらしました。

・職員も焦ったり戸惑うばかりで無く、一呼吸して気持ちを落ち着かせることができ

るようになった。

・A様の表情に近づけたり、視線を合わせることで、言葉が少なくともお互いの感情

が伝わりやすくなった。

と言う感想や意見が出るようになったことは、職員の成長にも繋がりました。

＜まとめ：考察＞

認知症の人にとって“変化”は無いのが理想であっても、現実的ではありません。

今回のA様についても、一緒に暮らす家族の諸事情でショートステイをご利用する二
とは、やむをえないことでした。

反省すべきは私達職員が、そういった変化に伴いご本人にも何かしらの変化が出るで
あろうことを事前に予測し、対応策を考えておらず後手に回ってしまったことです。

幸いそれでも変化の時期と要因を照らし合わせ原因を推察し、併せてご本人の変化の
状態を観察し、逃げず、否定せず、ありのままを受け止め受け入れ、介護の原点でもある
バリデーションを実践することで、子供帰りと言う一種の現実逃避の状態から少しづ
つ以前の状態に戻られつつあります。

時間を要し、それでもしかすると完全にとは行かないかも知れませんが、また笑顔
で「今度いつ来るなんかねえ？」と手を振られることを信じて、現在も取り組んでいます。

「特別」じゃない「当たり前」のこと。

ケアサポートセンターようざん双葉

発表者:小野塚 聖鷹

【はじめに】

歳を重ね、徐々に若い頃のように自由に体を動かすことが出来なくなり、更に認知症を患っても、人は「やりたいこと」「食べたいもの」「会いたい人」「行きたい場所」色々な欲求を持って生活しています。それらの欲求は、これまで当たり前だったことが、次第に加齢や疾病により「特別な事」になっていきます。しかし、一人ではできないことも、支援する事でその望みを実現する事はいくらでもできます。つまり、周りの環境次第で「特別な事」ではなく今まで通り「当たり前」のようにやりたいことができる環境を創ることが出来ます。今回の事例を通じ、「特別な事」として諦めていたことは、支援の環境次第で諦める事ではなくなり、次第に日常生活に「当たり前」の事になっていくと、私たち自身改めて気づくことが出来た事例について報告させていただきます。

【利用者様紹介】

A様 男性 78歳

要介護3 認知症高齢者日常生活自立度Ⅲb

長谷川式簡易知能スケール:15点

既往歴:認知症・慢性閉塞性肺疾患・右上腕近位端骨折術後

3人兄弟の長男として東京でお生まれになる。

その後、本庄で庭師として弟子を指導しながら生計を立てる。

結婚し息子と3人で生活していたが、病により妻が他界。

現在は高崎で生活保護を受けながら独居での生活を送っており、家族とも疎遠状態となっている。

【経緯】

ご本人は慢性閉塞性肺疾患(COPD)を患っており、呼吸苦を感じると日常的に昼夜間わざ救急車を呼び、繰り返しA病院へ搬送されていました。多い時は1日に5回呼んでしまう事も。症状により入院になる事もありましたが、家に帰りたくなると「今日帰る!」と言い強引に退院されるような状況が続いていました。退院して、数時間後に救急車で病院へ戻ることもありました。

そんな中、相談員さんより介護サービスの相談を受け、4月より小規模多機能と訪問看護のプランによる支援が開始されました。

【支援開始】

アセスメントや担当者会議を通じ、自分で決めた事は曲げず、周りの意見に耳を貸さないという印象があり「果たしてサービスの利用が出来るのか?」という不安だらけでのスタートでしたが、案の定訪問しても留守でお会いする事が全くできない状況が続きました。ようやく電話で話が出来ても、

「今日は来なくていい！」と一切サービスの受け入れが出来ない日々が続きました。このままではご本人の支援が出来ない。何とかできないかと、信頼関係構築の為のきっかけを模索する日々が続きました。しかし、私たちが抱えていた悩みはなんともあっけない形で解決されました。

【些細なきっかけ】

ある日病院より、「また救急車で本人がこちらに見えています。治療が終わりこれからタクシーで帰ろうとしています。無理を承知の連絡ですが、これからお迎えに来ることはできますか？」との連絡が入りました。なんとか調整し病院へ向かうと、これまで一切心を開かなかつたご本人が車の中で「ありがとう！いや～助かるよ！タクシーだと片道3000円だからな～！こんな親切な人がいるんだな。申し訳ない！」とご自宅まで送る車中、感謝の言葉が絶えず、今までとは別人のように言葉をかけてくださいました。この日を機に、徐々に訪問の支援が入れるようになりました。これまで呼吸苦を感じると救急車を呼んでいましたが、徐々にご自身で訪問看護へ連絡するようになり、プラン通り定期訪問の他、緊急時の訪問に入り頓服薬の対応が出来る頻度も増えてきました。病院の相談員さんからも、介護サービスが入るようになり救急車で来院される頻度が減少しているのを実感していますとの連絡も受けました。

【特別な場所】

ご本人は、少しずつご自身の事を私たちにお話し下さるようになりました。これまでの生い立ちの事に加え、今現在ご本人が「やりたい事」「行きたい場所」「食べたいもの」様々な事を話してくださいました。その中で、「うちの近くに『なみき』という喫茶店があって、あそこのコーヒーは高崎で一番うまいんだよ！俺はこんな体だからもう飲みたくても飲みに行けないけど、近くを通った時には寄って飲んでみろ。うまいぞ！」と教えてくださいました。元気な頃は当たり前のように通っていた喫茶店、しかし現在は本人にとって当たり前のように行ける場所ではなく「特別な場所」になっていました。ご本人からの話を受け、「今度一緒に行きましょうよ！」というと、驚いたように「お宅はそんなことまでしてくれるんか！ありがとう！もう行けね～って諦めてたんだよ」と話されました。

【「特別な事」から「当たり前」に】

喫茶店に行く日時を決め、いざ迎えた当日。お約束した日は生憎の今年一番の大雨。「残念だけど延期かな」と思いつつ、確認の電話を入れてみると、「何言ってんだよ！待ってるんだから来てくれよ！」と大雨を一切気にしておらず、久々に飲むコーヒーをタベから楽しみにしていたと話される。10時過ぎに喫茶店に到着。ご本人は迷わずモーニングセットを頼まれました。ご本人に伺うと、よく通ってた頃は決まってモーニングセットを頼んでいたとの事。「懐かしいなー。

相変わらずうめ～な～」と昔を懐かしむようにトーストやコーヒーを召し上がられていきました。するとご本人は「昔は色んなとこに行けて、いろんなことが出来て…でも年取ってこんな身体で、忘れっぽくもなつちまって…まあしがねえよな～。歳とるつうのはそういう事だもんな」と、今のご自身の素直な気持ちを話してくださいました。そんなご本人に、「定期的に行きましょうよ」と提案しました。

今回だけでなく、定期的に継続する事で「喫茶店でモーニングを食べてコーヒーを飲む」事が徐々に日常生活において、特別な事では無くなっていく事が期待できます。

【考察】

介護サービスが関わるようになり、服薬状況が改善し、救急要請が減り、少しずつ状態が安定した結果、行きたかった喫茶店行くことが出来ました。

当初、「そもそも介護サービスを利用できるのか？」という不安からのスタートでしたが、この様に一つの結果を残せた事に、小さな自信と、素直に「良かった」という気持ちと、「この方はもっといろんな事が出来るはず」という確信をもちました。

【おわりに】

こんな体じゃ…認知症だから…そんな理由で目の前に拡がる「楽しみ」を諦めなければいけないのでしょうか。確かに一人では難しい事もあります。加齢やご病気を理由に色んなことを諦めていたご本人。これまで諦めざるを得なかったのかもしれません。

しかし、私達「介護サービス」が関わるようになり、服薬状況が改善し、救急要請が減り、少しずつ状態が安定した結果、行きたかった喫茶店に行くことが出来ました。

今後も丁寧に関係作りを継続し、医療・介護サービス間で情報共有を図りながらチームで在宅支援を行い、これまで「特別な事」として諦めていたことを、一つでも多く「当たり前」にできる生活を目指していきたいと考えています。

これまで諦めていたことは、支援の環境を整える事でいくらでも実現する可能性は拡がります。それは継続していくことで「特別な事」から次第に「当たり前」の事へと変化していきます。

これまで諦めていたこと、私たちと一緒に「当たり前」にしていきましょう。

『認知症介護に一生懸命です！！』

～心に響くケアを目指して～

デイサービスようざん並榎
行方 博之

【はじめに】

本事例を発表するきっかけとなったのが今年の1月に祖母が他界したことでした。祖母は8年前にアルツハイマー型認知症と診断されデイサービスを利用開始しました。3年前頃から認知症状が悪化しはじめて徘徊が始まり警察に保護されることが多くなりました。その他にも頻回なトイレ、それに伴う転倒や介護抵抗など介護負担が増加し、キーパーソンの1人である母も当時はネガティブな発言が増え始め悩む姿が多くありました。そんな祖母ですが、大好きで夢中になれるものが編み物でした。デイサービスにいる時間だけでなく自宅に帰った後も夢中で編んでいました。それらは今でも我が家の家宝として使っていて、時々母も懐かしんで祖母の思い出を語っています。そんな心に残る作品や心に響くケアを自分の事業所で取り組みたいと思ったのが発端でした。認知症ケアは総合的な支援が必要で認知症の利用者への対応は勿論のこと、その家族のケア、地域との関わりが必要となってきます。今回は「心」をテーマとして認知症利用者・家族・地域のすべてに真摯に取り組んだ事例を報告致します。

テーマ1【他者との関わりを軸とした認知症利用者の心のケア】

＜対象者紹介＞

氏名:A様	氏名:B様
性別:女性	性別:女性
年齢:89歳	年齢:95歳
既往歴:アルツハイマー型認知症	既往歴:アルツハイマー型認知症
高血圧症、慢性硬膜血腫	本能性高血圧
性格:明るい、涙もろい	性格:穏和、頑固
趣味:グランドゴルフ、散歩、歌	趣味:気の合う方と会話、昔話
生活歴:埼玉県出身、夫と2人暮らし	生活歴:独居
洋裁を習っていた	和裁を習っていた
キリンビール工場に勤務	キリンビール工場に勤務

＜利用当初の2人の様子＞

A様は「私はしっかりしているからここにいる人とは違う！」「家で用事があるから帰るよ！」と帰宅願望が利用当初より多く出ていました。対するB様は「私は話が好きなのにいじわるする人がいる…」と隅の席に座り1人でぼんやり過ごす時間が多く、利用数回目には「友達と約束しているか

ら今日は休みます」と来所拒否の電話がありました。2人に共通していたのが「居心地の良い環境ではない」ということでした。

厚生労働省のホームページには認知症ケアの基本的考え方が掲載されています。その中から「心のケア」と「関係性の重視」に注目しました。2人の好きな事・得意な事をケアに取り入れ、また、2人の共通点から交流する機会を作り馴染みの人間関係の構築を試みました。

A様、B様への取り組み1 『想い出アルバムの作成』

2人が同じキリンビール工場に勤めていて裁縫の経験があるとの情報から当時のキリンビール工場関連の写真や裁縫道具の写真など2人の共通の想い出写真を集めたアルバムを作成しました。また、それだけでなく個々の想い出の写真と本物のキリンビールの空き瓶も用意しました。

A様、B様への取り組み2 『趣向に沿ったレクリエーション』

A様の好きな歌と得意なグランドゴルフをイベントにしてレクリエーションに取り入れました。その際B様が近くにいて一緒に楽しみを共有できるように工夫しました。

《認知症利用者への心のケア 考察》

○想い出アルバムのねらい

- ①回想法による効果の期待
- ②共通の話題を提供して2人の人間関係構築のキッカケを作る

○イベント系レクリエーションのねらい

- ①認知症利用者が輝けるレクリエーションの実施
- ②2人が楽しみを共感すること。また、他の利用者の輪に入りやすい環境をつくる

結果 A様もB様も想い出アルバムを見ると2人ともパッと表情が明るくなり「懐かしい！」「ここと一緒に働いていたよね！」と当時を思い出しながら話が盛り上がっていました。イベント系レクリエーションではA様は集団の中でいざ自分の番になると「恥ずかしいよ～」と照れながらも懐かしの歌を熱唱、グランドゴルフでは準優勝に輝き高らかな笑い声がホール内に響いていました。またイベント中、孤立しがちなB様に対してA様が隣から語りかける姿も多くあり、2人の交流も図っていました。他にもA様は得意分野で活躍したことにより他利用者から称賛されB様以外の気の合う方も出来ました。対するB様もアルバムを見て昔話を嬉しそうに語り安堵する表情が増えるなど予想以上の効果が出ました。

《課題》一部の利用者から帰宅願望などの認知症状が出るA様が主役になって目立つことや、職員が2人に多く関わる事に対して不満そうな発言が時々出ていました。周りの利用者の認知症への理解をどう深めていくか？が今後の課題です。

テーマ2【家族の想いと地域の支え合う心を大切に】

家族への取り組み 『ポジティブ思考の推進』

利用者様が認知・身体ともに重介護にも関わらず、ご家族様はいつも前向きに笑顔で接して下さる方がおります。ご家族様の辛い事、悩んでいる事を聞くことは今まで多かったですが、今回は視点を変えて逆にポジティブに考えられる出来事は何か？一部のご家族様にアンケートをとったところ、快い協力のもと速やかにお返事がきました。

「家族の声」

- ・言葉少ない母なので、時折見せる笑顔を見ると嬉しくなります。
- ・若い時はよくカメラ、写真を撮ってくれた。
- ・デイサービスを嫌がらずに行ってくれてありがたい。自分の時間が持てて習い事も出来るようになった。その分帰ってきたら優しくなる。
- ・白髪染めをしてあげると「ありがとう」といつもすごく喜んでくれる。
- ・前向きになれることは「1人ではない」と思う事です。

これらの貴重な言葉を1人でも多くの方に伝えて共有したいと考え、よう
ざん通信に掲載し、廊下にもコーナーを作り展示しました。また、ポジティブ
関連の書籍を数冊揃え、現利用者の家族にポジティブ思考例のお知らせを出す
とともにそれらの本の貸し出しも始めました。

地域への取り組み 『利用者作品展の開催』

日頃、認知症の方を含め手先が器用な方と一緒に作って溜まった作品を集
めて、5月に開催したオレンジカフェで「利用者作品展」と称して展示会を開
きました。そこでは訪れた地域住民の方に「ありがとうレター」という感謝の
手紙を書いて下さった方に一部の作品を譲与する形を整えました。すると「手
先が器用ですね。次回の作品も楽しみです！」「とてもかわいいです！子供に
あげたいと思います。」などのたくさんの手紙が集まりました。民生委員さん
の快い協力もあって、利用者代表としてB様に手紙をまとめて授与して頂く事
が出来ました。後日、作品を作って下さった利用者の皆様個々に私達職員の感
謝の手紙も添えてお渡しました。

《家族・地域へのケア 考察》

○ポジティブ思考推進のねらい

- ①聞き取りアンケートにより家族の隠れた想いを引き出す
- ②家族が利用者の良い点を振り返りポジティブ思考でストレス軽減

- ③職員の家族への対応力強化
- ④ようざん通信や事業所内掲示物の有効活用

結果 ご家族様から「前向きになれるわけがない」というネガティブな返答も覚悟していた中、心打たれる被介護者への想いや在宅介護への意識の高さなどがたくさん出てきて驚きました。それとともに今まで家族の心の声を把握出来ておらず活かしきれていなかったことを痛感しました。私達よりも長い時間利用者に寄り添い、誰よりも利用者ことを理解しているご家族。その貴重な声を同じ在宅介護で悩む方たちへ届けることも私達がすべきケアだと改めて感じ取ることが出来ました。

○利用者作品展のねらい

- ①認知症利用者の「役割支援」「生きがい作り」
- ②地域に再び訪れたくなる企画を作り「認知症」への理解・関心を深める
- ③職員の地域への対応力を強化する

結果 一緒に作った利用者の方は、出来上がった作品を見るとやりがいや達成感を感じていました。また真剣に作ることで集中力の効果にも繋りました。外部に出掛ける際、作品を幾つか持っていくと「誰が作ったの？私も欲しい！」と関心を持たれる方も多く、そのことを利用者の方に伝えると「嬉しいね～。いつでも作ってあげるよ！」と張り合いが生まれ、良い相乗効果を生み出しながら地域に広がっています。他にも感謝の手紙を受け取ると「こんな私なんかが役に立ったの？」と感激して涙を流す方もいらっしゃいました。自宅に帰ると嬉しそうに感謝の手紙を家族に見せて「役に立っているね～」と褒められたそうです。認知症利用者だけでなく家族の心にも残るケアの実践に結び付きました。

《課題》利用者へのケアが最優先とされる中、家族・地域に対して利用者と同等のケアは難しいのが現状です。限られた時間・人員で利用者へのケアの質を落とさずに家族・地域へのケアに取り組むプログラムをどう作るか？が課題です。

【まとめ】

「どうしたら認知症の利用者の方の心に残るような思い出を作れるのだろうか？」「どうしたら家族がポジティブな気持ちになれるのだろうか？」
「どうしたら地域に認知症への関心を深められるのだろうか？」と様々な観点から心に響くケアを考えました。その結果が想い出アルバムをキラキラした目で眺めるB様や、新たな交流を図って高らかに笑っているA様の笑顔に繋がっているのだと思います。

今回の取り組みで「第一に相手の想いに向き合う」という基本を振り返る

ことが出来ました。日々のケアを行う際に「このケアはどんな想いに繋げる 事が出来るのだろうか？」と考えるようになりました。また、職員一丸となって取り組むことで連携も図れて大いにチームワークを発揮出来ました。チームプレイの重要性を肌で感じ、「私もこのチームで一緒に頑張りたい！」と心から思いました。

やはり真剣に取り組む姿勢が人の心を動かすのではないか？と思います。時々日々のケアの中で事業所の都合を優先に考えてしまいそうになりハッとなります。これからも相手の想いを第一に考えて「心のケア」を優先して職員一丸となって「介護に一生懸命」頑張っていきたいと思います。

私に仕事をください

ショートステイようざん

発表者:福元俊仁

【はじめに】

A様は、ショートステイようざんを利用している利用者様ですが、A様の中では、パートとして働きに来ていることになっています。子育て中も子育て後も毎日仕事をしていたA様はとても働き者です。利用中は毎日「仕事をください。暇にしているのが嫌なの。」とおっしゃるので、食器洗いや洗濯物干しなど職員の業務を手伝ってもらいました。業務の仕事がなくなると、「やらなきゃいけないことがあるから、仕事がないなら帰りたいんだけど・・」と訴えます。ある日なんの変哲もない会話のなかで、職員が「Aさんは良く働くので、パートから正社員になってもらつた方が助かります。」と言うと「いやー、私80ばあさんだから。」と拒みつつ、嬉しそうに笑顔を見せてくださいます。「正社員になればお給料も上がりますよ。」と言うと、とっても嬉しそうな笑顔を見せてくださいます。そこで私たちは、お金を得る喜びはいくつになんでも嬉しいものだと仮定し、収入の発生しない『お手伝い』ではなく、実際に収入の発生する『仕事』をして頂くことができないかと考えました。

ショートに入所されるということは制限された社会に生きることになります。しかし収入を得るためにには自由な社会と関わりを持ち、その中の他者と関わっていく必要があります。ショートに入所されても自由な社会とつながりを持ちながら、その中で生きがいを見出し、自分らしく生きていけるという事例を発表させていただきます。

【事例発表対象者】

氏名:A様

年齢:79歳 女性

要介護度 3

既往歴:アルツハイマー型認知症

腎臓病

左大腿骨頸部骨折

生活歴:A市の梅農家の娘として育つ。高校卒業後は洋裁学校へ入学。

結婚しB町へ嫁ぐ。結婚後も電気関係の企業等にパート勤務され家計を支えていた。その後も農家をしながら内職で洋服のお直しの仕事をされる。

13年前に夫が他界。4年前に息子さんが他界。その1年後くらいから、会話のなかに事実と違う内容などが目立つようになる。熱中症により受診したことをきっかけに脳の検査を受け、脳の萎縮が認められる。

利用に至った経緯:平成30年12月、自宅の石段から転落し、救急車で病院へ搬送され、左大腿部頸部骨折と診断される。人工骨頭挿入術を施行後、リハビリを行い歩行可能になる。入

院中は、手術後であることの理解が十分できないことから一人で動こうとされることが多々あり、拘束を余儀なくされる状況もあった。また退院願望も強く、病院の看護師やご家族に対し「もう元気なんだから帰らせて」と訴えがあった。ご家族と主治医と話し合いの結果、短期入所生活介護への入所となる。

【取り組みとねらい】

1 制作過程

まず初めに、収入を得る方法を考えました。普段の会話で、「お直しの仕事をしてるので、デパートから沢山くるから、休んでる暇なんかないのよ。」とA様はよくお話しして下さいます。裁縫やパッチワークなど細かいことが得意なA様。それを活かして、パッチワークの香り袋を作り、それを販売することで対価をもらい、生活への意欲をもっと高めてほしいと考えました。

A様のご家族に取り組みのことをお話しすると快く承諾して下さり、必要なものを一緒に買いに行きました。A様の好みの布を選んだり、何が必要なのか一緒に考えて探したりしている時の表情は、ショートステイの業務を手伝って下さっているとき以上にいきいきとされていました。もしこれが形になり、買って下さる方がいて、対価を得ることができたらA様の生きがいになるのではないかという期待が職員の中で膨らみました。

そして、A様の毎日の日課の中に、「内職の時間」が加わりました。職員と「頑張りましょう」と励まし合いながら仕事をされます。A様は、生活動作のADLはほとんど自立されていますが、認知症を患っています。そのため、手順がわからなくなったり、何を作っているのか途中で忘れてしまったりするので、職員が近くで見守るサポートが必要です。しかし針を持って細かく丁寧に縫い合わせていく手つきは素晴らしく、認知症を患っているとは思えない手際の良さです。そして何より、真剣な表情と自信にあふれた笑顔がとても私たちの心を打ちました。いつも「帰らなきや、嫁さんに電話してくれる？」と不安そうにしているA様とは別の方のようです。

出来上がった香り袋を、購入していただけるようにきれいにラッピングしました。A様は、ラッピングされた香り袋をみても、ご自分で作ったこと自体を忘れてしまっているようでした。「これ私が作ったの？ そうだっけ？」というお言葉に、すこし寂しさを感じます。しかし、認知症によりたとえ自分が頑張ったこと自体を忘れてしまったとしても、制作しているときのいきいきとした自信に満ちた表情に代わりはありません。「これ、一緒に作ったんですよ。これから地域の方に紹介して、欲しい方がいたら購入してもらえるようにしましょうね。」とお話しすると、A様らしく控えめな照れ笑いをされます。

2..地域の方たちへの紹介

A様が作った香り袋をみなさんにお紹介できる場として、オレンジカフェやいきいきサロン、地域のバザーなどを活用しました。また、ショートステイようさんの玄関にもブースを作り、ご利用者様のご家族様や、ケアマネジャーさん、業者さんなどにも幅広く紹介をさせていただきました。利用者の得意なことを活かした活動内容に共感してくださる方が買って下さり、A様は、実際に内職し

た対価を手にすることができます。

【結果】

売上金をお渡しすると、A様らしく控えめに、でもとてもうれしそうに笑顔を見せて下さいました。A様は、香り袋を作っていることは忘れてしまいます。お金は、毎月のお給料だと受け止めていらっしゃるようでした。「Aさんの作って下さった香り袋を買っててくれたひとがいっぱいいるんですよ。」とお伝えしても、「仕事でやっているんだから、お金なんかいいの。」と言われます。私は、頑張った対価としてお金がもらえることが喜びや生きがいになるのではないかと思っていましたが、A様にとっては、仕事をすること自体に喜びを感じいらっしゃるようでした。

A様はその後も、日課として内職をされています。もちろん、ショートステイの業務も頑張って下さっていて、私達はA様を同じ職員の仲間として関わらせていただいております。以前パートさんでしたのが正社員になったことをA様も喜んでいらっしゃいます。強い帰宅欲求は穏やかになり、最近はとても笑顔が増えました。

【考察・まとめ】

利用者様が手持無沙汰になると帰宅願望や不穏になられる場合があると思います。やることがないということは誰からも必要とされていないと感じて、自信がなくなり、不安や不穏、必要としてくれる人がいる家に帰りたくなり、帰宅願望になってしまうのではないかでしょうか。仕事があるということは、他者から認められているということです。認められない世界にいたら誰しも不安に駆られるのではないかでしょうか。

認知症だからと諦めて何もできない。何もさせない。ではなく、認知症になってもこんなことが出来る。世の中の役に立てるということを知って頂けたら嬉しいです。と同時に認知症を患ったからこそ、人から頼りにされればその人は安心し、自信を持って日常生活を送って行けるのではないかでしょうか。私は認知症介護に携わるものとして利用者様に「あなたは必要な存在で、みんなから頼りにされているんだよ。」ということを伝えていきたいと感じました。

「き一ちゃん」と共に生きる

特別養護老人ホームアンダンテ

発表者:木戸 恒太

:中嶋 春樹

【はじめに】

大正一桁の生まれで、アンダンテ最高齢のA様は、丸まった背中に幼くして亡くなった長女の「き一ちゃん」を背負い、「き一ちゃん」に食事を食べさせようとして自分では摂らず、背中に腕を回して「ほら、お食べ」と口にいれてあげようとする。

このA様にしか見えない「き一ちゃん」を、職員全員が存在を認め、子供の世話をしたいという母親の温かな思いに寄り添った事例を発表します。

【事例対象者紹介】

氏名:A様

年齢:99 歳

性別:女性

要介護度:4

既往歴:認知症、難聴、下肢麻痺用症候群、誤嚥性肺炎

障害者高齢者日常生活自立度 C1

認知症高齢者日常高齢者日常生活自立度 IV

【生活歴】

高崎市内生まれ、八幡町の農家のご主人のもとに嫁ぎ、長男、長女に恵まれる。

野菜作りやお蚕を育て生活を支えてきた。

お嫁さんに伺った話では、「喧嘩は一度もしたことがなく、出かけたいときも行つといでと、送り出してくれた優しい人」と話して下さる。

【本人の様子】

「き一ちゃん」に対する思いが強く、心配のあまり食事や水分を全く摂らないことがあり、明らかに食事量や水分量が減ってきている。

また子供のことが気がかりで職員や他入居者に「子どもと家に帰らなくてはいけない、今日は家に帰られますか?」などと話しかけられる。他の利用者は丁寧に「今日は一緒に泊まりですよ」と答えられ、それを聞いたA様は「そうですか」と納得されるもすぐに「今日は家に帰れますか」と同じことを聞かれる。耳が遠いため声が大きく、そのやり取りを何度もしているとほかの入居者も影響を受け不穏になってしまうことがある。

平成 28 年 12 月

「八幡行きの電車は何時かね？」と職員も何度も尋ねられる。聞こえる側の右の耳から大きな声で話しかけるが、納得してもらえないことが多くなる。

息子さんや娘さんの名前を出し、根気良く声掛けを行うことで安心される。

家族の方が面会に来られたあとは、他の利用者に家族のことを話されていて楽しそうだった。

平成 29 年 11 月

夕方になると帰宅願望が多い傾向であったが、お昼ごろから「子どもはどこに預けていますか？」「今日泊まることを家の人に言ってこなかった。このままだと家の人に怒られてしまうので帰らせてください」などの言葉が増え、自分がどこにいるのか知りたがることが増えた。その都度職員が「お子さんは私たちが預かってお世話していますよ」「お家の人にには私たちが連絡して了承を得ていますよ」と声をかけると納得され、「よかったです」と笑顔をのぞかせる。

平成 30 年 3 月

声掛けでの安心感や、ショートステイからの仲の良い入居者が同じユニットに入居し、会話もされているが、子供への思いは変わらず。

平成 30 年 6 月

自分で家に帰ろうと、ユニットの廊下を自操する姿が多くみられるようになったが、職員と一緒にユニットの廊下を回ったり、洗濯物をたたんでいただいたり、職員が昔の話を聞き出し会話することで落ち着く様子が見られる。

【取り組み 1】

子供に対し、当初職員は「もう帰りましたよ」「遊びに行ってますよ」と声を掛けていたが、そのことが「子供がいない」と余計に不安にさせてしまう。

「迎えに行かなくちゃ」「誰かお金を貸して下さい」と落ち着かなくなり、もちろん食事も摂っていただけない。

カンファレンスで話し合い、「きーちゃん」の存在を認め、全員で共有することにする。

【結果】

職員が存在を認め、「気持ち良さそうに寝ていますよ」など声かけをすると。「まだ寝てるんかい」と優しい表情を見せ、いないことの不安はなくなった。

【取り組み 2】

背負っている子供に食べさせようと食事を摂ろうとせず、食事量が減っていることについて、幼くして亡くした長女への想い、母親としての想いをどう尊重し対応していくのか検討する。

スプーンで食事をすくい、背中に向けて見えない「き一ちゃん」に食べさせようとするため、後ろで受け取り、皿に戻してみるはどうか。

「き一ちゃんはもうお腹いっぱいになって眠っていますよ」と声をかけてみることにする。

自操についても、変わらず一緒に回る、または見守りを行う。

【結果】

職員が子供は寝ていると声掛けや眠っている声かけや、ジェスチャーを行うと「寝ているのなら起こすのもかわいそう」と再び食事を始める。また、「き一ちゃん」が寝ていると聞いて食事をやめてしまうときがあるので、「き一ちゃんにはAさんのご飯とは別にご飯を用意してありますよ」と声かけをすると安心して食事を始めるようになった。

自操についても A 様が納得するまで付き添い、上肢の機能低下の防止になっている。

今まで右利きだった A 様が、左にスプーンを持ち、右側から「き一ちゃん」に食事を食べさせることを続け、右手でも左手でも食事が摂れるようになったのは驚きだった。

【考察とまとめ】

何十年経っても心から消えることのない、幼くして亡くしてしまった「き一ちゃん」への想いはどれ程切ないものだったのか、自分達には想像もできない。

年齢と共に認知機能が低下し、「き一ちゃん」がいることがA様の生活には当たり前のことになり、食事中が特に顕著に現れることから、お腹を空かせたら可哀想という母親として当然の想いである。

A様が「き一ちゃん」と一緒に安心した生活ができるよう、職員はA様の気持ちを尊重した声掛けを行うことが大切であると思う。食事を子供に上げようとする行為もA様が食事を摂るモチベーションになっていると考えられるので、否定はせずに本人が納得、または本人の子供に対する思いに寄り添った対応を第一にしていくことが大事である。本人の意思の否定を行わないことが不安の軽減につながり日々穏やかに過ごしていただけると考えられる。

最近は「背中に負ぶっているから寝られないんだよ」とベッド上で丸い背中をより丸くして座っている姿を見るようになった。

「き一ちゃん」もお母さんの温かな背中が心地良いのだろう。

今回の事例を通して、一人ひとりの生活歴を知り、人物像を観察することで様々な気付きや新しい発見や驚きがあり、その全てを受け入れることで職員も教えられ、成長できるのだとつくづく思った。

その人らしく納得した生活を支えることができるのは、介護職ならではのやりがいではないかと思う。

「き一ちゃん」は今でも A 様と共に生きている。

ようざん認知症介護事例発表会

入所施設



2019/7/10

目次

「安心と満足」

グループホーム ようざん p.1

B P S D、夜間せん妄が強い利用者様を多角的にケアして

ショートステイ ようざん並榎 p.4

定期巡回・随時対応型訪問介護看護と在宅で緩和ケア 「最後まで自分らしく暮らしたい」

ナーシングホーム ようざん p.8

「見守りすることの大切さ～A様の為に私達に出来る支援～」

グループホーム ようざん 倉賀野 p.11

自分らしさを取り戻すために ◇コミュニケーション◇

特別養護老人ホーム アダージオ p.14

私に仕事をください

ショートステイ ようざん p.20

「今も私は現役公務員」慣れない生活と不安な日々～話を傾聴し思いを受容した日々～

特別養護老人ホーム モデラート p.23

お互いの想い～散歩でつなぐ家族の絆～

グループホーム ようざん 栗崎 p.29

「きーちゃん」と共に生きる

特別養護老人ホーム アンダンテ p.33

「オレの気持ちをわかってもらいたい」その人らしい生活を目指して

グループホーム ようざん 飯塚 p.36

Life rich～生活の豊かさ～

グランツ ようざん p.40

「安心と満足」

グループホームようざん

発表者：中島 歩海

＜はじめに＞

皆様はグループホームという所はご存知だと思いますが、共用型デイサービスというものをご存知でしょうか？今回は当施設が行っている共用型デイサービスを通じて認知症状が軽減された事例をご紹介させて頂きます。

＜共用デイサービスとは＞

グループホームの共有部分を使用して行われるデイサービスの事です。単独で行うサービスではないので1日の利用定員は3名と少ないです。

日中はグループホームのご利用者様と一緒に過ごして頂きます。訪問等のサービスを併用しているため支給限度額を超えてしてしまう方にお勧めです。（ようざんホームページより）当施設、グループホームようざんでは平成22年5月1日より共用型デイサービス導入いたしました。

＜ご利用様紹介＞

氏名・O様　　女性

年齢・86歳

介護度・要介護1

既往歴・アルツハイマー型認知症

＜生活歴・性格＞

榛名町室田で生まれ地元の女学校を卒業後洋裁学校に3年間通っていました。お嬢様として育ち、高崎に嫁いでいました。大橋町で夫と電気店を開業し、子育てをしながら編み物や習字、生け花のお稽古に通っていました。H28年夫を亡くし、頼りにしていた長男も亡くして以降独居生活をしていらっしゃいました。

性格はお話し好きで社交的な性格だが、手持ち無沙汰なことが嫌いな方です。

＜共用デイサービス利用までの経緯＞

ご家族様がO様の認知機能の低下を心配し介護申請を実施。次男夫婦が交代で介護にあたりつつ、平成30年4月より小規模多機能型居宅介護のご利用を開始、週3回の通所サービスを利用し始めました。しかし、一人で行っていたことが困難になりつつあることから利用の回数を増やしたいといったご家族様の希望もあり平成31年1月より毎日利用出来るグループホームの共用デイサービスへの利用変更となりました。

＜小規模多機能型居宅介護の通所サービスと共用デイサービスの違い＞

	小規模多機能型居宅介護	共用デイサービス
利用可能時間	7：30～19：30	7：30～19：30
一ヶ月利用可能日数	要介護1 10日 要介護2 12日 要介護3 16日	要介護4 19日 要介護5 22日
一日の利用者数	18人まで (ほかに宿泊9名)	3人まで (ほかに入居者9名)

＜問題点と取り組み＞

1. 家の中に籠って外出をしない
 - 毎日共用デイサービスをご利用して頂く
2. 帰宅願望
 - O様の趣味を他ご利用者様と一緒に行き楽しく過ごして頂く
3. 持ち物を探して徘徊
 - O様専用の棚をすぐ目に付く所に設置する

＜結果＞

1. 小規模多機能型居宅介護をご利用していた時は月・水・金の3日間で残りの日はご自宅へ訪問し安否確認と薬の確認。週の半分は室内にいたが共用デイサービスにご利用が変わることによって毎日外に出るようになりました。今まで、外へ行かない時はコタツに籠りずっとテレビを観ていましたが毎日利用することで体操やレクリエーション等で体を動かすようになりました。
2. O様の趣味である、塗り絵・編み物・習字といったことを行いました。編み物をやっているとよく昔のことを思い出すらしく、洋裁学校に通っていた時のことを楽しくお話してくださいました。他利用者の方で裁縫を趣味にしている人がおり、毎日裁縫のことをお話されています。趣味が合う方がいる影響もあり、帰りたいとの訴えが減り逆に「泊ってもいいかい？」と笑顔で冗談を言われることもあります。
3. 専用の棚を作り目に付く所に置くことによりご自分の物を探しに他利用者様のお部屋に入ることが無くなりました。

＜ご家族様の反応＞

1. ご家族様からは認知症状の進行により一人で出来ない事が増えて家に一人にするのは心配で人の目が行き届く時間を増やし心配なく生活してほしい。

➡共用デイサービスを毎日ご利用する事で、1人で家にいる時間が減ったため安心することが出来た

2. 認知症になる前まで出来ていた編み物と習字をやらなくなってしまった。毎日他の人と関わり合いが増える共用デイサービスを利用したら少しあは出来るようになるかも・・・。

➡職員やご利用者様と馴染みの関係になりご本人様からやりたいことの訴えが聞かれる。その訴えのなかで習字や編み物をやりたいと言われるのでご提供する。ご家族様からは「また出来るようになったんですね」と、とても驚かれ喜ばれておりました。

＜まとめ＞

小規模多機能型居宅介護から共用デイサービスに変わることにより、0様が昔から行っていたことを取り戻すことができ、共用デイサービスを毎日ご利用することによりご家族様の安心と0様と同じ趣味を持つ友達作りに繋がりました。ご本人からも「毎日楽しくやりたいことが出来て満足しています」と笑顔でお話を頂きました。ご利用者様が笑顔になる事で介護もしやすくなり、何よりご利用者様が自分らしく笑顔で毎日を送られる支援が介護には大切だと思います。これからもグループホームようざんではご利用者様、ご家族様が求めているサービスをご提供していきます。

B P S D、夜間せん妄が強い利用者様を多角的にケアして

ショートステイ ようざん並榎

発表者：植原光雄

1. はじめに

今回紹介する事例は短期入所サービスが必要であるものご本人の認知症のB P S D、夜間せん妄により施設利用が難しかった方が、難聴の本人に対して安心感を与えるケア、一時的な職員体制の整備、心地よい睡眠の確保、環境の調整、医療との連携を行い、安定して短期入所が利用できるようになった事例を紹介する。

2. 対象者紹介

名前：A様

性別：女性

年齢：92歳

介護度：要介護2（平成30年5月～）→要介護4（平成31年4月～）

認知症高齢者の日常生活自立度：III b

障害高齢者の日常生活自立度：B2

3. 既往歴

平成15.9：高血圧症

平成23.5：慢性心不全

平成25.7：C型肝炎

平成26年頃：認知症

発症不明：難聴

4. 生活歴とショートステイ ようざん並榎利用開始までの経緯

倉渕の相間川温泉の近くで産まれ、夫と結婚し旧榛名町に移り住み2人の子供に恵まれる。昔は夫と一緒に農業をしながら子育てや家事と忙しく働いていた。平成2年、夫が亡くなり、長男と二人暮らしとなった。

日中は、息子が仕事の為一人で過ごしているが、両下肢筋力の低下や歩行時の息切れが顕著になってきた。そのため、H26年4月より訪問介護サービスを利用しつつ在宅生活を続けてきた。

その後、認知症の進行や下肢筋力の低下も著しく、歩行状態悪く転倒する事が多くなった。介護者である息子様も在宅介護に限界を感じていたが、本人のB P S D、夜間せん妄によって他法人の施設の利用ができない状況であった。そんな状況の中ショートステイ ようざん

並榎に相談を頂き、平成31年2月より利用開始となった。将来は施設入所を希望されている。

5. 利用開始当初の介護しにくいBPSD、夜間せん妄の様子

- ・不安感が強い時や夜間せん妄時には大声が出てしまう。
- ・不安感が強い時や夜間せん妄時には物を投げたり、唾をはくことがある。這って移動しぱガをしたことがある。自宅では家具に掴まり立ち上がり、転倒を繰り返している。
- ・短期記憶障害が著しい。繰り返し同じ話をされる など。

6. 利用時の様子と課題、対応

- ・平成31年2月～3月の現状と課題、対応は下記の通りである。ショートステイようざん並榎の利用は週に1泊2日から開始した。

利用開始時の現状と課題	対応
不安感から来るBPSDを言語によるコミュニケーションで和らげたいが難聴である。	(介護) パソコンを使ったコミュニケーションや筆談、またその内容で本人に安心感を与える。手をつなぐ、身体を摩るなどの非言語的なコミュニケーションを活用し安心感を与える。 (医療) 陽性症状には薬物療法を検討する。お薬の調整は主治医と連携しながら細やかに行う。経過は下段の通り。
昼夜トイレが頻回であり、毎回対応しないと大声が出てしまう。短期記憶障害もあり、トイレを直前に行ったことを忘れてしまう。 夜間トイレは頻回で睡眠が取れない。	(介護) 昼間は職員が複数いるため対応できるが、夜間帯は夜勤者のみとなるため対応しきれない。A様対応に勤務調整し対応する。 (医療) 頻尿の相談をしたが介入は難しいとのこと。
睡眠不足が誘発因子となり夜間せん妄を起こすが、その症状は活発で対応しきれない。	(介護) 日中の活動量を増やし疲労感から睡眠を促す。肩たたきのような本人が眠くなるような心地よい刺激を与える。夜間せん妄時は勤務調整し落ち着くまで個別対応をする。 (医療)

	睡眠導入剤の活用。睡眠リズムを把握し内服する時間帯も調整した。
寒さに敏感でそれで不穏状態になるが、エアコンの風があたるとそれがきっかけで更に不穏になったり、寝付けなくなってしまう。	(介護) エアコンは本人が居室に入るまでの使用とし、本人が布団に入る際は布団を多くかけたり、湯たんぽを活用し暖かくする。 (医療) なし。

・平成31年4月以降の利用頻度と様子。

利用開始当初から短期入所サービスの必要性があるものの、不穏時、夜間せん妄時の対応が難しくサービスを増やせなかつたが、段々と落ち着きサービスを増やすことが出来た。

	利用頻度	利用時の様子
4月	1泊を週2回	4月以降も大声が出るなど不穏状態が見られることがあるが、頻度が減った。睡眠が取れる日が多くなり夜間せん妄を起こす日が減った。施設にも慣れ不安そうな様子も減り、笑顔で楽しそうに話す姿が増え段々と利用日を増やすことができた。
5月	1泊を週2回	
6月	週4泊程度	
7月	週5泊程度	

7. おわりに

今回事例に挙げたA様は入所時点では大変対応の難しい利用者様であった。一般的に激しい夜間せん妄は手薄な時間帯に起こるので薬剤沈静に関心がよりがちだが、医療と連携しつつ、介護職員として難聴の本人に対して安心感を与えるケア、一時的な職員体制の整備、心地よい睡眠の確保、環境の調整などを行った。結果として数ヶ月で「せん妄から完全に治った」とまでは行かないが、対応の難しさは残るもの、穏やかな表情も増えサービスを増やすことができた。

今回の事例で介護事業所でもせん妄は可逆的であることをある程度示せたが、起きたからどうするのではなく、日頃からせん妄を防ぐ、B P S Dを軽減するにはどうするかという発症自体に焦点を当てたケアができることが利用者本位、職員本位であり、目指して行きたいと思う。

8. 参考資料 お薬の調整の経緯

2月の利用開始当初

開始時：抑肝散エキス顆粒 夕食前 1包

開始時：釣藤散エキス顆粒 夕食前 1包

2月

2/19：ウインタミン細粒（0.4） 頓服薬 1包追加

2/25 : ウィンタミン細粒 (0.4)	朝・昼・夕 1包追加
2/25 : 抑肝散エキス顆粒	夕食前 中止
2/25 : 釣藤散エキス顆粒	夕食前 中止
2/26 : ウィンタミン細粒 (0.8)	朝・昼・夕 倍量に変更
3月	
3/11 : ベルソムラ錠 1.5mg	就寝前 1錠追加
3/25 : オランザピン 5mg	夕食後 1錠追加
ワインタミン細粒 (0.8)	朝・昼・夕 1包継続
ワインタミン細粒 (0.4)	頓服薬 内服せず
4月	
4/1 : オランザピン 5mg	朝・夕食後 1錠に変更
ワインタミン細粒 (0.8)	朝・昼・夕 1包 継続
ベルソムラ錠 1.5mg	就寝前 1錠継続
5月	
4月と同様	
6月	
ワインタミン細粒 (0.8)	昼・夕 朝は中止

定期巡回・隨時対応型訪問介護看護と在宅で緩和ケア

「最後まで自分らしく暮らしたい」

ナーシングホームようざん 関根 郁哉
川崎 弘子

<はじめに>

皆さんは、自分の「最後の刻」を考えた事はありますか？

たくさんの利用者様と関わり、日々の忙しい業務の中で、自分ならどんな最後を迎えるのが、より自分らしく自分の希望に近いのかを改めて一緒に考えてみましょう。

今回は、施設で余生を過ごされていたAさんが、体調を崩し入院後、自らの意志で在宅での看取りを希望された事例を紹介させて頂きます。

<利用者様紹介>

Aさん 86歳 女性 要介護3

<既往歴>

糖尿・リウマチ（62歳頃）右大腿骨頸部骨折 両膝人口関節手術

左大腿骨転子部骨折 右大腿転子部骨折、卵巣嚢腫、腎障害、尿路結石等

<生活歴>

Aさんはそれまで、特別養護老人ホームで過ごされていたが、5月31日市内の病院に緊急入院し、総胆管結石症胆管炎にて、内視鏡的治療にて採石施行される。その後、6月6日経過良好にて退院され、施設に戻り発熱もなく過ごすが、8日右側腹部の痛みを訴え、施設医師より点滴等の処置をされている。6月10日の午後より車椅子上で傾眠、顔色不良、低血糖症状、意識レベル低下をおこすが、点滴施行したのちに落ち着かれる。施設側からキーパーソンであるお孫様に報告と相談をし、「看取り目的の緩和ケア」にて在宅の運びとなる。本人も、施設ではなく長年住み慣れた自宅で生活をする事を強く希望され、4年振りに自宅へ戻られる。しかし、退院前には、ほぼベッド上で過ごし、夜間もオムツ使用。可能な限りトイレに行きたいと、本人の希望があるが、立位保持が困難な為、常に介助が必要になった。現在は介助にてポータブルトイレを使用されているが、体力が衰退されて立位が難しくなり、オムツとパットも併用されている。水分はあまり取らず、食事もムラがあり、食欲低下傾向。本人の好きなお煎餅やリンゴジュース、ヨーグルト、アイスコーヒー、パンを何口か食べる程度まで摂取の低下が進んでいる。右脇腹（胸下あたり）に軽度の痛みあり。時々、すごく寒がる。6月11日ベッド上で過ごしていたが、常時呼吸苦の訴えあり。左肺が機能しておらず、12日に夕方からベッドにてギャッチアップすることすら目眩や呼吸苦の訴え増加傾向。自分で動いているわけではないが、休まれると呼吸状態は落ち着かれる。

＜経過＞

A様の一番の希望でもある自分の家で最後まで過ごせる生活を叶える環境を整える事にする。呼吸が苦しくて体中が痛くどうにかして欲しいと思うほど辛い事があり、又延命治療はしてほしくはないが、出来る限り痛みや苦痛を和らげるため、訪問診療、訪問看護、定期巡回、福祉用具と各関係部署のサポート体制準備が出来る。医師、訪問看護、ケアマネ、介護、福祉用具でMCSで情報の共有する。4年ぶりに在宅復帰となりA様の念願が叶うことになり帰宅された日は、昔からの家族の様なお付き合いしてくれているご近所さんや、孫、ひ孫に住み慣れた自宅に集まって食べた大好きなマグロ丼、逆流性食道炎の影響から、あまり食べる事ができなかったが、家族と楽しむ事ができた様で満面な笑みが見られたとの事でした。住み慣れた家での自分のベットで過ごす日がスタートとなる。6月15日より定期巡回開始。15時、ベッドから落ちそくなっている所を発見する。なんと自力でポータブルトイレに降りられ、排便あり。ただ戻れなくて・・・それには皆驚かされました。6月16日、笑顔を見せてくれて良かったと、ほっとするつかの間、朝から嘔吐、吐き気、呼吸苦、痛みに悶える事もたくさんあり、その都度関係部署と連携を図り、乗り越えて過ごす。昼過ぎには嘔気も落ち着き、水分摂取が出来るまでに回復される。又、会話中にウトウトと傾眠される時間も多くなってきた。6月17日、口癖のように「もういいんだよ」「もう楽にでもらいたい」「やり残したことはない」と傾聴する日々が多くなってきた。6月18日、この頃から体動が減り始め、ベッドでの生活が多くなる。介護側も終末期に寄り添う役割が多くなってきた。6月19日、排泄の回数が減少し、水分補給のみとなる。6月20日、反応が薄くなる。何とか反応している感じであった。6月21日、声掛けに対し小さく頷きと反応見られる。15時45分、呼吸停止との連絡を受け。永眠される。

＜考察＞

今回の看取りの事例を通して、定期巡回で関わるスタッフの不安や、精神的な負担の軽減には、日常的な意思疎通や、情報の共有・伝達、急変時の対応など、ターミナルケアを実践する上で、各機関との連携も不可欠であり、もちろんターミナルケアに関わるのが初めてのスタッフもいたので、改めてチーム内で共有することが重要だと思いました。情報の共有ができることで、利用者様の小さな変化にも気づくことや、判断力がつき、専門性が高まり、職員の成長と実質成果を上げられ、困難を共に乗り越えられたと思います。利用者様が望む事を叶える為には、自ら専門的知識を高める事も大切ですが、看取りという大きな課題を通して多くを学び、職員全体の経験の蓄積と共有で、サービス向上へと繋げていきたいと思います。

しかし、まだ全ての利用者様に充実したサービスが提供されているとは思えません。今後増え多様化、重度化していくと予測されるニーズに対して、不安から来る淋しさや、言葉にできない“内なる声”に耳を傾けて心に添えるサービスを目指すことが大切であると考えます。「ご本人の望む最期の形を全うする」「ご家族様が後悔しない看取りがされること」を、

いかに介護職としてサポートできるかが、問われると思います。

＜まとめ＞

僅か、一週間ではありましたが、死を前にしてAさんが最後まで本人の意志を通し、尊厳を守れたと思います。近年、国が在宅介護を推奨している中で、今後も「在宅の看取り」を選ぶ利用者様や家族も増えていくことだろうと思います。今回の事例やこれまでの実績、経験を生かし、利用者様に対しての気配り目配りが介護技術として必要であると再認識しました。お一人お一人と寄り添い、ご家族様、他職種との信頼関係を築き、心のこもったぬくもりのあるサービスを目指し業務に励みたいと思います。

86歳の長い長い人生。本当にお疲れ様でした。

「見守りすることの大切さ～A様の為に私達に出来る支援～」

グループホームようざん倉賀野

発表者 大森 夕紀子

1. はじめに

食事介助をして食事を摂取していたA様。今年の1月にインフルエンザを発症。完治後に自ら箸やスプーンを持ち、自己摂取をするようになった。A様がご自分で食事摂取をしているお姿を見て、もしかしたらA様がご自分で出来ることを介護者の『介助が必要という勝手な思い込み』によって、A様が出来ることまで介助をしてしまっていたのではないか?と思った。今一度A様への対応を考え、A様がご自分のペースで快適に穏やかに過ごして頂く為に私たちに出来る支援は何かを考え、その取り組みの結果を報告する。

2. 事例対象者様紹介

○氏名 : A様 女性

○年齢 : 93歳

○介護度 : 要介護5 (令和元年6月25日現在)

○既往歴 : アルツハイマー型認知症、高血圧、便秘症・慢性胃炎

○生活歴 : 7人兄弟の3番目。踊りと編み物が好き。若い時に大手企業に勤め縫製の仕事をしており、手先がとても器用で内職もしていた。又若い時に乳癌を発症し、手術をしている。

3. 取り組み

○食事摂取

以前はA様が好きな食べ物のみご自分で摂取をし、それ以外の物は手を付けない為、ほぼ全介助。配膳した時にはA様の隣にいて、介助をしていた。ところがインフルエンザが完治した1か月後の朝食の配膳後、A様が自ら箸を持ち好きな物以外も食べ始めた。自己摂取をしていた為見守りをし、手が止まってしばらくすると又食べ始めを繰り返し、その日の朝食は介助をすることなくご自分で全量摂取出来た。その日の昼食はどうか?と配膳後にA様を固唾を呑んで見守りをした結果、昼食もご自分で全量摂取。その日以来、ご自分で食事を摂取するようになった。介助時は『もうご飯いらないよ!』と言うことや食べた物を吐き出すことやA様の好みの味付けにしてもなかなか食べて下さらなかった物が、見守りの対応に変えたことで格段に減少した。しかし、全量摂取出来ない日もある。A様のその日の体調や気分、満腹度もある為、その時はA様の意思を確認して尊重し、下膳の対応をしている。全量摂取するのも残すのもA様の自由であり、大切な個性。『全量摂取しなくては』や『時間内に摂取をしなくては』と考えるのではなく、A様の大切な気持ちや個性を介助者が受け止める気持ちの余裕を持つことが大切だと思う。A様の介助が必要なタイミングを見極めていくこと。『見守り』は『ただ見る』のではなく、『したくても出来ない』等困っている時に

すぐにでも支援できる対応をとれることだと思う。現在も見守りの対応を継続しており、A様ご自身で食事を摂取し、ご自分で食べたい物を、時折休憩を入れたりしながらもご自分のペースで食べることにより食事中の笑顔も増え、楽しそうに食事をされている。

○立ち上がり

A様は自席からの立ち上がりは手引き、排泄や入浴介助時は手すりに掴まることで立ち上がりをしている。自席から立ち上がりの介助をする時に、トイレや洗面所等これから行く場所を伝えた後に立ち上がって頂こうとA様の手を取った瞬間に度々、『誰が来たん！』、『お父さんとこ行くんだよ！』、『嫌だよ！』、『(笑顔で) ジャンケンしよう♪ ジャンケンぽん！』等と言い、なかなか立ち上ががらずに焦ってしまった介助者とのタイミングが合わず、無理に立ち上がりをすることがしばしばあった。しかし、A様は手すりがあれば、ご自分で立ち上がりをすることができる方。『このまま行きたい場所に行ってくれないのではないか？』、『早く立ってもらわないと』と焦ってしまった介助者がA様の本来できる立ち上がりをすることまで、介助をしてしまっているのではないか？と考えた。『誰が来たん！』と言う時は、『私が来たよ！』や『良いとこ床屋さんに一緒に行こう！』と笑顔で声掛け。『お父さんとこ行くんだよ！』や『嫌だよ！』と言う時は、A様の旦那様の話しゃA様の訴えに耳を傾ける。『ジャンケンしよう♪』と言う時は、一緒にジャンケンをA様と楽しみながら何回もする。といった対応に変更。A様の『じゃあ、行こう！』と笑顔でご自分で立ち上がろうとするまで焦らず、慌てずといった対応をすることで、A様のタイミングで立ち上がりがしやすくなり、自席から立ち上がるまでの介助の時間が以前より短くなった。

4. 考察

A様のペースやタイミングを見ながら、ご自分で出来ることはA様自身でして頂くことにより、介助をすることが減少していった。その結果A様自身で出来ることが増えていき、A様の笑顔が以前より増えていった。A様を日頃よく観察し寄り添い状況を把握することにより、その支援がA様にとって必要な支援なのか？介護者の『思い込み』や『焦り』で支援をしていないか？をより考える切欠になった。A様のペースやタイミングで、A様が『出来ることはご自分で行う』ことにより、介助をしていた時よりもご自分で行おうとする意欲が増し、そしてご自分で出来たことに達成感や自信を持ったことで介助をすることが減少し、笑顔が増えていったと思われる。その一方で、本当に困っている時にいつでも支援できる対応をとれることが大切であり、『介助に入るタイミング』を見極めていくことが重要だと思われる。

5. まとめ

『好きな物以外ご自分で食べないから』や『なかなか立ち上がっててくれないから』等で、A様がご自分で出来ることを介護者の『思い込み』や『焦り』で介助をするのではなく、よ

く見守りをして A 様自身のペースやタイミングで行っていくことの大切さを理解することが出来た。その為には、常日頃から A 様を観察し状況を把握し寄り添うことによって A 様を深く知り、A 様が安心してご自分のペースやタイミングで行うことが出来る環境を整えることの大切さも学ぶことが出来た。そして自分が A 様に今しようとしている介助は必要な支援なのか?もしかしたら A 様はご自分で出来るのではないか?とより考えるようになり、以前より A 様を深く知っていき寄り添うようになった。

『介護』の『介』は、『助ける』の他に『事が上手くまとまるように手助けをする』という意味がある。介護者がどのタイミングで介助をするかを考え見守りをし支援することにより、A 様のしたいことが思うように出来ない時や困っている時に手助けすることができるのでないかと思う。A 様に限らず入居者様お一人お一人が出来ることや何がしたいのかを深く知り、『思い込み』や『焦り』から介助をするのではなく、入居者様のペースやタイミングを合わせ、したいことが思うようにできない時や困っている時にいつでもすぐに支援できるよう『見守り』をし、入居者様全員が笑顔で快適に穏やかに過ごして頂けるよう、これからも入居者様お一人お一人の大切な気持ちや個性を受け止め、寄り添って支援をしていきたい。

自分らしさを取り戻すために

◇コミュニケーション◇

特別養護老人ホーム アダージオ

発表者：鳥屋 克彦

小林よし子

【はじめに】

特別養護老人ホーム アダージオ1階は、特養9床、ショート10床、平成30年3月に開設し、1年が過ぎました。特養とショートの環境の中、様々なご利用者様が生活しておられます。毎日を多職種連携で努めています。そして、開設して間もなく緊急入所となったA様の事例を報告します。

【対象利用者様】

A様 85歳 女性 要介護度3

既往歴：前頭側頭型認知症

白内障、慢性心不全、左踵褥瘡

骨粗鬆症、悪性症候群、肩関節周囲炎

変形性膝関節症、誤嚥性肺炎、混合性難聴

生活歴：高崎市で生まれ、学校卒業後は、洋裁学校に通った。

27歳頃結婚し、1男2女に恵まれた。

平成30年3月、低栄養で褥瘡ができてしまい、トラブルによりGHから他の特養に入所するも、担当医より薬を増やすことを聞いたが、詳細は何も知らされなかった。減薬を申し出たが、担当医の指示なので変更不可と言われ、眠りこけて声かけにも起きない母親を見て、誤嚥性肺炎が怖くなってしまい、退所を決めた。振戦（ふるえ）が見られたので、問い合わせをしたところ、当時の相談員は、「ご飯を食べた後は興奮するから震えるんです」との説明だった。手が上げられないくらい震えが見られて、驚いてしまった。毎食後、早く部屋に戻りたいので職員を「ねえねえ」と何度も呼ぶ。その声が大きいから他入所者さんが嫌がるのか？本人の声を聞き入れて対応すれば大声は減るのではないか？等、訪問の度に疑問に思うことが増えている。以前のGHでは、言葉が書かれたカードを作成し対応していた。（順番にやります。ちょっと待ってください。お部屋の確認したら呼びます。等）慣れれば筆談でも理解可能。と情報より。

「追加薬の納得がいかず退所を決めた。安心できる主治医と居場所を用意してあげたい。」と家族の希望を持ち、平成30年4月、特別養護老人ホーム アダージオに相談に来られ、シ

ヨートステイに緊急入所となる。

【入所時の服薬】

コントミン糖 12.5mg 1回 0.5錠 x 3回	主に脳内のドパミンに対して抑制作用をあらわし、幻覚、妄想、不安、緊張、興奮などの症状を改善する薬。
メリスロン 6mg 1回 1錠 x 3回	内耳の血流を増やすことにより、回転性のめまいを和らげます。
レンドルミン 0.25mg 1回 1錠 x 1回	眠りやすくし、睡眠障害などを改善する薬。
マグミット 250mg 1回 1錠 x 2回	排便を促します。
ラシックス 10mg 1回 1錠 x 1回	利尿による循環血流量の減少などにより血圧を下げます。
セルシン 2mg 朝1錠、昼2錠、夕2錠	不安や緊張などをしのめたり、筋痙攣の症状を改善するベンゾジアゼピン系の薬です。 通常、不安・緊張・抑うつななどの治療、筋痙攣、麻酔の前などに用いられます。

【入所時の情報】

- ・起き上がり、座位：支えれば可能
- ・寝返り：できない
- ・立位：できない
- ・移乗、移動：車椅子で全介助
- ・排泄：全介助（日中リハパン、夜間オムツ）
尿便意はGHの頃、時々出てしまったと訴えあり。
- ・入浴：全介助
- ・食事：一部介助（主食：粥、副食：きざみ）
- ・視力：普通
- ・聴力：聞こえない
- ・特記事項：毎食後の薬で傾眠強く、次の食事まで殆ど寝ている。
口に食べ物を詰め込み過ぎるので、見守り必要。
下肢筋力低下し、歩行困難。
寝具は、マットレスで寝ており、いざって動く。

前途の如く平成30年4月にA様入所。

【入所時】

H30年4月22日にリクライニング車椅子に乗ったA様がアダージオに来られました。首にはカラフルなバスタオルをかけ、ルームシューズを履いていました。「ねえ！ねえ！ねえ！」と同じ言葉を繰り返し発声していました。そして、筆談用ホワイトボードがありました。職員は笑顔で迎えると同時に頭上には「！？」が浮かんでいました。

【前頭側頭型認知症】

前頭葉は、人間らしさを司るといわれている部位。

この部分が障害されることにより、人格、行動の変化が起こるのがピック病。

前頭側頭型認知症には、前頭葉変性型、ピック型、運動ニューロン疾患型の3つがある。

しかし臨床的には、全体の95%以上をピック病が占めるため、ほぼピック病と考えてよい。と言われています。

ピック病では、前頭葉によるコントロールができなくなり、人格変化が顕著に現れる。身だしなみに気をつかわなくなる。性的に奔放になる、嘘をつく、万引きをするなど、性格がガラッと変わってしまう。他人に対しては、横柄で無頓着になる。質問に対してもまじめに考えず、すぐに「わからない」と答える。診察中でも鼻歌を歌ったり、妙にふざけたりする。診察室から勝手に出て行ってしまうこともある。また、同じことを繰り返す常同行動や、甘いものを大量に食べるといった食行動の変化も、よくみられる。無意識に目を大きく見開くことも特徴的である。

【入所後の様子】

日中は、リクライニング車椅子を使用して、主にホールで過ごしています。

「ねえ！ねえ！ねえ！」と同じ言葉を繰り返していることが多く見られ、声かけ、筆談に対しては「いいんだよ！」と、コミュニケーションが難しい様子でした。食事はかき込んで食べてしまう為、御椀に少量づつよそい提供しました。排泄はリハパンとパッド使用し、立位が保てない為、2名介助で行い、トイレ訴えが見られないので、定時誘導となりました。特定の物への執着が見られ、首にかけたバスタオルを外すことはありませんでした。

夜間は、いざって行動するという情報から、ベッドは使用せず、床にマットレスを敷き臥床していますが、いざることもなくよく眠っている様子。排泄は、オムツ着用し、定時交換です。臥床時にバスタオルを外すと「それちょうどい！それちょうどい！」と繰り返し発声しておられるので外すことはできませんでした。ルームシューズも同様の為、履いたまま臥床です。

【課題】

- ・物への執着緩和。
- ・安心穏やかな生活。
- ・コミュニケーション

【取り組み】

H30. 4. 24 新たな主治医へ受診を行いました。

H30. 5. 3 から、薬の見直しが施され、[セルシン 2mg]朝1錠、昼2錠、夕2錠が、朝1錠夕1錠へ変更となりました。

何時もバスタオルを首にかけた生活をなんとか変えてあげたい！と、職員一人ひとりが考えました。そんな中で、認知症勉強会に出席してきた職員が、あるものを作成しました。それは、運動会のリレーで使うバトンのような棒状のもので、綺麗な布で覆われていました。(以下、バトンと記す。) その職員に話を聞くと、勉強会で聞いてきた内容がヒントになったようでした。そして、A様にバスタオルと交換する形でバトンを渡すと、バトンを気に入ってくれた様子で、バスタオルからバトンへと執着が移動したようです。臥床時もバスタオルは着用せず、バトンを大事に持っていました。

同じ頃、入浴時に、踵の辺りで、ルームシューズのゴムが当たる部分に皮剥けが見られることにより、ルームシューズの使用を中止しました。しかし、激しい訴えはなく、「靴がないんだよ」と、たまに言う程度でした。バトンを所持している効果があるのかもしれません。それは、夜間も同様で靴の訴えはそれほどありませんでした。

日々、職員一人ひとりがコミュニケーションに励んでいます。筆談であったり、絵を描いてみたり、大声で話しかけてみたり、様々な方法で接しているなかで、声による言葉掛けに答えてくれる時が見られました。情報によると耳は聞こえません。しかし、会話がしっかりと成立している時が、多々見受けられる機会が増えてきました。コミュニケーションが増えてきたせいか、同じ言葉を繰り返し発声も減ってきたように見受けられました。

薬を減らして1週間が過ぎた辺りから、夜間帯に活気が出てくるようになりました。布団からいざって出てくることもあります、セルシンが1錠追加され、朝昼夕各1錠となりました。

H30. 7 A様もアダージオに慣れてきた様子、ご自身の部屋の場所も覚えているようで、ホールで過ごす際、ホールからご自身の居室が見える場所に席を置くと、「ねえ！ねえ！部屋へ行くんだよ！ねえ！ねえ！」と、繰り返し発声が始まってしまいますので、ホールで過ごす席は、居室が視界に入らない場所にしました。そうすることで、部屋に対しての繰り返し発声はなくなりました。バトンへの執着については、臥床時に車椅子の上等に置いておき「明日起きてからにしませんか」等の声掛けを行うことで徐々に執着を減らしていくことができました。夜間帯は、入眠するまでは独語があるが、いざって動くこともなくなり、落

ち着いて臥床されるようになってきました。それに伴いマットレスから、超低床型ベッドに変更となりました。ずり落ち予防の為、ベッド横にマットレスを敷きました。夕食後、消化を促すためにホールで過ごす時間を設けていますが、「ねえ！ねえ！部屋へ連れてって！」と繰り返し発声が始まってしまいます。食べたばかりで繰り返し発声し、興奮してしまい、嘔吐、吸引、となつたことも何度かありました。ベッドになったことで、臥床後も、ギャップアップを行い、嘔吐予防につながりました。

H30.9 [セルシン 2mg 朝昼夕各 1錠] 中止。同セルシンは頓服となる。

同時に、[ラシックス 10mg] が 5mg に変更。

[ランソプラゾール OD錠 30mg] (胃内において胃酸分泌を抑え、胃潰瘍などを治療し逆流性食道炎に伴う痛みや胸やけなどを和らげる薬。) が、夕食後 1錠追加。

[カルボシスティン錠 500mg] (痰の切れをよくする薬。)

[クラリスロマイシン錠 200mg] (細菌による感染症の治療に用いる薬。)

[クエン酸第一鉄Na錠 50mg] (鉄欠乏性貧血の治療に用います。)

ホールでは毎日、A様の声が響いています。しかし、最初の頃のような、「ねえ！ねえ！ねえ！」と続けているのではなく。職員とコミュニケーションであつたり、何かを読んでいる声であつたりと、日々、変化が見られます。時折、耳が聞こえている時が、あるのかもしれない、思わざるを得ないこともあります。そして、以前発声での言葉掛けに対して答えてくれることがありましたが、A様は相手の口をよく見て話をしていることから、読話が出来ていることが分かりました。実際にクチばくで「おはようございます」等の言葉掛けに対してしっかりと答えてくれます。

「読話」相手の口の動きや表情から音声言語を読み取り理解すること。

【記憶】

減薬や、日々のコミュニケーションから、入所時とは随分変化してきましたA様ですが、職員達を驚かせることができます。それは、記憶です。認知症というと、記憶をはじめとする認知機能を司る、脳を構成する神経細胞が変形し、その機能が低下した状態です。

A様は、以下のことを新たに記憶していました。

- ・職員の顔と名前
- ・他利用者様の顔と座る位置

「〇〇さんかい」と職員に話しかけます。

他利用者様をホールへ誘導していると、「そこだよ！」と指差しで席を教える。等

昔の記憶も部分的に思い出すようで、ご自身の耳が聞こえなくなってしまうお話しや、家族

旅行のお話し、仕事をしていたころのお話し、等職員に話し聞かせてくれます。

【まとめ】

[現在の服薬]

コントミン糖衣錠 12.5mg 1回 0.5錠 x 3回	変更なし
メリスロン 6mg 1回 1錠 x 3回	変更なし
レンドルミン 0.25mg 1回 1錠 x 1回	変更なし
マグミット 250mg 1回 1錠 x 2回	変更なし
ラシックス 5mg 1回 1錠 x 1回	10mg から 5mg
ランソプラゾール OD錠 30mg 1回 1錠 x 1回	追加
セルシン 2mg	なし
カルボシステイン錠 500mg 1回 1錠 x 3回	追加
クラリスロマイシン錠 200mg 1回 1錠 x 1回	追加
クエン酸第一鉄Na錠 50mg 1回 1錠 x 1回	追加

現在A様は、言葉数は多いものの、入所時のような繰り返し発声は少なくなりました。

特定の物に対しての執着も大分抑えられバトンも所持していません。お気に入りの職員への執着はあるようで、よく名前を呼んでおられます。日常的な会話であれば、筆談の機会も少なく、読話で問題ありません。排泄も「便が出る、連れてって！」と、訴えてくれます。歌を歌ってくださることもあります。多職種連携、職員一人ひとりの日々のコミュニケーションでこんなにも変化が見られることに、職員皆、勉強させていただきました。今日もA様は、元気にその日の献立を読み上げています。

ご清聴ありがとうございました。

私に仕事をください

ショートステイようざん

発表者：福元俊仁

【はじめに】

A様は、ショートステイようざんを利用している利用者様ですが、A様の中では、パートとして働きに来ていることになっています。子育て中も子育て後も毎日仕事をしていたA様はとても働き者です。利用中は毎日「仕事をください。暇にしているのが嫌なの。」とおっしゃるので、食器洗いや洗濯物干しなど職員の業務を手伝ってもらいました。業務の仕事がなくなると、「やらなきゃいけないことがあるから、仕事がないなら帰りたいんだけど・・」と訴えます。ある日なんの変哲もない会話のなかで、職員が「Aさんは良く働くので、パートから正社員になってもらった方が助かります。」と言ふと「いやー、私は80歳だから。」と拒みつつ、嬉しそうに笑顔を見せてくださいます。「正社員になればお給料も上がりますよ。」と言うと、とっても嬉しそうな笑顔を見せてくださいます。そこで私たちは、お金を得る喜びはいくつになっても嬉しいものだと仮定し、収入の発生しない『お手伝い』ではなく、実際に収入の発生する『仕事』をして頂くことができないかと考えました。

ショートに入所されるということは制限された社会に生きることになります。しかし収入を得るために自由な社会と関わりを持ち、その中の他者と関わっていく必要があります。ショートに入所されても自由な社会とつながりを持ちながら、その中で生きがいを見出し、自分らしく生きていけるという事例を発表させていただきます。

【事例発表対象者】

氏名：A様

年齢：79歳 女性

要介護度 3

既往歴：アルツハイマー型認知症

腎臓病

左大腿骨頸部骨折

生活歴：安中市の梅農家の娘として育つ。高校卒業後は洋裁学校へ入学。

結婚し榛名町へ嫁ぐ。結婚後も太陽誘電、清水電機にパート勤務され家計を支えていた。その後も農家をしながら内職で洋服のお直しの仕事をされる。13年前に夫が他界。4年前に息子さんが他界。その1年後くらいから、会話のなかに事実と違う内容などが目立つようになる。熱中症により受診したことをきっかけに脳の検査を受け、脳の萎縮が認められる。

利用に至った経緯：平成30年12月、自宅の石段から転落し、救急車で病院へ搬送され、左大腿部頸部骨折と診断される。人工骨頭挿入術を施行後、リハビリを行い歩行可能になる。入院中は、手術後であることの理解が十分できないことから一人で動こうとされることが多々あり、拘束を余儀なくされる状況もあった。また退院願望も強く、病院の看護師やご家族に対し「もう元気なんだから帰らせて」と訴えがあった。ご家族と主治医と話し合いの結果、短期入所生活介護への入所となる。

【取り組みとねらい】

1 制作過程

まず初めに、収入を得る方法を考えました。普段の会話で、「お直しの仕事をしている。デパートから沢山くるから、休んでる暇なんかないのよ。」とA様はよくお話しして下さいます。裁縫やパッチワークなど細かいことが得意なA様。それを活かして、パッチワークの香り袋を作り、それを販売することで対価をもらい、生活への意欲をもっと高めてほしいと考えました。

A様の娘様に取り組みのことをお話しすると快く承諾して下さり、必要なものを一緒に買いに行きました。A様の好みの布を選んだり、何が必要なのか一緒に考えて探したりしている時の表情は、ショートステイの業務を手伝って下さっているとき以上にいきいきとされていました。もしこれが形になり、買って下さる方がいて、対価を得ることができたらA様の生きがいになるのではないかという期待が職員の中で膨らみました。

そして、A様の毎日の日課の中に、「内職の時間」が加わりました。職員と「頑張りましょう」と励まし合いながら仕事をされます。A様は、生活動作のADLはほとんど自立されていますが、認知症を患っています。そのため、手順がわからなくなったり、何を作っているのか途中で忘れてしまったりするので、職員が近くで見守るサポートが必要です。しかし針を持って細かく丁寧に縫い合わせていく手つきは素晴らしい、認知症を患っているとは思えない手際の良さです。そして何より、真剣な表情と自信にあふれた笑顔がとても私たちの心を打ちました。いつも「帰らなきや、娘に電話してくれる？」と不安そうにしているA様とは別の方のようです。

出来上がった香り袋を、購入していただけるようにきれいにラッピングしました。A様は、ラッピングされた香り袋をみても、ご自分で作ったこと自体を忘れてしまっているようでした。「これ私が作ったの？ そうだっけ？」というお言葉に、すこし寂しさを感じます。しかし、認知症によりたとえ自分が頑張ったこと自体を忘れてしまったとしても、制作しているときのいきいきとした自信に満ちた表情に代わりはありません。「これ、一緒に作ったんですよ。これから地域の方に紹介して、欲しい方がいたら購入してもらえるようにならね。」とお話しすると、A様らしく控えめな照れ笑いをされます。

2.. 地域の方たちへの紹介

A様が作った香り袋をみんなに紹介できる場として、オレンジカフェやいきいきサロン、地域のバザーなどを活用しました。また、ショートステイようざんの玄関にもブースを作り、ご利用者様のご家族様や、ケアマネジャーさん、業者さんなどにも幅広く紹介をさせていただきました。利用者様の得意なことを活かした活動内容に共感してくださる方が買って下さり、A様は、実際に内職した対価を手にすすることができました。

【結果】

売上金をお渡しすると、A様らしく控えめに、でもとてもうれしそうに笑顔を見せて下さいました。A様は、香り袋を作っていることは忘れてしまします。お金は、毎月のお給料だと受け止めいらっしゃるようでした。「Aさんの作って下さった香り袋を買ってくれたひとがいっぱいいるんですよ。」とお伝えしても、「仕事でやってるんだから、お金なんかいいいの。」と言われます。私は、頑張った対価としてお金がもらえることが喜びや生きがいになるのではないかと思っていましたが、A様にとっては、仕事をすること自体に喜びを感じいらっしゃるようでした。

A様はその後も、日課として内職をされています。もちろん、ショートステイの業務も頑張って下さっていて、私達はA様を同じ職員の仲間として関わらせていただいております。以前パートさんでしたが正社員になったことをA様も喜んでいらっしゃいます。強い帰宅欲求は穏やかになり、最近はとても笑顔が増えました。

【考察・まとめ】

利用者様が手持無沙汰になると帰宅願望や不穏になられる場合があると思います。やることがないということは誰からも必要とされていないと感じて、自信がなくなり、不安や不穏、必要してくれる人がいる家に帰りたくなり、帰宅願望になってしまふのではないかでしょうか。仕事があるということは、他者から認められているということです。認められない世界にいたら誰しも不安に駆られるのではないかでしょうか。

認知症だからと諦めて何もできない。何もさせない。ではなく、認知症になってもこんなことが出来る。世の中の役に立てるということを知って頂けたら嬉しいです。と同時に認知症を患ったからこそ、人から頼りにされればその人は安心し、自信を持って日常生活を送って行けるのではないかでしょうか。私は認知症介護に携わるものとして利用者様に「あなたは必要な存在で、みんなから頼りにされているんだよ。」ということを伝えていきたいと感じました。

「今も私は現役公務員」慣れない生活と不安な日々 ～話を傾聴し思いを受容した日々～

特別養護老人ホーム モデラート

発表者 清水 慎也 高橋 良彰

【はじめに】

自宅での生活から施設での生活を始めたA様、慣れない生活から不安な日々を送ることになりました。ご本人様がこれからどのように新しい生活を築いていくか、穏やかで生きがいのある日々を送ることが出来るか、様々な制約がある中で私達職員はA様の気持ちに寄添い、話を傾聴しました。そしてA様自信が主体的に新たな生きがいのある生活を築いていけるよう支援した事例を紹介します。

【対象者紹介】

A様 男性 82歳 要介護4 バルーンカテーテル留置 移動は車椅子使用

既往歴 急性腎孟腎炎 前立腺肥大症 脊柱管狭窄症 後縦靭帯骨化症

【認知度】

会話は普通にでき理解力あるが会話の内容につじつまが合わないこともあります。

公務員であったため行政に詳しく、市の職員になったつもりで施設の運営や方針などについて意見されるが的外れなことを話されることも多い。

【生活歴】

県立工業高校を卒業後、市役所に勤務し、都市計画事業に長く携わっていた。

60歳で定年後も総務部長や上下水道管理者を務め、平成28年3月まで勤めた。

【入所の経緯】

平成29年2月急性腎孟腎炎の疑いで入院。3月退院その後在宅復帰も検討していたが。退院後ご家族に対して怒りやすくなり、暴言を吐くな

ど攻撃的な態度が見られるようになった。特に奥様に対して強くあたってしまい。日中は夫婦でいる時間が長いため奥様にとってかなりの負担になり今後暴言が暴力に変わる危険もあるため、これ以上自宅での生活は難しいと考え入所を希望される。

【入所後の様子】

以前市役所に勤務していたため、今も自分は公務員だと信じ施設の職員に施設の運営や方針などについて、意見をする。職員を捕まえては質問攻めを繰り返すなど積極的にコミュニケーションを取っていました。職員の側もできるだけA様の話を傾聴しコミュニケーションを取ることでA様に早く施設での生活に慣れていただけるよう努力しました。

ただ入所当初は環境の変化により不安定な状態になることが多く突然落ち着きが無くなり「今日所長は居るのか」「所長に話がある」と日に何度も事務所への往復を繰り返す。他の利用者様に向かって突然説教を始めるなど。又ご家族が来られ居室で面会されている時、突然ご家族に向かって大声を出すなどし、ご家族が帰られたあともその日一日不穏状態になるなど情緒不安定になることが多かった。入所一ヶ月後には、夜間に弄便行為が見られるようになり、又A様はバルーンカテーテル留置されているのですが、自らバルーンカテーテルをいじってしまうなどするようになりました。A様はカテーテル閉塞による急性腎盂腎炎の既往歴もあるためバルーンカテーテルの管理は重要であります。私達職員は早くA様に施設での生活に慣れていただき、不安定な日々から落ち着いた生活が出来るよう対策を迫られました。

【入所後の問題点】

- ① 職員に意見や質問攻めを繰り返すこと時には30分、40分続くことも。話をされる時の表情に穏やかな様子が見られない。一方的に話をされ相手が話を聞くのが疲れ、嫌な思いになっているのも気づかず話し続ける。
- ② 認知症のある利用者様の行動を観察していて気になると説教を始め30分、40分続くこともあり、特に就寝前に説教された利用者様がその後不穏になり中々入眠されないことも。
- ③ 不安な日々のストレスの影響か排便コントロールが上手くいかず、夜間に便失禁され巡回に伺うと居室ベッドが便で汚れていることも。自分で後始末されている様子で洗面台、床が汚れていることも。
- ④ バルーンカテーテルをいじり居室の洗面台に自分で尿破棄してし

まう。自分で尿破棄する理由には職員をまだ信用していないためと思われる。

⑤ 入浴に拒否あり。入浴にお誘いしても「これから会議がある」「事務所に用がある」と言って入ろうとしない、しつこく誘うと不快な表情で怒り出すことも。そのため始めは個浴に入れず「あそこに横になっていれば気持ち良いです」とストレッチャーに横になってもらい機械浴を利用してもらう。

【取り組み】

安心して充実した生活が出来るような取り組み。

A様のケアをしながら、日々話をする中で気付いたことは市役所に勤務していた為か 1 日の中で自分の役割を求めることがあります。取り組みとしては。

- ① 役割を持っていただき、充実した毎日を遅れるような支援。
- ② 仕事をしているという気持ちを尊重すること。

具体的には、洗濯ものたたみ。入浴タオルたたみ。清拭タオル作り。他利用者様の話し合い手、相談役、などです。

一日に使うタオルはかなりの数になります。洗濯物もたくさん出ますがA様はそれがまるで自分の 1 日のノルマをこなしていく様に積極的に取り組んで下さいました。又他利用者様の話し合い手、相談役を引き受けさせていただくうちに、入所後情緒不安定で怒り易く、不穏状態になることもあったA様は。いつしかとても気さくで明るく話好きなA様に変わり他利用者様からも慕われるようになっていました。

これらの仕事は他の利用者様にもやっていただきてもらう日常的な仕事ですが、今でも市の職員として精力的に働きたいA様にとって自分の役割を持ち日々仕事に打ち込むことが生きがいとなり、施設での不安な生活から開放したのだと思います。

【心掛けたこと】

① 「A 様清拭 1 ケース作っていただけますか」「これから入浴タオルが乾燥機から上がってくるのでお願ひできますか」と仕事を依頼し、仕事が終わると「毎日ご苦労様です」「いつも丁寧にタオルを畳んでいただき有難うございます」と A 様の仕事ぶりに感謝の言葉をかけるなど A 様が仕事をしている

充実感を持ってもらえるような声かけ。

その結果 A 様自ら「清拭タオル作りましょうか」「洗濯したタオルはもう乾いたの」と自ら進んで仕事をするようになる。

② A 様が他の利用者様や職員と話をする時に説教じみたことを言つても耳を傾けて話を聞き、けっして否定しない事で A 様が自分は皆から頼りにされているのだと思って貰えるよう心掛ける。

その結果相手を思いやる様な穏やかな口調、表情に変わり気遣いも見られるようになる。

③ 職員に施設の運営や方針について長々と意見をされる事があつても話を遮らず傾聴し、質問攻めをされても丁重に答える事で、今も自分は公務員だと信じる A 様にここで自分は仕事をしているのだと実感して貰う。

その結果職員を仕事仲間だと信頼し毎日仕事のねぎらいや、気遣いをして下さるようになり。又職員を信頼出来るようになったためバルーンカテーテルの管理を職員に任せてもらえるようになり、自分でいじることが少なくなった。

④ 入浴のたびに個浴と機械浴両方用意し「入浴しましょう」「入りませんか」と無理矢理誘うのではなく、「あちらを試してみませんか」「試されたら感想を聞かせてください」と個浴を試していただくつもりで、声かけし A 様が自分から進んで入浴されるようお誘いした。

その結果「じゃあ試しに入ってみますか」と初めて個浴に入られた日に「こちらのお風呂は如何でしたか」と感想を伺うと「この風呂は市長も入られたの」「市民の利用はあるの」と早速質問攻めをされたがその日以降現在まで個浴を利用される。

【新たな課題】

自分の役割を見つけ充実した日々を送っていた A 様ですが、数ヵ月後のこと、臀部に数箇所皮むけが出来てしまいました。A 様は 1 日中車椅子を使用しているため臀部に長時間圧迫がかかり、皮むけが出来てしまつたのです。そのため看護職員より臀部への負担を減らすため日中

の仕事を減らし、臥床時間が多く取るように指示が出たのです。

看護職員から指示が出た翌日から、A様に臀部の皮むけが治るまで仕事を控え臥床してもらうよう促すのですが、自分の役割を奪われると感じたA様は納得いかない様子で、時には不機嫌になることも。私達職員もまた以前の入所当時のA様に戻ってしまうのではないかと悩みました。又臥床時間を確保することが出来なかつたことで、数ヶ月もの間臀部の状態が改善しなかつたのです。

そこでA様と話し合い臀部の状態が良くなるまで仕事と臥床時間のバランスをどのようにしていくのか一緒に考えました。そこでA様の1日のスケジュールを作りました。

【1日のスケジュール】

起床後 バイタル測定後共同生活室で過ごされる。その時に共同生活室のカーテンを開ける。

朝食まで 起床してきた他利用者様の話し合い手をする。朝食で使うお絞りを作る。

朝食後 居室に戻り 10時頃まで臥床する。10時頃居室から出てこられ共同生活室でお茶を飲みながら他利用者様の話し合い手。清拭タオル作り。

昼食まで 一度居室に戻り臥床、再び離床後昼食までおしぼり作り。

昼食後 居室に戻り 3時のおやつまで臥床。

3時のおやつを食べながら他利用者様の話し合い手。

その後入浴で使った洗濯物、タオル等を畳む。

その後仕事が終われば夕食まで居室で臥床する。

【結果】

A様の思いを受容し話し合いスケジュールを作った結果。A様も納得され積極的に取り組むようになりました。元々市役所で勤務していた経験により規則正しい生活には慣れているため、A様にとっても違和感無く出来たようです。その結果臀部の状態も改善し自分の役割と仕事との両立が達成でき、A様にとってより一層充実した日々が送れるようになりました。

【現在の様子】

入所から 2年が経ち施設での生活にも慣れ毎日の仕事を意欲的にこなす精力的な1日を過ごしているA様。

一緒に生活している利用者様は女性の方が多いのですが臆することなく接し、最近は食事の席を共にする認知症のある女性の利用者様とよく話をされていますが。女性の利用者様と和気あいあいと話しをしている姿に以前の様に相手の事を考えずに一方的に話し続けることは無くなり、むしろ認知症の利用者様の話にじっくり耳を傾けて「うん、うん」と相槌を打ちながら黙って聞いている姿は、それはまるでA様自身が認知症の利用者様の話を傾聴し寄添っているようにさえ見えます。女性の利用者様がA様に向かって楽しそうに話をしている所を見ていると、まるでA様の周辺が心に安らぎを与えてくれる憩いの場所のようにさえ見えてきます。

今でも市の職員であるという思いは変わらず「今年度の人事はどうなったの」「皆さんも移動なさるの」と相変わらず質問攻めをされる事もありますが。同時に「ご苦労様」「チーフも色々と大変だね」と我々職員にねぎらいの言葉をかけ笑顔を振りまいてくれるA様を見ると、我々職員一同これからもこの笑顔が見られる様、そして1日でも長く充実した日々が送れるよう願ってやみません。

【まとめ】

入所当初は慣れない生活から不安定な日々を送っていたA様。仕事がしたい、役割が欲しいという思いを受容し。ご本人様が取り組める環境、時間を作れば、生きがいのある、安心した環境に変わるということを認識出来ました。

又利用者様の希望することは利用者様の話をよく傾聴し思いを感じ取ることだと改めて感じることが出来ました。

これからも利用者様1人1人の取り組みたい環境を整え、より充実した生活が送れるよう取り組んでいきたいと思います。

お互いの想い～散歩でつなぐ家族の絆～

グループホームようざん栗崎

発表者：井上美香 渡邊健太郎

【はじめに】

グループホームようざん栗崎は平成30年12月1日に開設した施設です。

開設から半年『不穏』と『穏やか』の両極端でいつ気持ちが切り替わるのか解らないA様が職員の共通の注目点として挙がってきました。

その中で職員の気付きやA様の気持ちを知ろうとアセスメントする事から始まり、ゆっくりと変化していくA様の様子やご家族との繋がりについて発表します。

【利用者様紹介】

性別 女性

年齢 88歳

要介護度 4

既往歴 アルツハイマー型認知症 高血圧症 便秘症 妄想障害 下肢静脈瘤

【生活歴】

九州、久留米の造り酒屋のお嬢様として何不自由なく育つが、幼少の頃に実母を亡くされ寂しい思いをされる。その後大学教授のご主人と結婚し2人の男の子に恵まれ福岡市にて専業主婦として家を守ってきた。

平成17年自宅玄関先での転倒により入院される。その頃から認知症を発症され、せん妄症状や暴言等があり精神的に不安定な状況が続いている。

また老々介護である事から平成21年に福岡から長男の住む高崎へ引っ越し介護は長男の嫁が中心となって行いデイサービスの利用も開始する。

夜間時不穏の見守りをする夫の転倒、腰椎圧迫骨折で今後のことを考え平成22年グループホームようざんの入所となる。

平成30年長男の自宅により近い、このグループホームようざん栗崎の新設に伴い異動を希望され現在に至る。

【取り組み1】

＜A様について知る＞

私達がA様の気持ちの切り替わりのサインを理解しているのか？どの様な気持ちなのか
アセスメントシートや記録・職員との何気ない会話、気持ちが切り替わる前後の背景など職

員同士が共有した。

A様の言動や仕草の観察

- ① 穏やかに過ごしていたが、突然手足を揺すりだす。これが不安のサインで徐々に険しい表情になり怒鳴りだす。
- ② 職員や利用者様との会話で話が途切れたりズレたりする。
- ③ 私達職員の対応の遅れやご希望に添えない事が続くと表情に出る。
- ④ 直前まで怒っているが職員の介助に「ありがとう」と笑顔で答えられる。
- ⑤ 童謡などの歌が好きで曲が流れるときハミングをしたり身体を動かしたりする。
- ⑥ さっきまで笑っていたのに突然職員に悲しそうな表情で「何もしてやれなくてごめんなさい」と申し訳なさそうに言う。
- ⑦ 機嫌が良い時も悪い時も「息子は何処にいるの?」「私の家は?何処にあるんですか?」と言う。

等

職員同士との共有から

- A様は短期記憶障害や言語能力の低下も伴っており、自分の気持ちを上手く伝えることが難しく、伝わらない事から気分の落ち込みや怒りがあるのかもしれない。
- まだ新しい環境に馴染めず不安になっているのかもしれない。
- 見当識障害があり苑に居る事を理解している時としていない時がある。途切れる記憶から混乱されているのかもしれない。
- 家族の認識はあり長期記憶は保たれている。機嫌が良い時・悪い時でも会話の中から『家族の名前』や『家』というキーワードが度々聞かれ心の奥底には家族に対する思いや会いたい気持ちがある。

という事が分かった。

A様の気持ちを基に職員皆で話し合い『家族』と『家』に焦点を当て支援内容を検討した。

【取り組み2】

<A様の家までの散歩>

「息子は何処にいるの?」とよく言われ会話の内容から家族の事を思っている事が多いA様。本人の言動から家族の仲は良好と推測されその事をご家族に伝える。ご家族も「母には昔からとても良くしてもらい感謝している。入居しても自分達の出来る事はして行きたい」と話していた。

グループホームようざん栗崎から A様の自宅はご家族が散歩中に寄れるほど近くにある。そこで A様の散歩コースに自宅方向を加え、A様を中心に自宅・苑・家族・職員という輪を広げて行こうと考えました。

コース設定にはご家族の協力が必要と考え提案すると、快諾して頂き散歩コースも車通りの少ない安全な道のりを教えて下さった。

まずは A 様の体調や気分など考え苑の周辺から始めて徐々に自宅方向にコースを変更して行く。

散歩も始めのうちは外出した事そのものを忘れていたり今の自宅と A 様の記憶の中にある自宅との違いから混乱され不穏になる事があり、つまずく事もあったが焦らずゆっくりと続けて行く事により徐々に A 様も外出に喜びや楽しみを感じて下さりお散歩に行きましょうと声掛けをすると「わあ!! うれしい」と笑顔で言ってくださり、特に自宅方向への喜びが大きくなってきた。

またご家族からのお誘いもあり A 様の家に上がりさせてもらい一緒にお茶を飲む機会も出来た。A 様は最初家に着いた時、しばらく何処にいるのか分からぬ様子だったが趣味だった編み物の話や旦那様の話をしているうちに徐々に家にいる実感が湧いている様に見えた。会話でも普段、苑では話さない事も楽しそうに話され A 様がどの様に生活をしていたのか知る良い機会になった。

自宅への散歩をきっかけにご家族との関係性が少しずつ変化をしてきた。面会の回数が増え外出時の様子や昔の A 様の話を伝えてくださり写真も提供して頂けるようになりました。節句のお祝いに昼食を自宅で食べようと企画され A 様を迎えて来られ仲良く散歩をし自宅まで行かれました。A 様も昔から毎年飾ってある雛人形を見て懐かしがり喜んでいたそうです。

また A 様のお誕生日会にも参加し一緒に祝いをしたり、桜の開花に伴い花見への外出などされました。苑に帰ってきた時もすべて覚えていませんでしたが楽しかったという思いは残っているようでした。

【考察・まとめ】

今回 A 様の気持ちを知ろうとアセスメントをし、ポイントを絞り A 様とご家族の繋がりを知った上で施設での役割を考えて苑を第二の家として考えてみた。

A 様とご家族の距離感を縮める手助け役として歩み寄る行動の第一歩として形にしたのが散歩であったが A 様の見当識障害から自分の家が自分の知らない家になってしまふ事への不安や混乱、今はご家族の名前が出ているがいずれは分からなくなってしまいご家族も辛い思いをするのではないかという難しさを感じた。

取り組みを行いながら職員が交流に視点が向きがちだった所を、ご家族との会話の中から私達が知らない A 様の生活習慣や考え方などを教えてもらい新しい発見があり、再度 A 様の『気持ち』に寄り添い理解して行こうとする事で、ゆっくりと改めて橋渡しができるよう、私達グループホーム本来の役割を考える事が出来た。

これからもグループホームで生活をして行く中で少しでも A 様が望んでいる事と職員の思いにズレがない様に私達のケアが A 様とご家族に伝わり、ご家族と A 様それぞれの想いを

私達が受けとめ橋渡しをする。その流れを作っている土台が出来てきている事を感じている。

「き一ちゃん」と共に生きる

特別養護老人ホームアンダンテ

発表者：木戸 恒汰

：中嶋 春樹

【はじめに】

大正一桁の生まれで、アンダンテ最高齢のA様は、丸まった背中に幼くして亡くなった長女の「き一ちゃん」を背負い、「き一ちゃん」に食事を食べさせようとして自分では摂らず、背中に腕を回して「ほら、お食べ」と口にいれてあげようとする。

このA様にしか見えない「き一ちゃん」を、職員全員が存在を認め、子供の世話をしたいという母親の温かな思いに寄り添った事例を発表します。

【事例対象者紹介】

氏名：A様

年齢：99歳

性別：女性

要介護度：4

既往歴：認知症、難聴、下肢廐用症候群、誤嚥性肺炎

障害者高齢者日常生活自立度 C1

認知症高齢者日常高齢者日常生活自立度 IV

【生活歴】

高崎市内生まれ、八幡町の農家のご主人のもとに嫁ぎ、長男、長女に恵まれる。

野菜作りやお蚕を育て生活を支えてきた。

お嫁さんに伺った話では、「喧嘩は一度もしたことがなく、出かけたいときも行つといでと、送り出してくれた優しい人」と話して下さる。

【本人の様子】

「き一ちゃん」に対する思いが強く、心配のあまり食事や水分を全く摂らないことがあり、明らかに食事量や水分量が減ってきている。

また子供のことが気がかりで職員や他入居者に「子どもと家に帰らなくてはいけない、今日は家に帰られますか？」などと話しかけられる。他の利用者は丁寧に「今日は一緒に泊まりですよ」と答えられ、それを聞いたA様は「そうですか」と納得されるもすぐに「今日は家に帰れますか」と同じことを聞かれる。耳が遠いため声が大きく、そのやり取りを何度もしているとほかの入居者も影響を受け不穏になってしまうことがある。

平成 28 年 12 月

「八幡行きの電車は何時かね？」と職員も何度も尋ねられる。聞こえる側の右の耳から大きな声で話しかけるが、納得してもらえないことが多くなる。

息子さんや娘さんの名前を出し、根気良く声掛けを行うことで安心される。

家族の方が面会に来られたあとは、他の利用者に家族のことを話されていて楽しそうだった。

平成 29 年 11 月

夕方になると帰宅願望が多い傾向であったが、お昼ごろから「子どもはどこに預けていますか？」「今日泊まることを家の人に言ってこなかった。このままだと家の人に怒られてしまうので帰らせてください」などの言葉が増え、自分がどこにいるのか知りたがることが増えた。その都度職員が「お子さんは私たちが預かってお世話していますよ」「お家のには私たちが連絡して了承を得ていますよ」と声をかけると納得され、「よかった」と笑顔をのぞかせる。

平成 30 年 3 月

声掛けでの安心感や、ショートステイからの仲の良い入居者が同じユニットに入居し、会話もされているが、子供への思いは変わらず。

平成 30 年 6 月

自分で家に帰ろうと、ユニットの廊下を自操する姿が多くみられるようになったが、職員と一緒にユニットの廊下を回ったり、洗濯物をたたんでいただいたら、職員が昔の話しを聞き出し会話をすることで落ち着く様子が見られる。

【取り組み 1】

子供に対し、当初職員は「もう帰りましたよ」「遊びに行ってますよ」と声を掛けていたが、そのことが「子供がいない」と余計に不安にさせてしまう。

「迎えに行かなくちゃ」「誰かお金を貸して下さい」と落ち着かなくなり、もちろん食事も摂っていただけない。

カンファレンスで話し合い、「きーちゃん」の存在を認め、全員で共有することにする。

【結果】

職員が存在を認め、「気持ち良さそうに寝ていますよ」など声かけをすると。「まだ寝てるんかい」と優しい表情を見せ、いないことの不安はなくなった。

【取り組み 2】

背負っている子供に食べさせようと食事を摂ろうとせず、食事量が減っていることについて

て、幼くして亡くした長女への想い、母親としての想いをどう尊重し対応していくのか検討する。

スプーンで食事をすくい、背中に向けて見えない「き一ちゃん」に食べさせようとするため、後ろで受け取り、皿に戻してみるはどうか。

「き一ちゃんはもうお腹いっぱいになって眠っていますよ」と声をかけてみることにする。自操についても、変わらず一緒に回る、または見守りを行う。

【結果】

職員が子供は寝ていると声掛けや眠っている声かけや、ジェスチャーを行うと「寝ているのなら起こすのもかわいそう」と再び食事を始める。また、「き一ちゃん」が寝ていると聞いて食事をやめてしまうときがあるので、「き一ちゃんにはAさんのご飯とは別にご飯を用意してありますよ」と声かけをすると安心して食事を始めるようになった。

自操についてもA様が納得するまで付き添い、上肢の機能低下の防止になっている。

今まで右利きだったA様が、左にスプーンを持ち、右側から「き一ちゃん」に食事を食べさせることを続け、右手でも左手でも食事が摂れるようになったのは驚きだった。

【考察とまとめ】

何十年経っても心から消えることのない、幼くして亡くしてしまった「き一ちゃん」への想いはどれ程切ないものだったのか、自分達には想像もできない。

年齢と共に認知機能が低下し、「き一ちゃん」がいることがA様の生活には当たり前のことになり、食事中が特に顕著に現れることから、お腹を空かせたら可哀想という母親として当然の想いである。

A様が「き一ちゃん」と一緒に安心した生活ができるよう、職員はA様の気持ちを尊重した声掛けを行うことが大切であると思う。食事を子供に上げようとする行為もA様が食事を摂るモチベーションになっていると考えられるので、否定はせずに本人が納得、または本人の子供に対する想いに寄り添った対応を第一にしていくことが大事である。本人の意思の否定を行わないことが不安の軽減につながり日々穏やかに過ごしていただけたと考えられる。最近は「背中に負ぶっているから寝られないんだよ」とベッド上で丸い背中をより丸くして座っている姿を見るようになった。

「き一ちゃん」もお母さんの温かな背中が心地良いのだろう。

今回の事例を通して、一人ひとりの生活歴を知り、人物像を観察することで様々な気付きや新しい発見や驚きがあり、その全てを受け入れることで職員も教えられ、成長できるのだつくづく思った。

その人らしく納得した生活を支えることができるのは、介護職ならではのやりがいではないかと思う。

「き一ちゃん」は今でもA様と共に生きている。

「オレの気持ちをわかつてもらいたい」

その人らしい生活を目指して

グループホームようざん飯塚

発表者：中村裕美・相川亮佑・木下圭太

＜はじめに＞

認知症グループホームでは、地域における少人数の共同生活の中で職員と入居者の『なじみの関係』を重視し、一人ひとりの個性と生活リズムを尊重した個別ケアを提供している。しかし、認知症により、意思の疎通がうまく出来ない利用者様の思いを汲み取ることは難しく、日々悩み、迷いながらケアを行っている。認知症になんでも自分らしく生きるために、介護職員として私達が出来ることはなんだろうか。

今回発表する事例は、自分の意思をうまく伝えられず、生活リズムが不安定で介護に抵抗のある利用者様が自分らしく安心して穏やかに過ごす為にはどうしたらよいか、その方に合った個別ケアを職員全員で考え、行った取り組みを発表します。

＜利用者様紹介＞

氏名 A様 81歳

要介護度 3

既往歴 アルツハイマー型認知症、てんかん、十二指腸潰瘍、左目白内障、糖尿病
4人兄弟の次男。野球と将棋が好きで、テレビで野球観戦をされるのが好き。普段は穏やかだが、短気なところがあり、怒って物を投げつけたり、奥様に手を上げられることもあった。子供の頃、父親からよく暴力を受けていたとのこと。人から何かを頼まれることを好まず、頼んでも知らんぷりをしたり、怒ってしまわれることもある。負けず嫌いなところがあり、ゴルフでいとこに負けて以来、二度とやらなくなつたそうである。

＜入所までの経緯＞

68歳の時に認知症と診断され、ご自宅では奥様が介護されていたが、お皿を火にかけて温めようとされたりと目が離せず、またA様は排泄の感覚や理解が出来ず、興奮し怒り出されたり抵抗があったためお世話が大変だった。

奥様は自身の手術後でもあり、体調も思わしくなく、同居している長男夫婦は仕事の為介護は主に奥様がされておられたが、精神的なストレスで介護の限界を感じておられたころ、A様は飲酒により四肢筋力低下、食欲低下等で歩行が困難になり、H28年9月S病院に入院となる。その後精神的に安定され退院と同時にショートステイの利用を開始され、H30年5月にグループホーム入所となった。

＜施設での様子＞

入所当所はテレビをご覧になったり新聞を読まれたりと落ち着いて穏やかに過ごされていようであった。ご自分から話しかけられることはあまりないものの、職員との会話には楽しそうに応じておられた。テレビや新聞に向かって一人で話され笑っている様子もあった。トイレには自分で行こうとされるが場所が分からず、職員が案内をしていたが、特に介護に拒否や抵抗は見られなかった。夜間も20時頃休まれ、トイレにも起きて来られるなど、生活のリズムも安定しているものと思われた。

1ヶ月ほど経ったころから、自らトイレに行かれることが少なくなり、失禁が見られるようになつた。食事は好き嫌いなくご自分で召し上がるが、トイレや入浴の声かけに強い拒否が見られるようになり、カッとなる事も増えてきた。夜も、12時を過ぎても席を立たず、椅子でウトウトされるものの、布団で休まれるよう声をかけると怒り出し、箱に貼つてあるガムテープを剥がして口に入れようとされたり、止めようとすると職員の手を払われることなどもあった。日中は椅子から落ちそうになるほど深く眠りにつかれる事もあり、生活のリズムの乱れが目立ってきた。

「まだ寝ない」「オレをバカだと思っているのか」「そんなところへは行かないよ。行ってられっか」と強い口調で言われるA様。

人の生活のリズムは様々で、遅くまで起きてテレビを楽しまれる方もいるが、A様は本当にそれを望んでいるのだろうか。A様らしい生活とは、安心して穏やかに生活していただくにはどうしたらよいのだろうか。

＜課題＞

夜間ゆっくり休んでいただき、生活のリズムを整え、日中トイレ、口腔、入浴など気持ちよく行っていただくにはどうしたらよいか。

A様の気持ちを読み取り、カッとなる原因を探り、グループホームで日々の生活を自分らしく穏やかに過ごしていただくにはどうしたらよいか。

＜取り組み＞

毎日を自分らしく安心して穏やかに過ごせるように生活のリズムを整えることを目標に、以下の取り組みを行つた。

◎過去の生活暦から、ご本人が生活しやすいペースを見つけ、生活のリズムを整える。

◎イライラしてカッとなってしまう原因を探り、穏やかに日常を過ごして頂く。

まずは、ご家族より普段の生活のリズムや、過ごし方、楽しみなどに関して聞き取りを行つた。

・交代制の仕事をされていたとの事で、不規則な生活を送られており、眠れないためかお酒を毎晩飲まれ、日中は寝てしまうという生活から、リズムを崩しやすい方であったが、普段は21時頃には休まれており、日中もゴルフや将棋を楽しんでいた。

・認知症になる前から、短気なところがあり、認知症になってからさらに症状が悪化したこと。もともと、頼みごとをされるのを好まず、何かお願いをしても知らんぷりされたり、どこかへ行ってしまう事があった。

以上のことから、普段の生活に近いタイムスケジュールを作り、時間をかけて少しづつ生活のリズムを整えていくこととした。そのためには、声をかけるとカッとしてしまい、拒否を続けるA様がそれを気持ちよく受け入れていただく為に、A様の気持ちにより添う必要があった。

A様は「オレはバカだからな」「バカだと思っているんだろう」「オレは絶対に寝ないぞ」などとの発言が多かったのだが、A様の拒否やそれらの言葉には、どのような思いが隠れているのだろうか。

A様の思いを汲み取るために、様々な視点からA様の思いを検討した。

- ・認知症により、自分の思いが伝わらない苛立ち
- ・A様のためにと思う職員の気持ちがA様にとってはバカにされていると感じる
- ・自分のペースで物事が運ばないことに対する怒り
- ・いろいろなことが出来なくなっている、わからなくなっていることへの寂しさ
- ・どこで寝てよいのかわからない、寝てもよいものかどうかわからない

これらのことがA様の発言や拒否につながっているのではないだろうか。

まずは、A様との関わりの中から気づいたことを全員で意見を出しあい、情報を共有し、どのような声かけをして、そのときの反応はどうだったのか、良かった点、ご本人の様子などを細かく記載し、その情報をこまめに更新して行った。最終的にご本人が気持ちよく受け入れていただける表現や声かけの方法を職員全員で統一した。

A様は頼まれることを好まないため、声かけも本人のプライドを傷つけず不快に感じさせないような表現で、ご本人が使い慣れた言葉を使うこととした。

また、一緒に新聞を読んだり、大好きな野球の話をしたりと、職員を身近に感じていただき、信頼関係を築く為のコミュニケーションをきちんととるよう心掛けた。

＜考察・まとめ＞

職員全員がA様の表情や反応を見ながら統一した声かけを行った結果、介護への抵抗や拒否が目に見えて少なくなってきた。『準備が出来ました』『ご用意が出来ました』『お待たせいたしました』という言葉がA様には特に気持ちよく受け入れていただけた。また、複数人から声をかけられるのを好まない様子が見られ、一対一での対応を心掛けた。

常に、A様が感じている気持ちに添うように会話をを行うようにした。そうするうちに、A様に合わせて作ったタイムスケジュールもご本人のペースに合わせながら、順調に進めることができるようになってきた。

また、散歩や植物の観察など、ご本人が予想以上に興味を持って喜んでくださることもわかり、生活に更なる楽しみを見つけることが出来た。

今回、生活リズムとA様の気持ちの両方からA様の生活を支えるべく取り組みを行ったが、どのようなケアも、自分達の思い込みにはなっていないか、A様の言葉の裏にある気持ちは何か、言葉にならない声にきちんと寄り添うことで初めて、ご本人が望むケアに繋げていけるのではないかだろうか。

A様が思っている事を私達が理解したと思っていてもそれが間違っていることもあり、正解も答えもない。日頃からA様の気持ちに寄り添うことで、A様の気持ちに答えることが出来るのではないかと思う。

私達職員はA様に沢山の宿題を出して頂き、一人ひとりのケアについて一からまた学ぶことが出来た。利用者様一人ひとりの個性や価値観、生活リズムを尊重し、表面的な対応ではなく、時間をかけて対応していく事を心掛けて、これからも一生懸命介護に携わってケアをしていきたいと思う。

Life rich

～生活の豊かさ～

グランツようざん

北爪和也 福地佳奈美

はじめに…

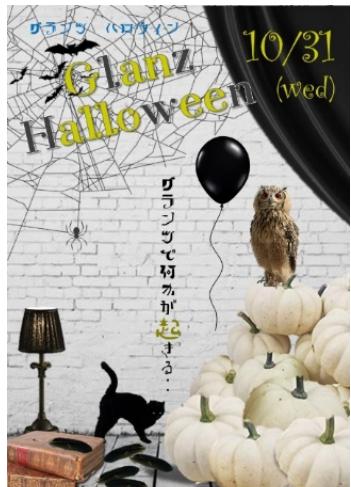
皆さんには、自分の親、親戚、おじいちゃん、おばあちゃんが施設に入居することになったとしたら、どのような施設で生活してほしいと思いますか？そして自分が施設に入居することになったら…どのようなところで生活したいと望むのでしょうか。

ようざん初の介護付き有料老人ホーム、グランツようざんがオープンして約1年。私たちは、利用者様の“自由と尊厳”を守るために日々、試行錯誤しています。生活の質を高めるために様々なイベントを開催。さらに自分たちで行うだけではなく、他業種とも協力し合うことで豊かな生活を実現しました。私たちが追い求め実現した、ライフリッチ(生活の豊かさ)の数々の結果をここに報告します。



■2018.8.7 ながしめん

夏といえば流しそうめん！そうめんだけではなく、蕎麦、うどんも流して好きなものを好きなだけ。竹のレールは職員が一から手作りしました。これぞ本物志向！



■2018.10.31 グランツハロウィーン

職員一同仮装をしてイベントを盛り上げました！利用者様と一緒に手作りしたジャックオーランタンは、様々な表情が完成しま



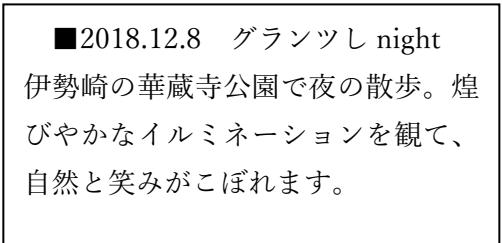
■2018.10.10 ビアテラス

グランツ自慢の広いテラスでビアガーデン！焼き鳥、枝豆などのおつまみや、カクテル、ソフトドリンク等メニューも充実！ほろ酔い気分で楽しいひと時を過ごしました。



■2018.11.13 サンマフェスティバル

秋といえばサンマの季節！炭火でじっくりと焼き上げ、炊き込みご飯とともに♪部屋中がサンマの良い香りに包まれ、秋の味覚を堪能しました。



■2018.12.8 グランツレ night

伊勢崎の華蔵寺公園で夜の散歩。煌びやかなイルミネーションを観て、自然と笑みがこぼれます。



■2018.12.18 クリスマスコンサート

バイオリンの演奏を聴きながら優雅なひととき。職員のハンドベル演奏も披露させていただき、たくさんの拍手を頂きました！



■2019.2.19 グランツ de 節分

長いなが～～い恵方巻を作りました。「せーのっ！」の掛け声でみんなで一斉に巻き、見事に綺麗な恵方巻が完成しました！



■2019.4.3 さくらツアー

観音山ファミリーパークでお花見♪昼食は登利平のお弁当。ボリューム満天！肌寒くて桜は満開ではなかったけれど、とても季節を感じられるツアードでした。

連携していただいている多業種の方々



■マッサージ レイス 様

入居者様の体のメンテナンスをお任せしています。マッサージを始めてから足の動きが良くなったとのお声を頂いています。週に2回の職員向けマッサージもしていただいており、働きやすい職場づくりの後押しもしてくださっています。



■本店タカハシ 様

創業明治8年！老舗の衣料品店が、出張でスプリングバーゲンを開催してくださいました。自分の好きなものを選び、購入されるお客様。自由に楽しく買い物ができました。サマーバーゲン開催も、今からワクワクしています。



■手作りハーバリウム教室
講師をお招きし、開催しました。各々の個性が輝く素敵な作品ができました。入居者様とそのご家族様と一緒に楽しんでいる姿は、とても微笑ましい光景です。職員向けの教室も好評で、次回の開催も楽しみです。



■ヘアサロン リノ 様

入居者様のカット、カラー、パーマなど、理美容をお任せしているサロンです。施設内で、本物の美容院に行くことができます。繊細な技術で施術してくださるので、入居者様からも好評です。



■焼きまんじゅう 飯玉屋 様

群馬のソウルフード焼きまんじゅう。昔懐かしの味に、おいしい、懐かしい！と、たくさんのお声をいただきました。移動販売のため、施設にいながら手軽に懐かしの味を楽しめます。



■ネピアテンダー 様

オムツを正しく適切に使用することで、入居者様と職員の両方の負担を軽減することができます。ネピアの方にお越しいただき、オムツのスペシャリスト「オムツマイスター」を育成する研修を行いました。

■おわりに…

早いもので、グランツようざんがオープンしてから1年が経ちました。この1年間、グランツ職員一同、同じ方向に向かって生活の豊かさを追求してきました。利用者様の自由と尊厳を守るためにどうしたらいいのか？一人一人が自由な発想を出し合いながら…。本当の生活とは何か？ということが私たちの頭の中には常にあります。それは、オープンから今まで変わりません。

グランツはまだまだ未完成。これから先、本当のグランツが完成するまで私たちは突っ走っていきます。職員は、ただのグループではありません。互いを尊重し合い、時には意見がぶつかり、それでも協力し合える『チーム』なのです。そんなチーム一丸となって、新しい形で、従来とは違う視点で改革し、施設らしくない尊厳のある施設を目指します。